南種子町埋蔵文化財発掘調査報告書（12）

横峯C遺跡

YOKO MINE

－農免農道整備事業西部中央２期地区に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書－

2005年3月

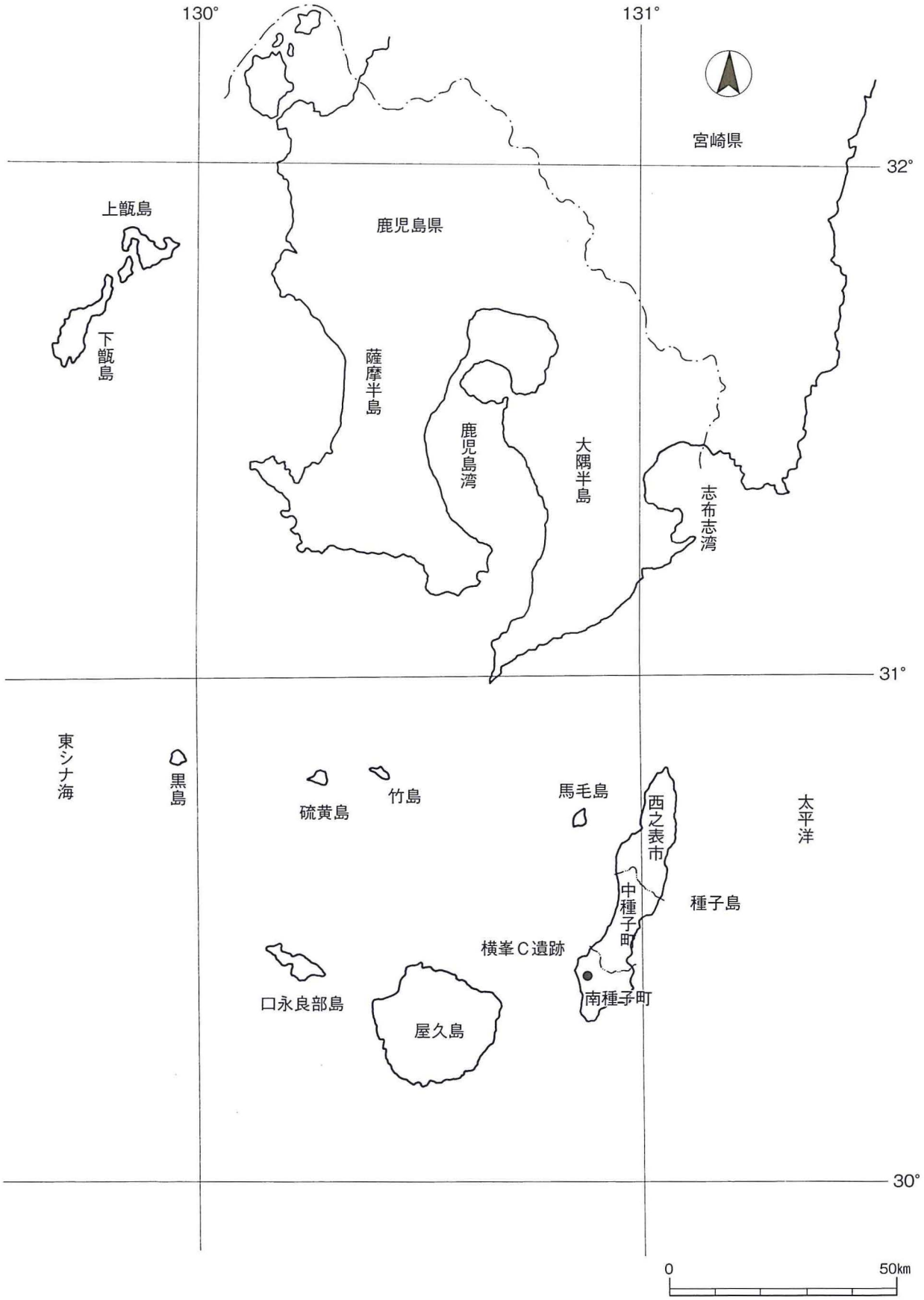
鹿児島県南種子町教育委員会

報告書抄録

ふりがな	よこみねCいせき
書名	横峯C遺跡
副書名	農免農道整備事業西部中央２期地区に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書
巻次	1
シリーズ名	南種子町埋蔵文化財発掘調査報告書
シリーズ番号	12
編集者名	石堂和博・中村真理
編集機関	南種子町教育委員会
所在地	〒891-3792　鹿児島県熊毛郡南種子町中之上2793-1　TEL0997-26-1111
発行年月日	2005年3月31日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査機関	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
よこみね 横峯C遺跡	かごしまけんくまげぐん 鹿児島県熊毛郡 みなみたねちょうしまま 南種子町島間 よこみね 横峯	5020		30° 26′ 22″	130° 52′ 34″	2002.7.11～ 2002.11.13 2003.6.18～ 2003.9.5	565㎡	農免農道 整備事業 西部中央 ２期地区

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
横峯C遺跡	散布地	旧石器時代	礫群２基 炭化物集中箇所	削器・台形様石器・礫器・石斧未製品・敲石・剥片	



第１図　横峯Ｃ遺跡位置図

例　　言

1．本報告書は，南種子町教育委員会が実施した農免農道整備事業西部中央２期地区に伴う横峯Ｃ遺跡の埋蔵文化財発掘調査報告書である。

2．横峯Ｃ遺跡は，平成４年度，平成８～10年度にも起因事業は違うが同一遺跡の調査が実施されている。年度別調査範囲については，第６図を参照されたい。

3．発掘調査は，確認調査を平成14年度，緊急発掘調査を平成15年度に実施し，報告書作成作業は平成16年度に実施した。

4．本報告書に用いたレベル数値は，鹿児島県農政部（熊毛支庁土地改良課）が作成した地形図に基づく海抜高である。

5．挿図の縮尺は各図ごとに示してある。

6．遺物番号は，本文及び挿図・図版番号と一致する。

7．本報告書の執筆分担は下記のとおりである。

第Ⅰ章	調査の経過	石堂
第Ⅱ章	遺跡の位置と環境	石堂
第Ⅲ章	調査の概要	石堂
第Ⅳ章	発掘調査の成果	
第１節	１．概要２．遺構	石堂
第１節	３．遺物	中村
第２節	１．概要２．遺構	石堂
第２節	３．遺物	中村
第Ⅴ章	まとめ	石堂・中村

第Ⅵ章については，目次と文頭に執筆者または機関を示した。

8．発掘調査における測量･実測・写真撮影は，石堂・徳田・峰山で行った。報告書作成に当たっては，鹿児島県立埋蔵文化財センター宮田栄二氏の指導を得た。また，写真撮影については鹿児島県立埋蔵文化財センター横手浩二郎氏の指導・協力を得た。石器の実測は，中村が行った。

9．本報告書の編集は，中村の協力を得て石堂が行った。

目　　次

序文
報告書抄録
遺跡位置図
例言

第Ⅰ章　調査の経過…… 1
　第１節　調査に至るまでの経過…… 1
　第２節　調査の組織…… 1
　第３節　調査の経過…… 2
第Ⅱ章　遺跡の位置と環境…… 5
　第１節　自然環境…… 5
　第２節　歴史的環境…… 6
第Ⅲ章　調査の概要……11
　第１節　これまでの調査の成果……11
　第２節　調査の概要・方法……23
　第３節　土層……24
第Ⅳ章　発掘調査の成果
　第１節　Ⅰ文化層の調査
　　１．概要……27
　　２．遺構……27
　　３．遺物……32
　第２節　Ⅱ文化層の調査
　　１．概要……43
　　２．遺構……43
　　３．遺物……47
第Ⅴ章　まとめ……53
第Ⅵ章　付編……59
　第１節　横峯Ｃ遺跡から出土した炭化材の樹種……パリノ・サーヴェイ株式会社……59
　第２節　横峯Ｃ遺跡第２次調査における砂岩製石器……中村　真理……62
　第３節　横峯Ｃ遺跡における砂岩製石器の抽出とその解釈…中村　真理……64

挿 図 目 次

第１図　横峯Ｃ遺跡位置図
第２図　遺跡周辺地形図…… 5
第３図　横峯Ｃ遺跡と町内遺跡分布図 ……10
第４図　横峯Ｃ遺跡地形図及びトレンチ配置図 ……12
第５図　横峯Ｃ遺跡畑地整備施工前の地形図……13
第６図　年度別調査区域図……14
第７図　Ⅰ文化層遺構配置図及び旧石器時代石器出土地点図……15
第８図　Ⅱ文化層遺構配置図及び旧石器時代石器出土地点図……17
第９図　平成8～10年度調査　旧石器時代遺構実測図(1) ……19
第10図　平成8～10年度調査　旧石器時代遺構実測図(2) ……20
第11図　平成8～10年度調査　旧石器時代出土遺物(1) ……21
第12図　平成8～10年度調査　旧石器時代出土遺物(2) ……22
第13図　標準層位模式図……24
第14図　土層断面図(1)……25
第15図　土層断面図(2)……26
第16図　Ⅰ文化層遺物出土状況図(1)……28
第17図　Ⅰ文化層遺物出土状況図(2)……29
第18図　Ⅰ文化層遺物出土状況図(3)……31
第19図　Ⅰ文化層出土石器(1)……32
第20図　Ⅰ文化層出土石器(2)……33
第21図　Ⅰ文化層出土石器(3)……34
第22図　Ⅰ文化層出土石器(4)……35
第23図　Ⅰ文化層出土石器(5)……36
第24図　Ⅰ文化層出土石器(6)……38
第25図　Ⅰ文化層出土石器(7)……39
第26図　Ⅰ文化層出土石器(8)……40
第27図　Ⅰ文化層出土石器(9)……41
第28図　Ⅰ文化層出土石器(10)……42
第29図　Ⅱ文化層遺物出土状況……44
第30図　８号礫群……45
第31図　９号礫群……45
第32図　８・９号礫群接合関係図……46
第33図　Ⅱ文化層出土石器……48
第34図　平成８年度出土Ⅰ文化層石器……63

表 目 次

第１表　遺跡地名表(1)…… 8
第２表　遺跡地名表(2)…… 9
第３表　遺物計測表……49
第４表　遺物・礫接合表……49
第５表　砕片計測表……50
第６表　礫群内礫計測表(1)……51
第７表　礫群内礫計測表(2)……52

図 版 目 次

図版①　炭化材……61
図版１　横峯Ｃ遺跡遠景・土層堆積状況……75
図版２　Ｉ文化層遺物出土状況・横峯Ｃ遺跡調査区全景・8，9号礫群（カラー）……76
図版３　８号礫群・９号礫群（カラー）……77
図版４　９号礫群取り上げ状況（カラー）……78
図版５　Ｉ文化層出土遺物・8，9礫群接合資料　17礫……79
図版６　調査前風景・重機使用状況・発掘調査風景・拡張トレンチ完掘　……80
図版７　１～９号炭化物集中箇所・6号炭化物集中箇所 ……81
図版８　10号炭化物集中箇所及びD-９区Ｉ文化層遺物出土状況・Ｉ文化層遺物出土状況　……82
図版９　遺物写真(1)……83
図版10　遺物写真(2)……84
図版11　遺物写真(3)……85
図版12　遺物写真(4)……86
図版13　遺物写真(5)……87
図版14　遺物写真(6)……88
図版15　遺物写真(7)……89
図版16　発掘作業参加者……90

第Ⅰ章　調査の経過

第１節　調査に至るまでの経過

鹿児島県農政部（以下，県農政部）は，南種子町島間地区において農免農道整備事業を計画し，事業区内の埋蔵文化財の有無について鹿児島県教育庁文化財課（以下，県文化財課）に照会した。

これを受けて鹿児島県文化財課と鹿児島県立埋蔵文化財センターそして南種子町教育委員会社会教育課（以下，町教育委員会）は，事業区域内の分布調査を実施した結果，横峯Ｃ遺跡（縄文早期・草創期・旧石器時代），稲野遺跡（弥生時代），横峯Ｅ遺跡（縄文・旧石器時代）の存在が判明した。

この分布調査の結果を基に，県農政部・南種子町農地整備課と町教育委員会は埋蔵文化財の保護と事業の調整を図るため協議を行い，事業着手前に確認調査を実施することにした。確認調査の結果，横峯Ｃ遺跡において旧石器時代の包含層が確認された。

確認調査の結果を基に、県農政部・南種子町農地整備課と県文化財課・町教育委員会は埋蔵文化財の保護と事業の調整を図るため協議を行った。その結果、事業計画の変更が不可能であることから、事業着手前の記録保存のための発掘調査を実施した。

第２節　調査の組織

(1) 調査主体	南種子町教育委員会		
(2) 調査総括	〃	教育長	髙口　稔（平成14年度～平成16年６月）
		教育長	竹迫　種俊（平成16年６月～）
(3) 調査事務	〃	社会教育課長	立石　靖夫（平成14年～平成14年11月）
	〃	社会教育課長	上山　幸夫（平成14年11月～）
	〃	主査	松山　りか（平成14年～平成16年度）
	〃	文化財主事	石堂　和博（平成14年～平成16年度）
(4) 調査担当	〃	文化財主事	石堂　和博（平成14年～平成15年度）
	〃	文化財主事	徳田有希乃（平成14年～平成15年度）
(5) 整理担当	〃	文化財主事	石堂　和博（平成16年度）
	東京大学大学院生		中村　真理（平成16年度）

整理指導者　鹿児島県立埋蔵文化財センター　宮田　栄二（平成16年度）

発掘調査作業従事者

田村勝也，小山孝幸，園田淳子，稲川ナナ子，今村スイ子，大川三枝子，頓所みさ子，西園六代，久保田かおり，大嵐まりこ，古市総代，立石英幸，泊口直江，柳田弘，寺川順子，小山田鶴子，

脇田和江，峰山鈴子，立石巧，立石静憲，砂坂信義，市坡あやの，砂坂エツ，飯田寧子，
久米由香，峰山いづみ，長田瑞穂，大嵐みちよ，砂坂トシ子，泉川誠，兼田美保，岩坪正美

報告書作成作業従事者
中村真理，西園六代，飯田寧子
その他，以下の方々からご指導・ご協力をいただいた。
安斎正人，沖田純一郎，坂口浩一，佐藤宏之，桑波田武志，牛ノ濱修，田平祐一郎，堂込秀人，
鎌田洋昭，中摩浩太郎，藤本強，早田勉，野平祐樹，松藤和人，森川実，森脇広，和田るみ子，
中原一成，橘昌信，辻本崇夫，馬籠亮道，冨田逸郎

第３節　調査の経過

発掘調査は，平成 14 年７月２日～ 11 月 13 日（61 日間），平成 15 年７月１日～ 11 月 13 日（41 日間），の実働 102 日間実施した。以下，調査の経過については日誌抄にて記載する。

平成 14 年度（平成 14 年７月 11 日～ 11 月 13 日）

７月２日（火）～７月 31 日（水）

オリエンテーション。発掘予定地の草払い実施後，平成４年度の調査に基づき，遺跡内に 10 m× 10 mグリッドを設定し，包含層の残存状況を見るための試掘トレンチを設定する。

試掘トレンチの表土剥ぎを重機で行い，攪乱層の除去を実施後，人力で掘り下げ，AT 層より上はほとんどの場所で現道造成時に攪乱を受けている事が判明する。AT 火山灰から下位は，攪乱を受けていないことが判明したので攪乱層を重機で除去した後，作業員により２m×２mの小グリッドを千鳥掘りし，遺跡の範囲確認を実施した。確認調査では，便宜的にＡ・Ｂ・Ｃ・Ｄ・Ｅ区を北側発掘区，Ｆ・Ｇ・Ｈ区を南側発掘区と呼称し，農作業への影響を配慮し，現道と県指定史跡横峯遺跡の間の緩衝地帯となっている箇所のみ千鳥掘りにより発掘し，遺跡の範囲を確認している。D-9 区で AT 下位から礫群が検出される。猛暑のため遮光ネットを張り作業を行う。バリケードの設置。台風接近のため台風養生をする。被害なし。島間小学校岩切教諭，町髙口稔教育長，社会教育課立石課長，農地整備課雨田係長，中種子町文化財担当田平・野平氏，町民２名見学。前担当者の町企画課坂口係長来跡，前回の調査成果を基に助言をいただく。

８月１日（木）～８月 12 日（月）

猛暑による空気の乾燥で土壁に亀裂と崩落が著しい。北側発掘区で種Ⅳ火山灰層確認。遺物を平板測量し取り上げ後，掘り下げ。南側発掘区は AT 上面まで掘り下げ。町民１名が見学にくる。

８月 19 日（月）～８月 28 日（水）

土壁の保護のヒビ割れ防止のため，散水する。北側発掘区は，種Ⅳ下位の掘り下げ。南側発掘区北側の AT 上面検出。乾燥により，土が非常に固くなり，掘り下げが困難である。定期的に散水する。台風接近のため，台風養生をする。

田平・野平氏，県埋蔵文化財センター上床氏，立石課長，町民３名来跡。

９月２日（月）～９月６日（金）

北側発掘区の千鳥掘り箇所のうち，作業の進展の早い箇所では，種Ⅲが確認される。南側発掘区全体でAT面検出。精査し，遺構確認をする。西側への遺跡の広がりをみるために，1.5ｍ×15ｍの拡張トレンチを設定。重機で表土をはぐ。台風接近のため天候が崩れやすい。町民2名来跡。

9月9日（月）～10月18日（金）

熊毛支庁との調整の結果，他事業の横峯Ｄ遺跡の確認調査を同時併行で行わざるをえなくなる。この期間は，横峯Ｃ遺跡の調査はあまりすすまなかった。主に西側拡張トレンチを掘り下げる。結果，西側拡張トレンチでは包含層は確認されなかった。写真記録をとり，トレンチ配置図，土層断面図作成後，拡張トレンチを重機で埋め戻す。南側発掘区ＡＴ下の精査，掘り下げ。南側発掘区で風倒木の痕跡が確認される。遺物の平板取り上げ後，南側発掘区南側の種Ⅳ下位の精査，掘り下げ開始。立石課長，田平氏，町民6名，雨田係長，大脇係長，熊毛支庁職員2名，県埋蔵文化財センター牛ノ濱氏来跡。検出した礫群を見学。

10月21日（月）～10月30日（水）

北側発掘区のⅠ文化層（種Ⅳ下）の掘り下げ。種Ⅲ面検出。炭化物集中箇所が確認され，実測，写真記録を行う。炭化物のサンプリングを行う。礫群の写真記録。遺物の平板記録。

南側発掘区のⅠ文化層の掘り下げ。種Ⅲ検出。風倒木を半裁，実測，写真記録。遺物の平板記録作成。調査区全体の写真記録及び，土層断面図・トレンチ配置図作成。町文化財保護審議会羽生委員長来跡。

11月5日（火）～11月11日（金）

南側発掘区のベルトはずし。未掘である現道箇所の包含層の残存状況を見るために，試掘トレンチをいれ，全面調査が必要な範囲を確認。礫群及び炭化物集中箇所を白砂とブルーシートで保護をした後，重機で埋め戻す。プレハブ・道具類の撤収。

平成15年度（平成15年7月1日～11月13日）

6月18日（水）～6月26日（木）

表土及び攪乱層を重機で除去。雨天が多い。グリット設定。発掘機材等の搬入・準備。

6月27日（金）～7月4日（金）

オリエンテーション。作業員をいれての調査開始。E-9・F-9・G-9区を人力で掘り下げ。Ⅶ層中でⅧ層（スコリア）のブロックを確認。サンプリングする。D-9・C-9・B-9区の掘り下げ開始。礫群を再検出する。

7月7日（月）～7月11日（金）

E-9・F-9・G-9区のAT層検出，Ⅱ文化層の調査開始。F-9区で礫が出土する。

7月16日（水）～7月18日（金）

鹿児島大学森脇教授来跡，火山灰及び周辺地形についての指導をいただく。森脇教授に，Ⅶ層のスコリア等サンプリングした資料の一部を提供する。E-9・F-9・G-9区のⅡ文化層掘り下げ。中種子町田平氏，野平氏，元西之表市総合開発センター所長鮫島安豊氏来跡。

7月22日（月）～7月30日（水）

猛暑のため遮光ネットの張り作業を行う。土が固く乾き作業がはかどらない。土壁のヒビ割れ

防止と土の乾燥対策のため，散水する。7月は横峯D遺跡の調査と同時併行で行っているため，作業がなかなか進展しない。B-9・C-9・D-9区で種Ⅳ火山灰層検出。同区の写真記録，遺物の平板取り上げ，その他記録保存を行う。島間地区公民館長柳田博氏来跡。

8月1日（金）～8月5日（火）

昨年度発掘した場所の掘り残し部分の調査。また，B・D・E-9区のⅠ文化層の掘り下げ開始。台風が接近。台風対策をする。

8月11日（月）～8月19日（火）

先週は，台風の影響で荒天であった。B・C・D・E・F-9区のⅠ文化層の調査。炭化物集中箇所検出。発掘区の平板測量。F-9区で種Ⅲ火山灰層確認。遺物平板取り上げ。写真等による記録保存。G・H-9・10区の1文化層掘り下げ。町民5名見学。

8月20日（水）～8月22日（金）

各区の1文化層精査。8号礫群の写真記録，図面作成。炭化物集中箇所の精査，写真記録，図面作成。

8月25日（月）～8月29日（金）

8号礫群の半さい。9号礫群検出。D-9区の遺物出土状況図作成及び写真記録。各土層断面図作成。9号礫群の実測図作成。写真記録。県文化財課に礫群が新たに検出されたことを報告。町単独費で，9号礫群を薬剤で固め，移転保存することにする。各ベルトの取り外しを行う。

9月1日（月）～9月5日（金）

土層断面図の作成。ベルトの取り外し。9号礫群埋め戻し（平成16年6月に再調査し，南種子町郷土館に移設保存した）。発掘機材等の撤収。重機による調査区の埋め戻し。

第Ⅱ章　遺跡の位置と環境

第１節　自然環境

横峯Ｃ遺跡の所在する種子島は，面積 447.09k ㎡，南北 52 km，東西 12 km，最高海抜 282.3 ｍの低平な島で，大隅半島最南端の佐多岬から南東約 40 kmの洋上に位置する。亜熱帯性自然の北縁部で太平洋のサンゴ礁の北限にあたり，島の南東を黒潮の本流が流れる。

遺跡の所在する種子島南部西海岸側には，何段も海成段丘が発達している。一方，東海岸側は段丘の発達がわるく，浸食がすすみ溺れ谷の地形が目立つ。こうした対照的な地形は基盤岩の侵食抵抗性の違いによるもので，遺跡の所在する西海岸側は，古第三紀四万十累層群上部の熊毛層群を基盤とする堅硬な砂岩・頁岩互層を主体とし，東海岸側は軟弱な泥岩と砂礫で構成される。種子島は九州の中でも有数の海岸段丘の発達がみられるとともに，阿多テフラや鬼界葛原テフラ等の後期第四期の広域指標テフラが複数分布するため，各段丘の形成年代の解明がすすんでいる。横峯遺跡の位置する段丘面は，酸素同位体ステージ 5e の海面停滞期に形成されたと推定されている（町田 2001）。

遺跡は，東から西方向へ緩やかに傾斜する標高 120m の島間台地上に位置する（第２図）。遺跡周辺は，岩石台地に分類され，いくつもの谷が入り込んでおり，いわゆる八つ手状の地形を呈している。遺跡近辺の露頭では種Ⅲ・Ⅳテフラはもとより，その下位からは鬼界葛原テフラ及び阿多テフラの堆積が確認されている。各テフラの間には土壌層が形成されていて，旧石器時代の研究の上で重要なフィールドと考えられる。

第２図　遺跡周辺地形図

第２節　歴史的環境

南西諸島は，大きく三つの文化圏に分けられる（国分 1972)。九州本土の文化を強く受けている薩南諸島（種子島・屋久島）を北部圏，南九州の影響を受けつつも独自の土器文化圏を発達させた地域（奄美諸島・沖縄諸島）が中部圏，日本文化の影響が殆ど及ばず台湾・フィリピンなどの強い南方文化が特色の地域（先島諸島）が南部圏である。

以下，北部圏に属する種子島の南種子町所在の遺跡を中心に時代ごとに記述したい。なお，（　）内の数字は，第３図及び第１～２表の遺跡番号に対応する。

旧石器時代

種子島で初めて旧石器時代の遺跡が確認されたのは，1992 年の横峯Ｃ遺跡（21）の発掘によってであり，ＡＴ火山灰，種Ⅳ火山灰，種Ⅲ火山灰等の鍵となる火山灰層に挟まれた文化層から後期旧石器時代初頭の礫群をはじめ、敲石などの石器がみつかっている。1996 年には鮫島安豊氏らにより細石核が西之表市湊遺跡で表採され，細石器文化も確認された。その後，中種子町立切遺跡及び同町今平・清水遺跡において後期旧石器初頭の遺構・遺物が検出された。また西之表市大中峯遺跡（桑波田・大久保 2000)，中種子町三角山Ｉ遺跡，銭亀遺跡（24）などでは船野型の細石核が確認されている。ナイフ形石器文化は確認されていない。

縄文時代

草創期の遺跡は，隆帯文土器が表採された横峯Ｃ遺跡（21)，横峯Ｄ遺跡（39）がある。種子島では，西之表市奥ノ仁田遺跡，同市鬼ヶ野遺跡，中種子町三角山遺跡などに類似する土器が出土している。また，鬼ヶ野遺跡ではこの時期の豊富な石器群も伴い注目される。

早期の遺跡は，岩本式土器の出土が上平遺跡（35)，中種子町園田遺跡，西之表市西俣遺跡で知られる。西俣遺跡では，早期円筒形土器の外底部に網代圧痕が確認される資料が１点あり，縄文後期によく見られる網代痕が，早期まで遡ることを示し興味深い。他にも吉田式土器の出土した長谷遺跡（1)，昭和 62 年に発掘調査を行い塞ノ神式土器の出土した小牧遺跡（14)，平成７年に発掘調査を行い塞ノ神式土器や磨製石鏃の出土した石ノ峯遺跡（36)，平成 14 年に苦浜式土器などが表採された枯木野隅遺跡（72）がある。押型文土器は，西之表市久保田遺跡でアカホヤ火山灰層下層より崖面表採されており（鮫島 1989)，手向山式土器に該当する。鹿児島県市町村別遺跡地名表によれば中種子町油久奈佐田遺跡でも押型文土器が確認されているようだが，資料は現在確認することが出来ず，また記載の経緯も不明である。

前期の遺跡では，昭和 62 年に発掘調査をした平六間伏遺跡（15)，赤石牟田遺跡（2)，轟式土器の出土した上平遺跡（35)，西之表市泉原遺跡などがある。

後期の遺跡は，一湊式土器だけの単純遺跡である野大野Ａ遺跡（18）や，茶木久保遺跡（23)，田尾遺跡（4)，市来式土器・丸尾式土器の出土した松原遺跡（11)，大規模な配石遺構で知られる藤平小田遺跡（38）などがある。西之表市大花里一之鳥居貝塚は，指宿式土器を主体とする後期の土器が表採されている（関 1989)。なかでも磨消縄文土器が確認されていて，注目される。

晩期の遺跡は，黒川式土器や人骨・貝製品などの出土した一陣長崎鼻貝塚（5），松原遺跡（11）広田Ⅳ遺跡（73）などがある。一陣長崎鼻貝塚は，黒川式の単純遺跡で貝塚内からは猿の骨等が検出されている。中種子町大園遺跡は，縄文時代晩期の黒川式土器を主体とする遺跡で，器壁が約1.5㎝と厚く，粗製の土器である。また，丹塗りの研磨土器で大洞C2式土器の特徴を残すものも1点確認されており，注目される。

弥生時代

平山の広田海岸に面する砂丘に立地する埋葬遺跡の広田遺跡（25）が著名である。100体以上の人骨が3層にわたり，異なった習俗で埋葬され，副葬品に南海産の貝を利用した夥しい数の貝製品を使用している。その他の遺跡には，本村塚の峯遺跡（8），本村丸田遺跡（9），浜田嵐遺跡（6）がある。

歴史時代

平安時代の掘立柱建物跡の検出された本村丸田遺跡（9）が知られている。中世の遺跡としては、藤平小田遺跡（38）や中世の山城とされる上妻城址（13）が知られている。中種子町大園遺跡では，中世の掘立柱建物跡が5棟検出されている。

[引用参考文献]

南種子町教育委員会	『横峯C遺跡』	南種子町埋蔵文化財発掘調査報告書(8)	2000
中種子町教育委員会	『立切遺跡』	中種子町埋蔵文化財発掘調査報告書(4)	2002
中種子町教育委員会	『立切遺跡』	中種子町埋蔵文化財発掘調査報告書(6)	2003
広田遺跡学術調査研究会・鹿児島県立歴史資料センター黎明館	『種子島　広田遺跡』		2003
南種子町郷土誌編纂委員会	『南種子町郷土誌』		1987
西之表市教育委員会	『奥ノ仁田遺跡・奥嵐遺跡』	西之表市埋蔵文化財発掘調査報告書(7)	1995
西之表市教育委員会	『鬼ヶ野遺跡』	西之表市埋蔵文化財発掘調査報告書(14)	2004
鹿児島県立埋蔵文化財センター	『三角山Ⅰ遺跡（P地点）』	鹿児島県立埋蔵文化財発掘調査報告書(46)	2002
鹿児島県立埋蔵文化財センター	『柿内遺跡・大園遺跡・西俣遺跡』	鹿児島県埋蔵文化財発掘調査報告書(24)	1999
桑波田武志・大久保浩二	「種子島の細石器－西之表市大中峯遺跡資料の紹介－」	『人類史研究12』	2000
鮫島安豊	「種子島北端出土の押型文土器」	『潮流3号』	1989
関　一之	「大花里一之鳥居貝塚採集の土器」	『潮流3号』	1989
町田　洋	「南西諸島」	『日本の海成段丘アトラス』	2001
国分直一	「南島先史時代の研究」	『考古民俗叢書10』	1972

第１表　遺跡地名表(1)

番号	遺跡名	所在地	地形	時代	遺物等	備考
81-1	長谷（はせ）	中之上赤石牟田	台地	縄文（早期）	吉田式	表面調査による出土
81-2	赤石牟田（あかいしむた）	〃	〃	縄文（早期･前期）	曽畑式・塞ノ神式・石鏃 黒曜石片・石匙・石斧・集石	平成4年分布調査
81-3	野大野（のおおの）	西之　野大野	〃	縄文（後期）	市来式・磨製石斧・敲石	表面調査による出土
81-4	田尾（たお）	島間　田尾	〃	〃（〃）	市来式・磨製石斧磨石・敲石・石皿	〃
81-5	一陣長崎鼻貝塚（いちじんながさきばなかいづか）	中之下　一陣	低地	縄文（晩期）	黒川式・磨製石斧・骨製髪飾り 骨錘・貝輪・人骨・獣魚骨・貝類	昭和31年発掘調査
81-6	浜田嵐（はまだあらし）	平山　嵐シ	〃	弥生（中期）	土器片（須玖式）	
81-7	広田（ひろた）	平山　奥ノ園	〃	弥生（中期･後期） 古墳（前期）	弥生土器・人骨113体余 貝製品・紡錘車・石錘 鉄製鈎針・獣魚骨・貝類	昭和32～34年発掘調査 埋葬址考古学雑誌43巻3号,日本考古学協会発表（24回総会）,福岡医学雑誌52巻8号,種子島民族集7号広田の民族,種子島広田遺跡
81-8	本村塚の峯（ほんむらつかみね）	西之塚の峯	山地	弥生（後期）	土器片	
81-9	本村丸田（ほんむらまるた）	西之　丸田	〃	縄文（後期） 弥生（後期） 平安	指宿式・市来式・曽畑式 石斧・磨石・弥生土器 土師器・須恵器・陶磁器	昭和60年発掘調査 南種子町埋蔵文化財発掘調査報告書(1)
81-10	本村宇都（ほんむらうと）	西之宇都	〃	弥生（後期）	土器片	
81-11	松原（まつばら）	茎永　堤ノ小田	低地	縄文（後期･晩期） 古代	集石・市来式・丸尾式・指宿式・石斧 磨石・石皿・土師器・須恵器・青磁	平成4年発掘調査 南種子町埋蔵文化財発掘調査報告書(5)
81-12	上里城址（かみざとじょうし）	茎永　野久尾山	山地	中世		中世城館跡（昭和58年県文化課調査）
81-13	上妻城址（こうづまじょうし）	島間　内城	〃	〃		〃（〃） 南島考古第23号「南種子町上妻城について」
81-14	小牧（こまき）	中之上　小牧	台地	縄文（早期）	塞ノ神式・磨石・敲石	昭和62年発掘調査 南種子町埋蔵文化財発掘調査報告書(2)
81-15	平六間伏（へいろくまぶし）	中之上平六間伏	〃	縄文・古墳	土器片・石斧	南種子町埋蔵文化財発掘調査報告書(2)
81-16	上瀬田A（うわせだ）	西之　上瀬田	〃	縄文	土器片	平成2年確認調査 南種子町埋蔵文化財発掘調査報告書(3)
81-17	上瀬田B（うわせだ）	〃	〃	〃	〃	昭和63年分布調査 平成15年確認調査
81-18	野大野A（のおおの）	西之　野大野	〃	縄文（後期）	一湊式・敲石・磨石・石皿	平成2年発掘調査 南種子町埋蔵文化財発掘調査報告書(3)
81-19	横峯A（よこみね）	島間　横峯	〃	縄文	土器片	平成3年分布調査
81-20	横峯B（よこみね）	〃	〃	縄文（早期）	土器片・磨製石斧	平成4年確認調査
81-21	横峯C（よこみね）	〃	〃	旧石器 縄文(草創期･早期)	礫群・礫器・隆帯文・集石・石鏃・石斧 敲石・塞ノ神式・苦浜式・轟式	平成4･8～10･14･15年発掘調査 南種子町埋蔵文化財発掘調査報告書(4) 南種子町埋蔵文化財発掘調査報告書(8)
81-22	下鹿野（しもかの）	島間　下鹿野	〃	縄文・古代・中世	石鏃・土器片	平成13年分布調査(周知の遺跡拡大) 平成16年度確認調査
81-23	茶木久保（ちゃきくぼ）	島間　茶木久保	〃	縄文（後期）	土器片・石鏃	平成6年確認調査
81-24	銭亀（ぜにがめ）	西之　銭亀	〃	縄文（早期）	下剥峯式・桑ノ丸式・天道ヶ尾式 前平式･マイクロコア･マイクロブレード	平成12年発掘調査
81-25	駒取野（こまどりの）	西之　駒取野	〃	縄文	土器片	平成4年分布調査
81-26	安久保（やすくぼ）	西之　安久保	〃	縄文（早期）	吉田式	平成14年確認調査
81-27	西之大宮田（にしのおおみやでん）	西之　大宮田	低地	中世	染付・土師器	平成4年分布調査
81-28	真所汐入A（まどころしおいり）	中之下　東真所汐入	〃	〃	染付・青磁・白磁・土師器	〃
81-29	上松原汐入（かみまつばらしおいり）	茎永上松原汐入	〃	〃	製塩土器	〃
81-30	松原山（まつばらやま）	茎永　松原山	〃	縄文	台石	〃
81-31	友心汐入A（ゆうしんしおいり）	茎永　友心汐入	〃	中世	土師器	〃
81-32	友心汐入B（ゆうしんしおいり）	〃	〃	〃	〃	〃
81-33	福ヶ野A（ふくがの）	平山　福ヶ野	台地	縄文	土器片	〃
81-34	福ヶ野B（ふくがの）	〃	〃	縄文（前期･後期） 古墳？	縄文土器・成川式？	〃
81-35	上平（うえのたいら）	平山　上平	〃	縄文（早期･前期） 中世	岩本式・轟式・石鏃・石斧・青磁	平成10年発掘調査 南種子町埋蔵文化財発掘調査報告書(11)

第２表　遺跡地名表(2)

番号	遺　跡　名	所　在　地	地形	時　　代	遺　物　等	備　　考
81-36	石ノ峯（いしのみね）	中之上　石ノ峯	台地	縄文（早期）	磨製石鏃・磨石・敲石・石皿 塞ノ神式・平栫式	平成7年発掘調査 南種子町埋蔵文化財発掘調査報告書(6)
81-37	摺久保（すりくぼ）	中之上　摺久保	〃	縄文（早期） 弥生	塞ノ神式・弥生土器片	平成7年確認調査
81-38	藤平小田（とうべいおだ）	島間　藤平小田	〃	縄文（後期） 中世	市来式・丸尾式・指宿式・松山式・一湊式・台付皿など・石鏃・石斧・磨石・敲石・凹石・石皿・石製品など・配石遺構・集石・大型土坑・染付・土師器・青磁・掘立柱建物跡	平成10年発掘調査により消滅 南種子町埋蔵文化財発掘調査報告書(9)
81-39	横峯D（よこみねD）	島間　横峯	〃	縄文（草創期）	隆帯文	平成7年分布調査・平成13･14年確認調査 平成15年発掘調査 南種子町埋蔵文化財発掘調査報告書(13)
81-40	塩浦田（しおうらでん）	西之　塩浦田	〃	古代	土器片	平成13年確認調査
81-41	今平（いまだいら）	西之　下今平	〃	縄文（早期）	塞ノ神式・轟式・石鏃 石匙・チップ	平成13年発掘調査 南種子町埋蔵文化財発掘調査報告書(10)
81-42	新牧（しんまき）	西之　新牧	〃	〃（〃）	土器片・石鏃・石皿・石斧	平成9年発掘調査
81-43	橋久保（はしくぼ）	西之　橋久保	〃	旧石器	礫群	平成13年確認調査
81-44	龍庵坂（りゅうあんざか）	西之　龍庵坂	〃	縄文（早期）	前平式・吉田式・石鏃	平成13年発掘調査 南種子町埋蔵文化財発掘調査報告書(10)
81-45	横峯E（よこみねE）	島間　横峯	〃	旧石器・縄文		平成10年分布調査・平成14年確認調査
81-46	稲野（いなの）	島間　稲野	〃	弥生	土器片	平成10年分布調査 平成14年確認調査
81-47	丸野（まるの）	中之上　丸野	〃	縄文	〃	〃
81-48	笹（ささ）	中之上　笹	〃	〃	〃	〃
81-49	徳丸ヶ野（とくまるがの）	西之　徳丸カノ	〃	縄文（後期）中世	市来式・松山式・磨石・敲石・石皿	平成10年分布調査
81-50	高鼻（たかはな）	西之　高鼻	〃	古墳	土器片	平成10年分布調査
81-51	有尾（ありお）	中之上　有尾	〃	縄文	〃	平成7年分布調査
81-52	高峯（たかみね）	島間　高峯	〃	縄文（後期）	〃	平成10年確認調査
81-53	西大曲（にしおおまがり）	中之下　西大曲	〃	縄文	〃	平成7年分布調査
81-54	椿山A（つばきやま）	中之上　椿山	〃	〃	〃	平成8年分布調査
81-55	椿山B（つばきやま）	〃	〃	縄文（早期）	塞ノ神式	〃
81-56	堂ノ中野（どうのなかの）	中之下堂ノ中野	〃	縄文	土器片	平成9年分布調査
81-57	有鹿野（ありかの）	島間　有鹿野	〃	縄文（後期）	市来式・磨石・敲石・石斧	平成13年分布調査(周知の遺跡拡大) 平成16年確認調査
81-58	椿山C（つばきやま）	中之上　椿山	〃	縄文	土器片・磨石	表面調査による出土
81-59	広田Ⅱ（ひろた）	平山　奥浜渡	低地	近世	人骨4体・寛永通宝	平成11年発掘調査
81-60	神山峯（かみやまみね）	西之　神山峯	台地	縄文	磨石・土器片	平成13年分布調査
81-61	長畑（ながばたけ）	西之　長畑	〃	〃	土器片	〃
81-62	高田（たかだ）	中之下　高田	低地	中世	〃	〃
81-63	濱ノ田汐入（はまのたしおいり）	中之下濱ノ田汐入	〃	古代・中世	〃	平成15年確認調査
81-64	真所汐入B（まどころしおいり）	中之下西真所汐入	〃	〃	〃	平成15年確認調査
81-65	真所汐入C（まどころしおいり）	〃	〃	中世	〃	平成13年分布調査
81-66	日ノ丸（ひのまる）	西之　本村	〃	古代	〃	平成16年確認調査
81-67	久保田（くぼた）	中之下　久保田	〃	中世・近世	〃	平成13年分布調査
81-68	坂元田（さかもとでん）	中之下　坂元田	〃	古代・中世	〃	平成16年確認調査
81-69	植松（うえまつ）	西之　植松	台地	縄文	〃	平成16年確認調査
81-70	藤七畑（とうしちばたけ）	中之下　藤七畑	〃	〃	〃	平成16年確認調査
81-71	広田Ⅲ（ひろた）	平山　大町汐入	低地	縄文（後期）	〃	平成8年分布調査・平成16年確認調査
81-72	枯木野隅（かれきのすみ）	中之上　枯木野隅	台地	縄文（早期）	苦浜式土器・石匙・磨石	平成14年分布調査

第３図　横峯Ｃ遺跡と町内遺跡分布図

第Ⅲ章　調査の概要

第１節　これまでの調査の成果

ここでは，これまでの横峯Ｃ遺跡の調査成果と県指定史跡に指定された経緯について若干触れておきたい。

横峯遺跡は，平成４年度に県営緊急畑地帯総合整備事業（横峯地区）に伴い行われた緊急発掘調査によって，苦浜式土器等や集石が検出された縄文時代早期の包含層と種Ⅳ火山灰の下層から２基の礫群が検出され，種子島で初めて後期旧石器時代の文化層が確認された遺跡である。町では，遺跡の保存を図るため，平成７年に町史跡として文化財指定した。

その後，平成８年から平成10年まで，南種子町教育委員会がおこなった重要遺跡確認調査によって，縄文時代早期・草創期の包含層のほか，旧石器時代の３時期に渡る文化層が確認されている。

旧石器時代の各文化層は，火山灰を間層として明瞭に区分されている。AT火山灰層上位に設定されたⅢ文化層，AT火山灰層下位，種Ⅳ火山灰層上位に設定されたⅡ文化層，そして，種Ⅳ火山灰層下位，種Ⅲ火山灰層上位に設定されたⅠ文化層である。

重要遺跡確認調査では，遺跡の保存を前提としたため，各層で遺構が検出された場合は，基本的にその面で調査をやめている。このため，第7，8図にあるように，下層にいけばいくほど調査面積は狭くなっており，種Ⅳ火山灰層下位のⅠ文化層で約454㎡，Ⅱ文化層で約540㎡の範囲の調査がなされている。

各文化層の年代は，加速器質量分析法（C14AMS法）による炭化物の年代測定結果から，Ⅰ文化層の１号礫群が31290 ± 690，２号礫群で29660 ± 540，Ⅱ文化層の種Ⅳ火山灰層直上の台石周辺で30480 ± 590，やや上位の５トレンチ礫群で29300 ± 520の数値がでている。

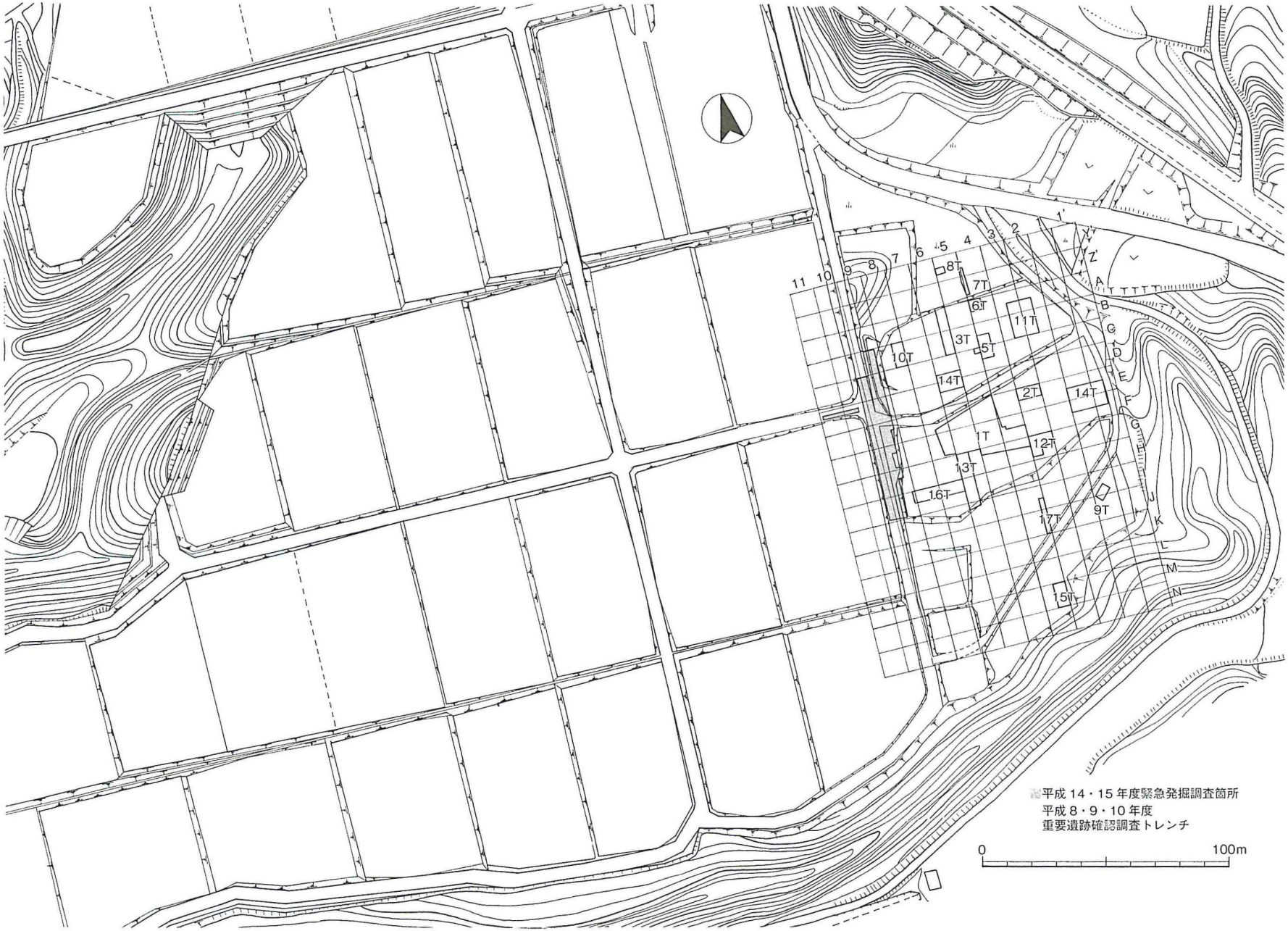
横峯Ｃ遺跡のこれまでの調査成果を旧石器時代に焦点を絞って概観すると，Ⅰ文化層からは，礫群３基，敲石１点が検出されている。礫群は第9，10図にあるように，掘り込みを持ち集中する１号・２号礫群と，礫が散在する４号礫群の２タイプに分けられる。また，伴出した石器で，前回の報告書で報告されているものは，第11図①の敲石１点のみであるが，今回新たに，２点石器を報告しているので，第Ⅵ章付編第２節を参照されたい。

Ⅱ文化層では，第9，10図に示した４基の礫群及び火処遺構と第11・12図②～⑫の台石・敲石・磨石・礫器・石核・剥片類計11点の石器が確認されている。礫群は，環状となっており周辺にばらけた礫が散在する３号礫群と，その他の散在するタイプのものがある。

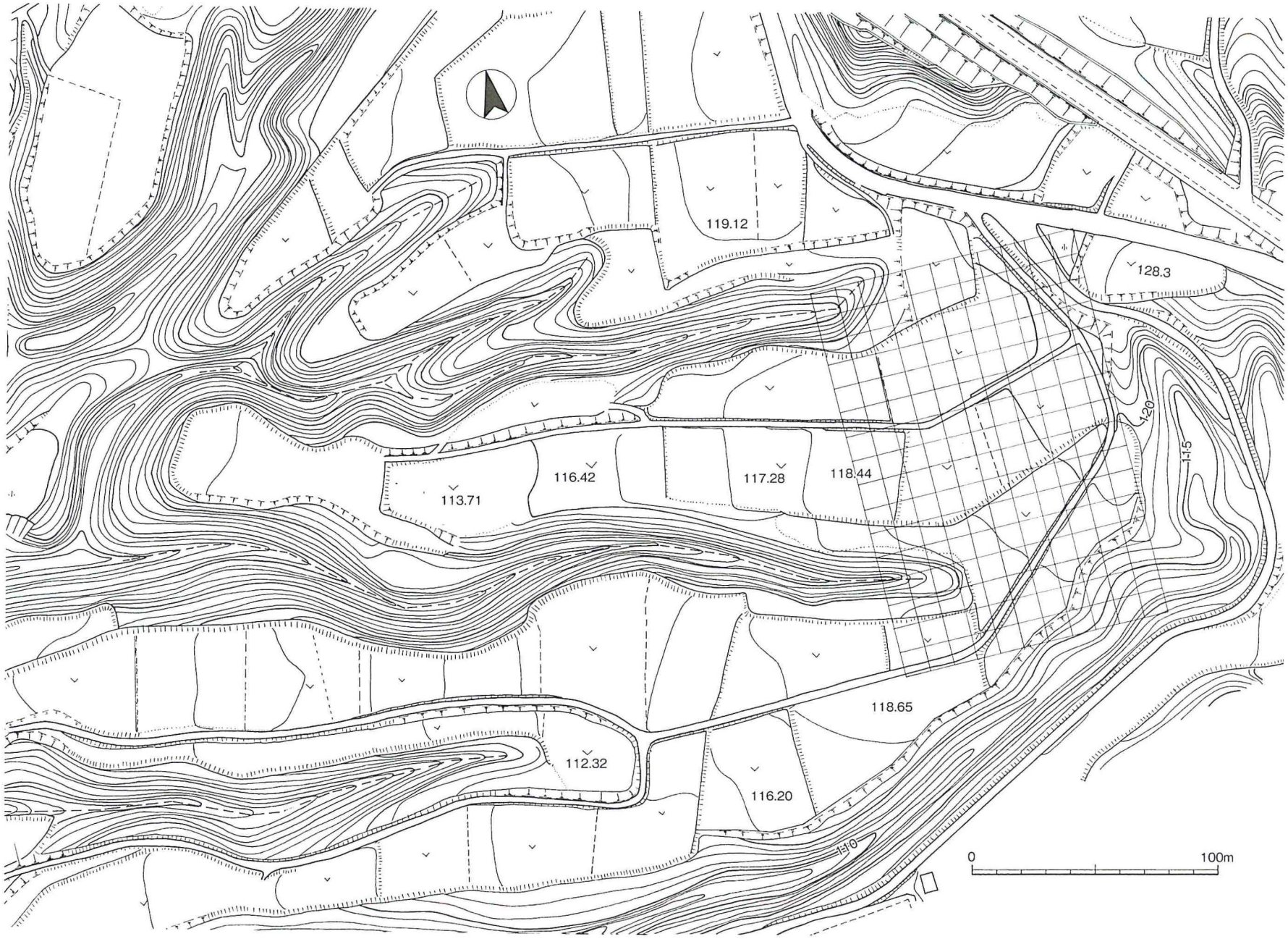
Ⅲ文化層では，第10図の土坑１基と，第12図⑬の敲石が１点出土している。また，表採資料ではあるが，第12図⑭の細石器も表採されている。

平成８～10年の発掘調査終了後，礫群は取り上げを行わず埋め戻して現地保存がなされた。

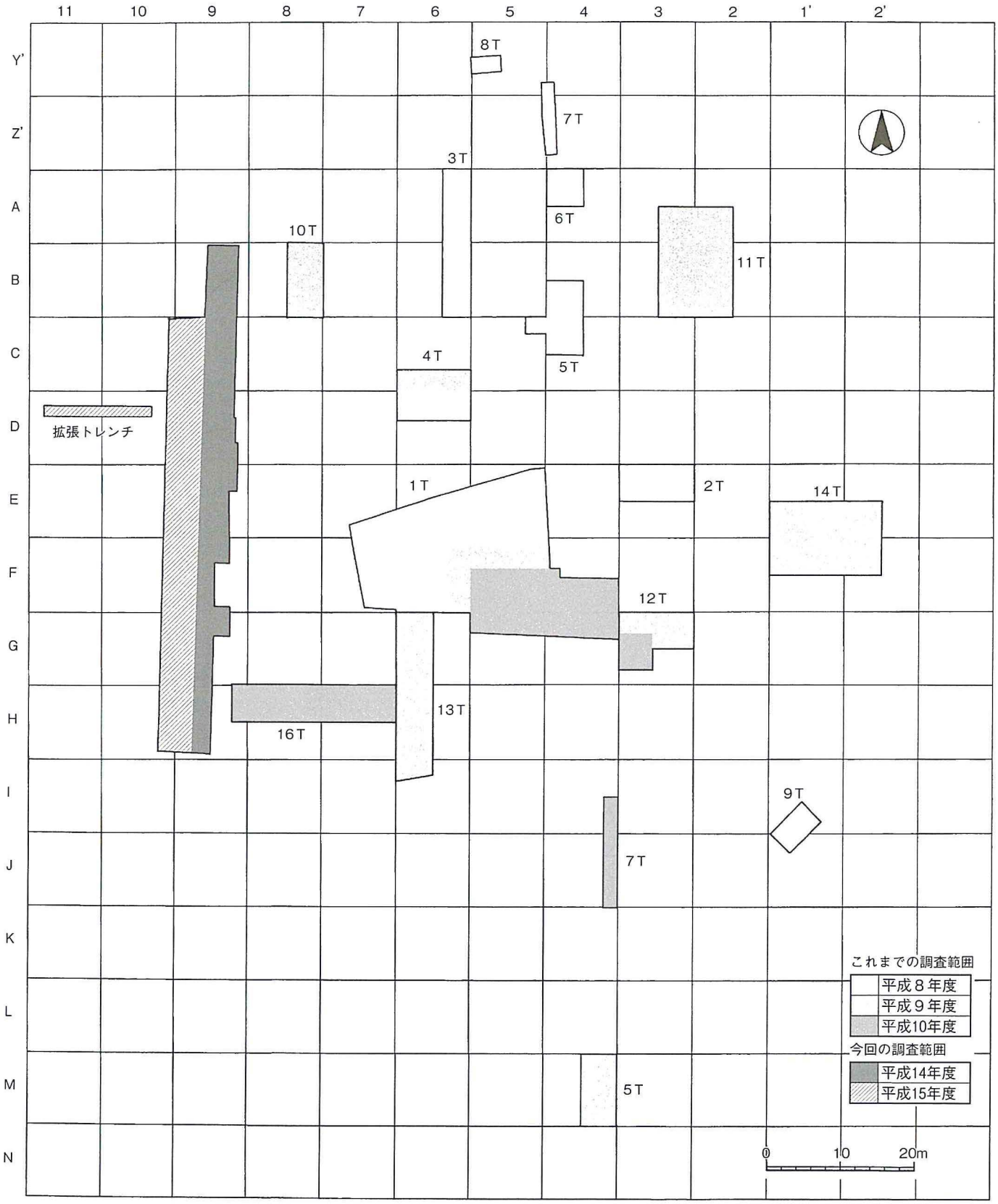
また，平成13年には町指定地の一部を公有化することによって遺跡の保存を図っている。そして，平成15年には，琉球列島の旧石器文化の成立やその性格・内容を研究するうえで貴重な遺跡であることから県指定文化財に指定された。



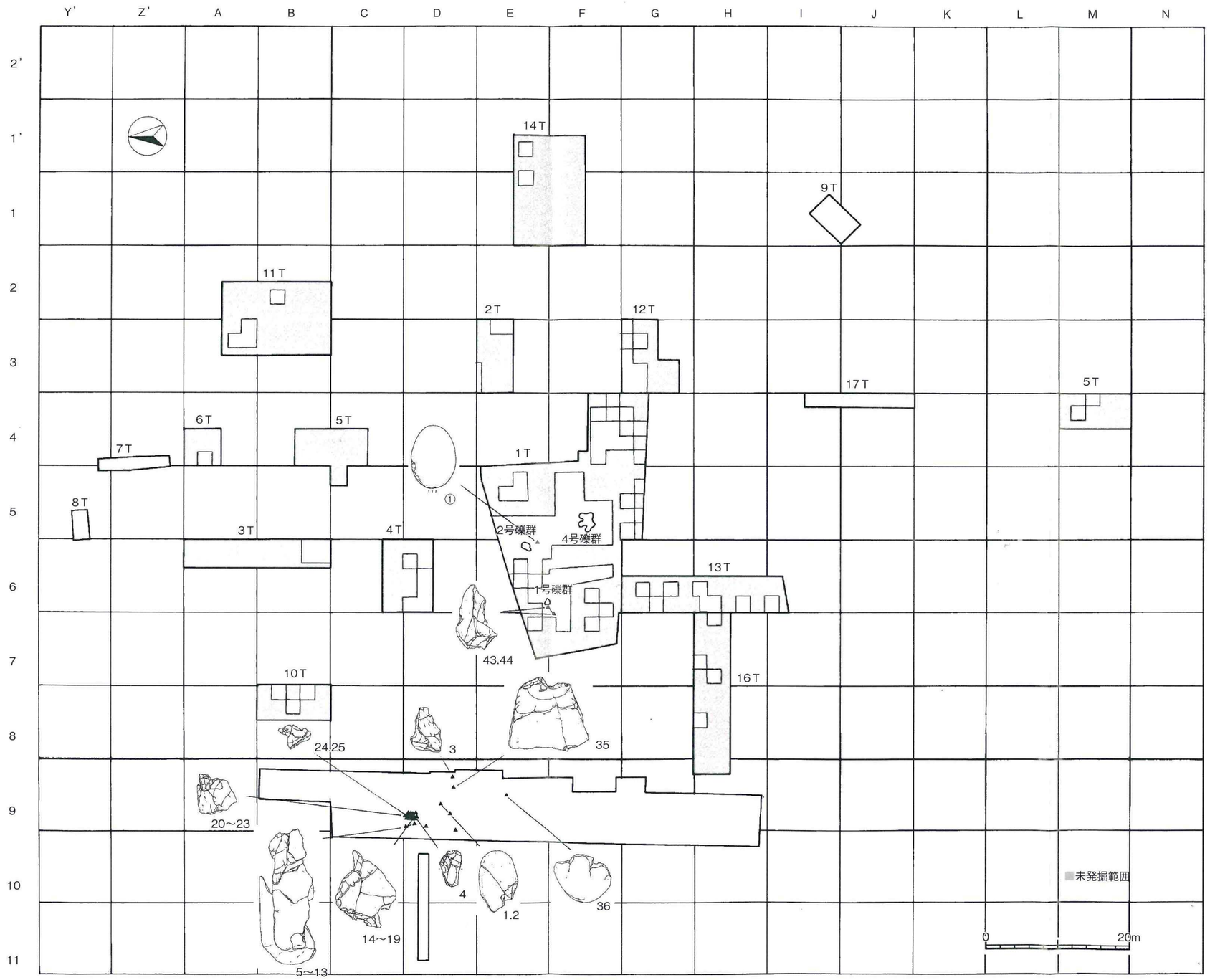
第４図　横峯Ｃ遺跡地形図及びトレンチ配置図



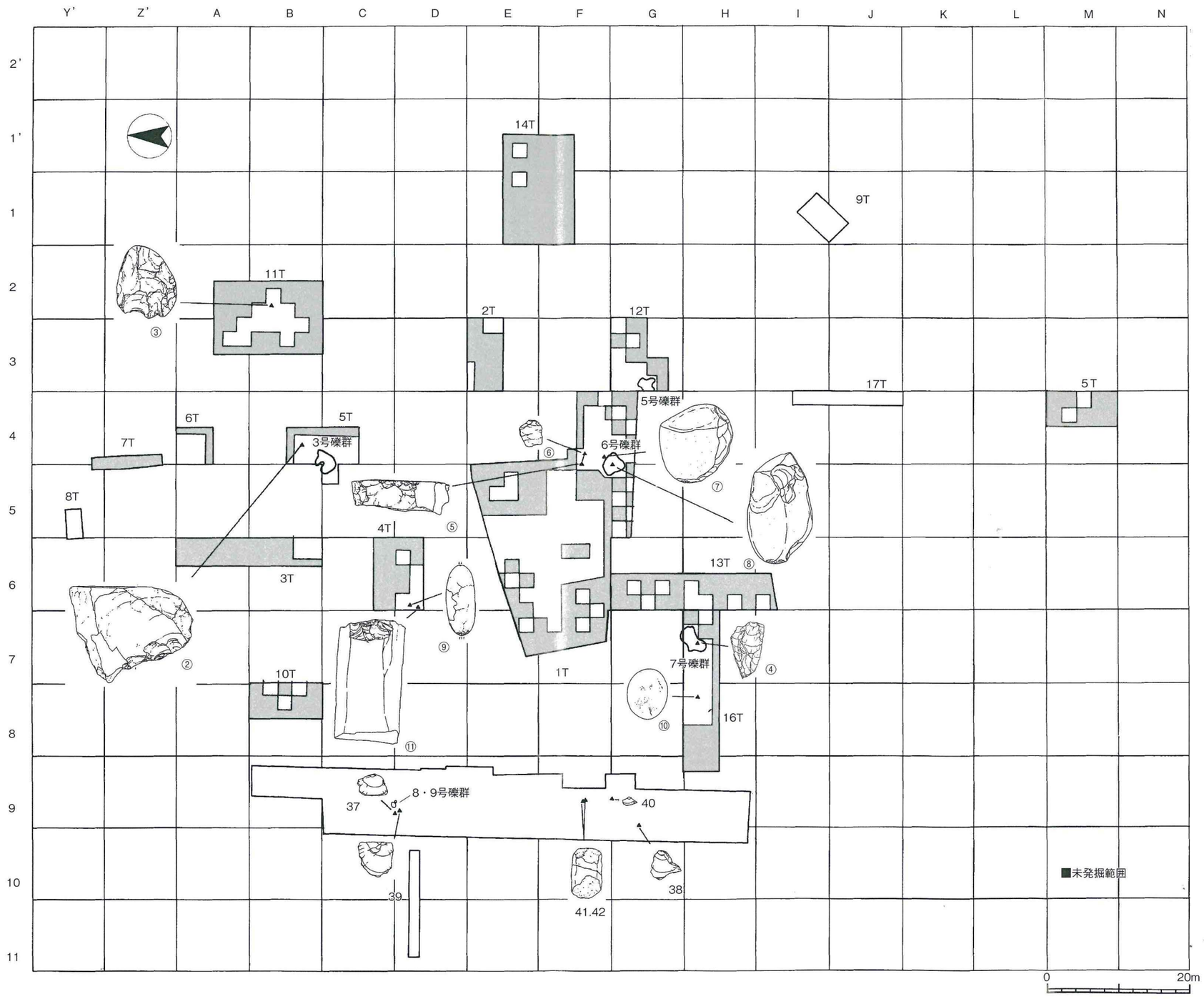
第５図　横峯Ｃ遺跡畑地整備施工前の地形図



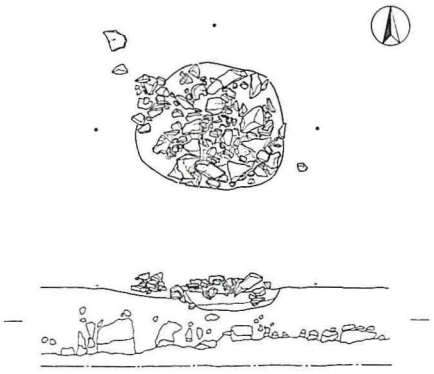
第６図　年度別調査区域図



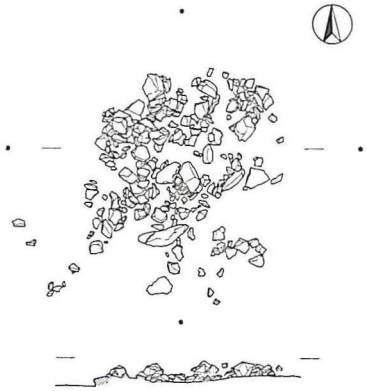
第７図　Ⅰ文化層遺構配置図及び旧石器時代石器出土地点図



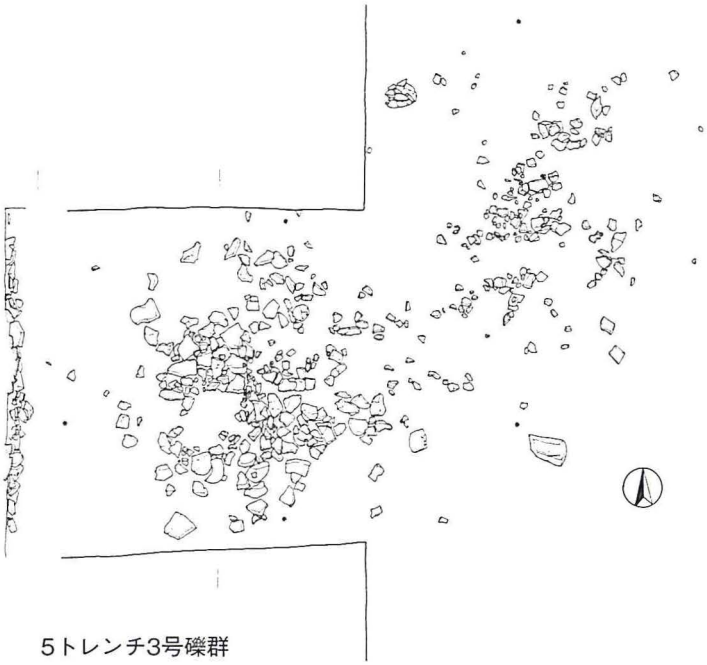
第８図　Ⅱ文化層遺構配置図及び旧石器時代石器出土地点図



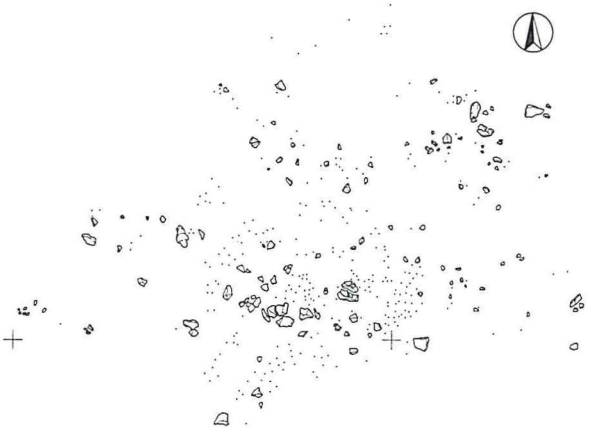
1トレンチ1号礫群



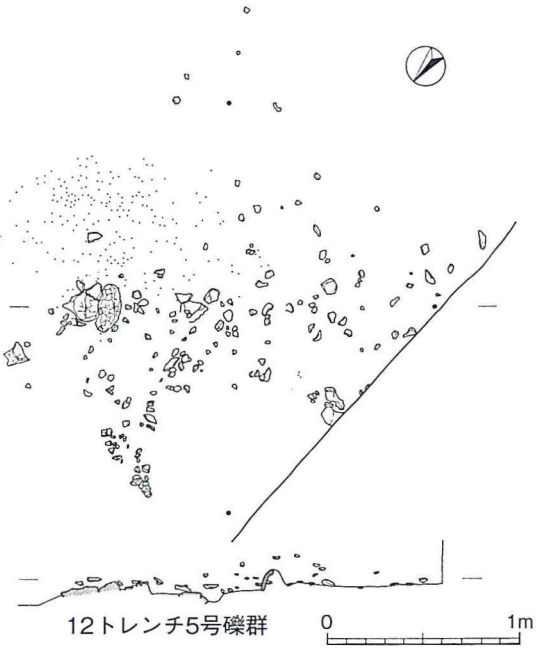
1トレンチ2号礫群



5トレンチ3号礫群

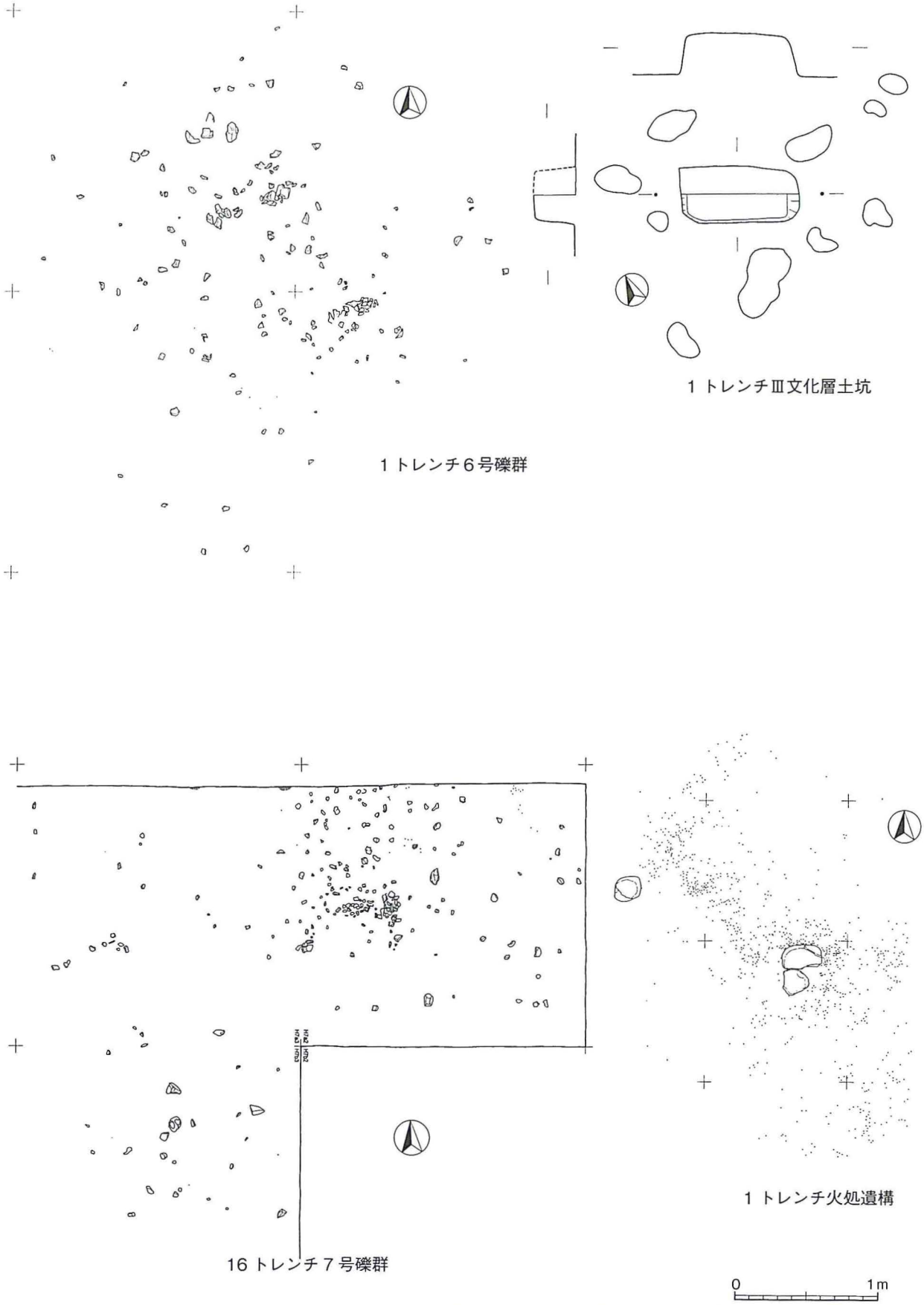


1トレンチ4号礫群

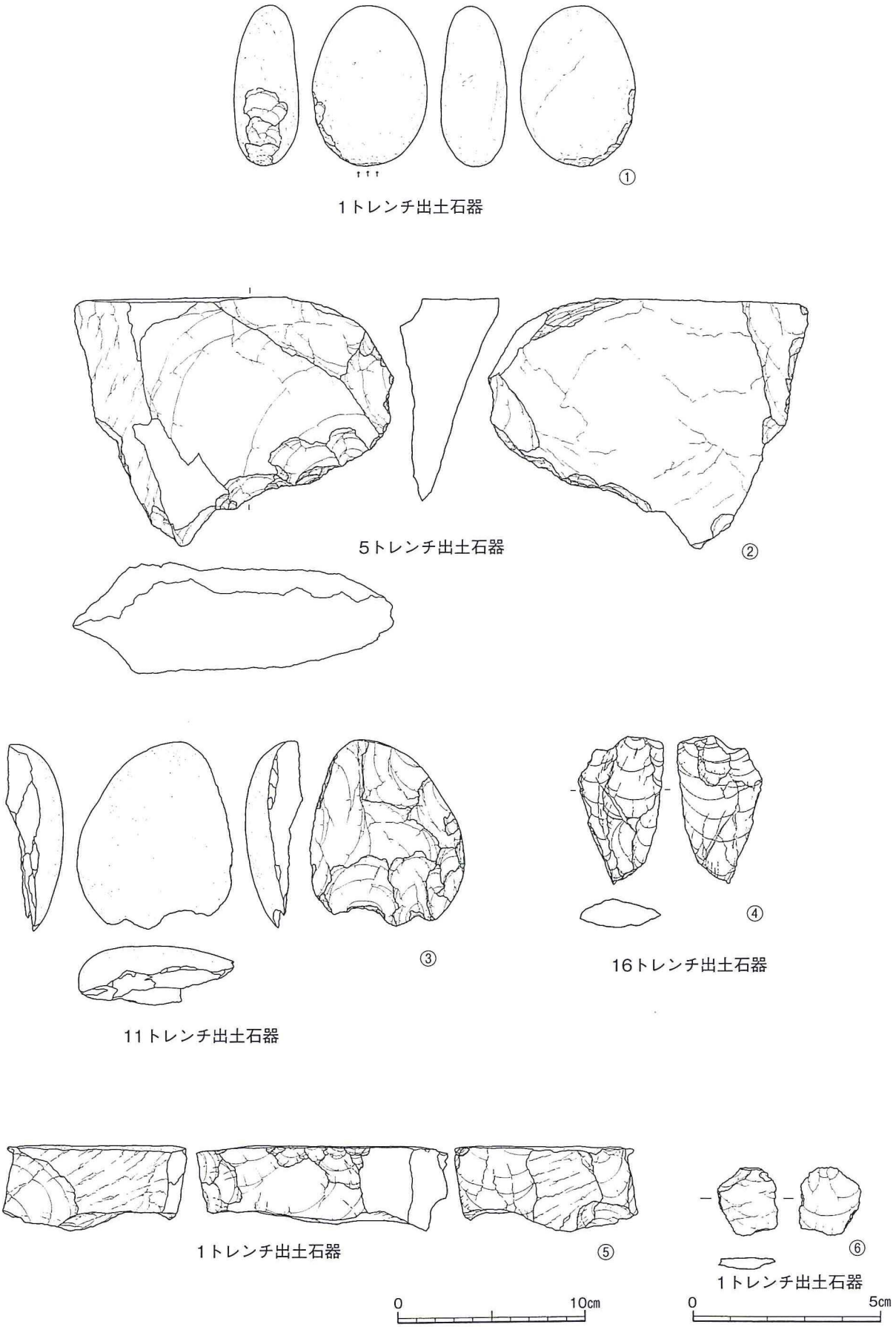


12トレンチ5号礫群

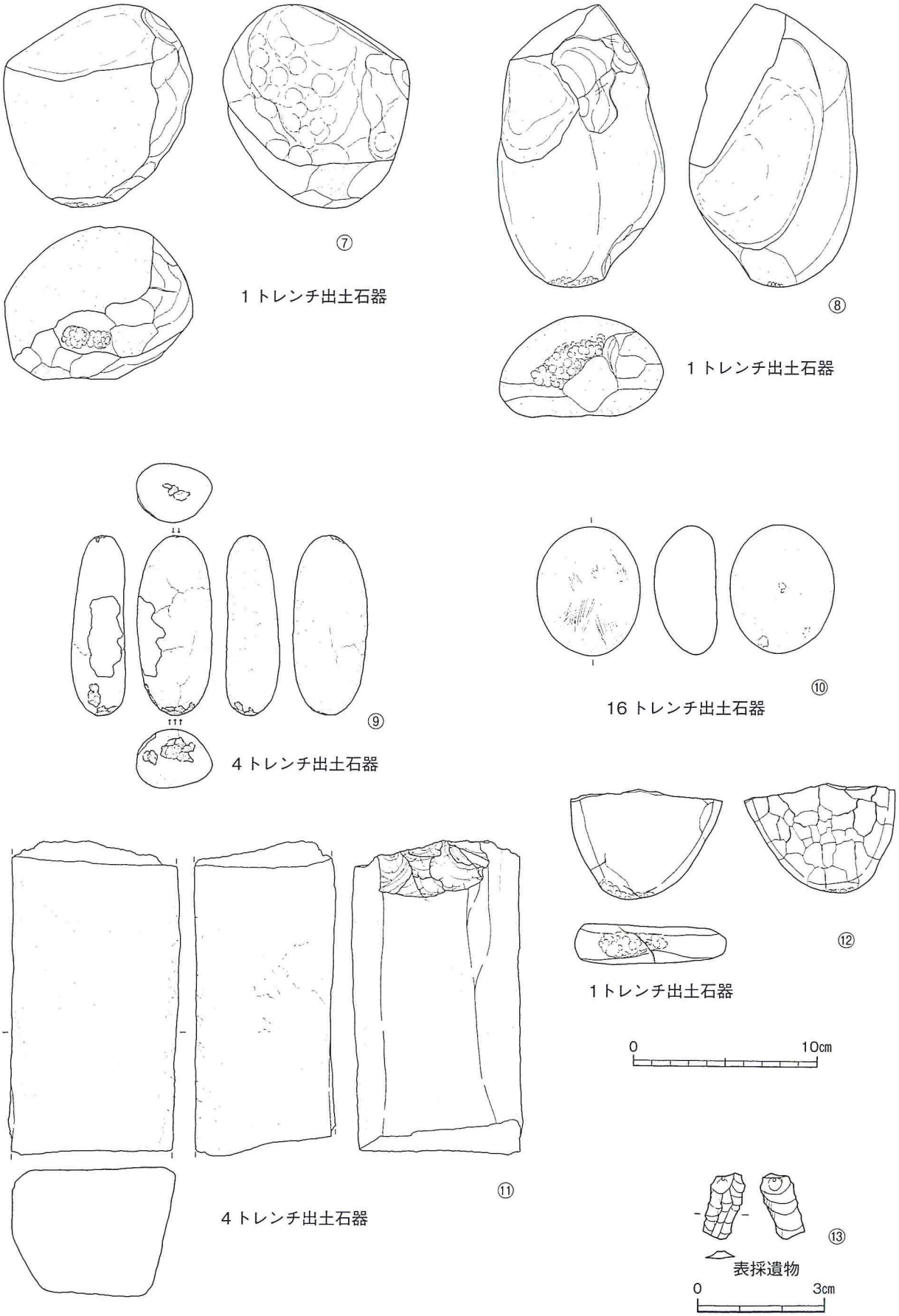
第９図　平成８～10年度調査　旧石器時代遺構実測図(1)



第10図　平成8～10年度調査　旧石器時代遺構実測図(2)



第11図　平成8～10年度調査　旧石器時代出土遺物(1)



第12図　平成8～10年度調査　旧石器時代出土遺物(2)

第２節　調査の概要・方法

横峯Ｃ遺跡は，東から西方向へと緩やかに傾斜する標高120mの緩やかな島間台地上に位置する(第４図)。周辺にはいくつもの谷が入り込んでおり，いわゆる八つ手状の地形を呈している。遺跡はその基部に立地する。

調査は，平成８～10年度の重要遺跡確認調査時の測量に基づき10×10mの区画を延長してグリッドを設けた後，平成14年度に事業予定地内の遺跡の確認調査を行い，その結果をもとに平成15年度に全面調査を実施した。

平成14年度の確認調査では，まず包含層の残存状況を把握するため試掘トレンチを設定した。試掘の結果，調査区内は，現道造成時に攪乱を受けており，Ⅸ層の一部及び上位まで削平されているが，Ⅸ層の一部及びＡＴとその下位は，攪乱を受けていないことを確認した。

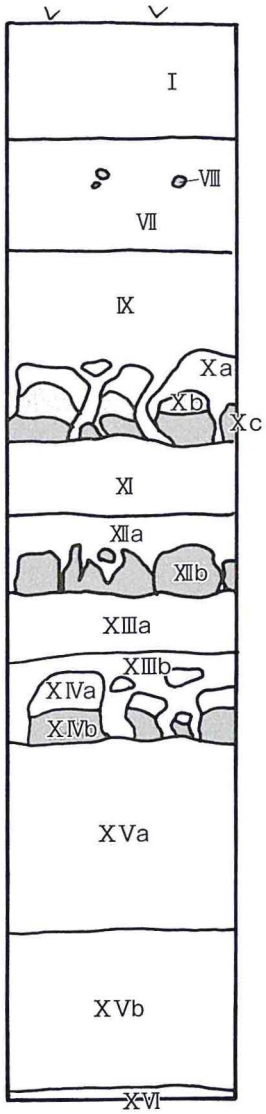
つぎに，事業予定地内のうち，現道と県指定史跡「横峯遺跡」の間の箇所に10×10mグリッドを基準に更に２×２mの小グリッドを設定し，千鳥掘りによって遺跡の範囲確認を行った。

また現道については農作業への影響を配慮し，試掘トレンチで包含層の確認を行った。その結果，包含層は，一部でⅦ層まで残存していたものの，ほとんどの地点でⅨ層より上位は削平されていることがわかった。また，D-9区でＡＴ下位から礫群が検出され，種Ⅳ下位からは，石斧未製品とみられる遺物等が確認されたため，確認調査の結果を報告するとともに，県文化財課及び県農政部(熊毛支庁土地改良課)と協議を行った。その結果，記録保存のための全面調査を実施することとなった。

全面調査は平成15年度に実施した。確認調査の結果とこれまでの調査成果を参考に，調査区とグリッドを設定した後，現道造成時の攪乱層は重機で剥ぎ取り，調査期間の短縮を図った。また，Ⅸ層以下は作業員により慎重に掘り下げた。調査の結果，遺構としては，Ⅱ文化層から８号礫群及び９号礫群の２基の礫群が検出され，Ⅰ文化層からは，炭化物の集中箇所が10箇所で確認された。遺物としては，Ⅱ文化層からは敲石１点と剥片４点が検出された。Ⅰ文化層からは，台形様石器，石斧未製品，敲石，剥片等が検出された。また，９号礫群に関しては，町単独の予算で移設保存を図ることとした。移設保存作業は平成16年度に行い，現在，南種子町郷土館に移設保存している。

第3節　土　層

今回の調査地点は平成8～10年度に調査を行った地点の隣接地にあたるため，層名は，平成8～10年度調査で用いたものを使用した。なお，今回の調査地点では，Ⅱ層からⅥ層までは削平のため確認されていない。層序は，地点により若干の相違はあるが基本的には第13図のとおりである。



第13図　標準層位模式図

Ⅰ　層　表土　耕作土

Ⅶ　層　淡褐色粘質土層（ソフトローム）

Ⅷ　層　青灰色スコリア　微粒で硬く締まる。火山噴出物と思われるが起源は不明。5mm程度でⅦ層中にまれに観察される。

Ⅸ　層　暗褐色強粘質土層（ハードローム）暗赤褐色を呈する。

Ⅹa層　明黄色火山灰層（AT火山灰）　姶良カルデラの噴出物で細粒。

Ⅹb層　明黄色層（入戸火砕流）　下部は，粗粒軽石と砂礫・結晶が多いが，上部になるにつれて細粒の火山灰となる。

Ⅹc層　黄橙色層（大隅降下軽石）　軽石層で全体的にベトベトする。

Ⅺ　層　暗褐色強粘質土層　粘性が強く軟質である。旧石器時代の包含層（Ⅱ文化層）

Ⅻa層　黄褐色火山灰層（種Ⅳ火山灰）　やや不明瞭である。硬く締まるが，削るとサラサラする。35,000年前の噴出物とされる。

Ⅻb層　青灰色火山灰層（種Ⅳ火山灰）

XIIIa層　淡褐色粘質土層（ハードローム）　硬く締まるが，削るとサラサラする。旧石器時代の包含層（Ⅰ文化層）場所によってはXIIIa層とXIIIb層に分層が可能である。

XIIIb層　褐色粘質土層　XIIIa層より，色調がやや暗く粘性が高く，締まりが悪い。遺物は出土していない。

XIVa層　明黄橙色火山灰層（種Ⅲ火山灰）　明瞭な堆積で，ブロック状に確認される。45,000年前の噴出物とされる。

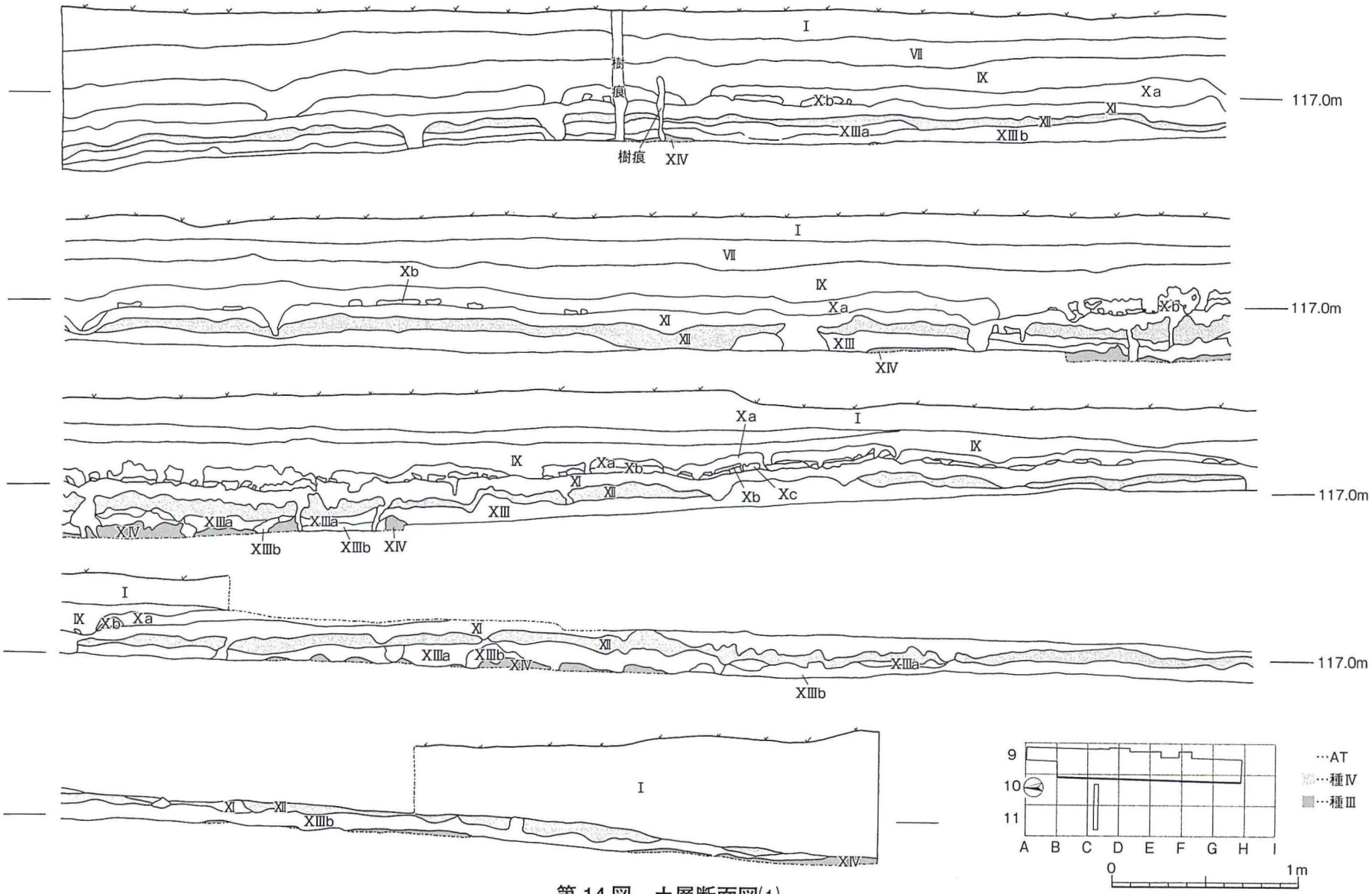
XIVb層　暗青灰色火山灰層（種Ⅲ火山灰）　ブロックでまれに観察される。

XVa層　暗褐色強粘質土層　固く締まる。

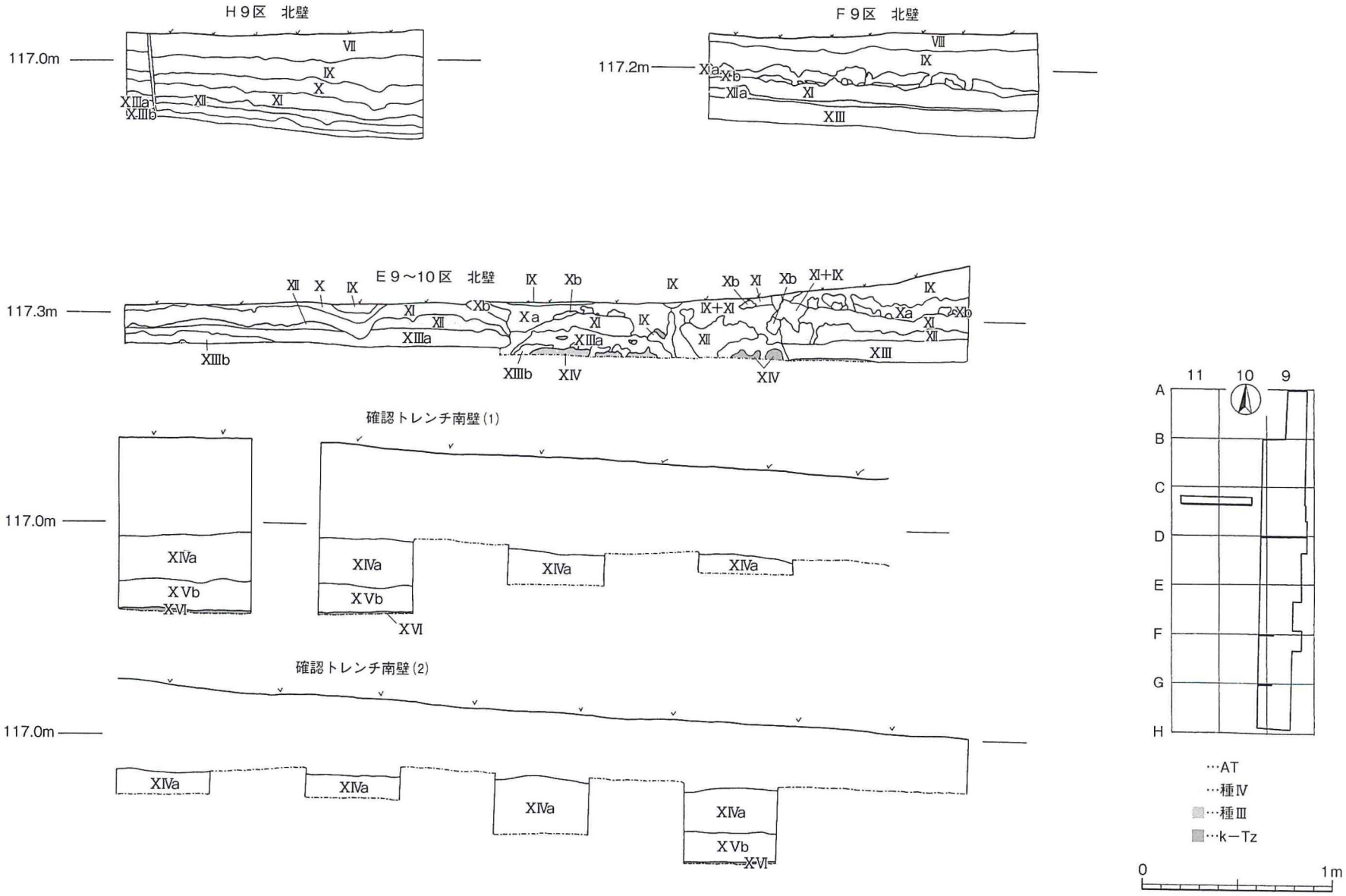
XVb層　暗赤褐色強粘質土層　上層より更に固く締まる。a層はやや茶色味が強くb層はやや赤みが強い。

XVI層　鮮黄色火山灰層（西之表テフラ）細粒な火山灰で多くの火山豆石を含む。

H～C9・10区　西壁



第 14 図　土層断面図(1)


H９区　北壁
117.0m
Ⅶ
Ⅸ
Ⅹ
XIIIa
XIIIb
XII
XI
F９区　北壁
117.2m
Ⅷ
Ⅸ
XIa
Xb
XIIa
XI
XIII
E９～10区　北壁
117.3m
XII
X
Ⅸ
XI
XII
XIIIa
XIIIb
Xb
Xa
XIV
Ⅸ+XI
XI+Ⅸ
確認トレンチ南壁(1)
117.0m
XIVa
XVb
XVI
確認トレンチ南壁(2)
117.0m
11
10
9
A
B
C
D
E
F
G
H
…AT
…種Ⅳ
…種Ⅲ
…k－Tz
0
1m

第 15 図　土層断面図(2)

第Ⅳ章　発掘調査の成果

第１節 Ⅰ文化層の調査

１．概要

Ⅰ文化層は，上位の種Ⅳ火山灰層，下位の種Ⅲ火山灰層にパックされている層で，調査区域の北端では削平を受けていたものの，ほぼ全域で確認されている。層中から出土した礫は，遺物・自然礫に関わらず基本的にそれらすべてにドットをおとし，図示している。但し，調査段階で明瞭に遺物でないと判断された自然礫のうち，砂岩Ｅに分類した自然礫の一部は，平板取り上げを行わず，一括で取りあげている。調査中に出土した礫についてはその全てを持ち帰り整理を行った。遺物としては接合した結果，敲石，石斧・基部加工石器・礫器・削器・台形様石器・石核・使用痕のある剥片がそれぞれ１個体ずつ確認された。また剥片も 28 点確認されている。なお，石材の分類については礫・遺物に関わらずその全てを肉眼によって以下のように分類した。

砂岩Ａ・・・砂岩を構成する砂粒が粗い。節理・脈が確認されない。
砂岩Ｂ・・・脈が入り，節理が発達し，緻密硬質で青みがかる。
砂岩Ｃ・・・脈が入り，緻密で硬質だが，節理は発達しない。
砂岩Ｄ・・・節理・脈が確認されず，比較的緻密・硬質である。原礫面は明褐色で，内面は青灰色である。石器の石材に選択されている。
砂岩Ｅ・・・層状に節理が発達し，脆くパリパリと割れやすい。
頁岩・・・・青灰色で粒子が細かい。風化の影響を受けやすいと見られる。

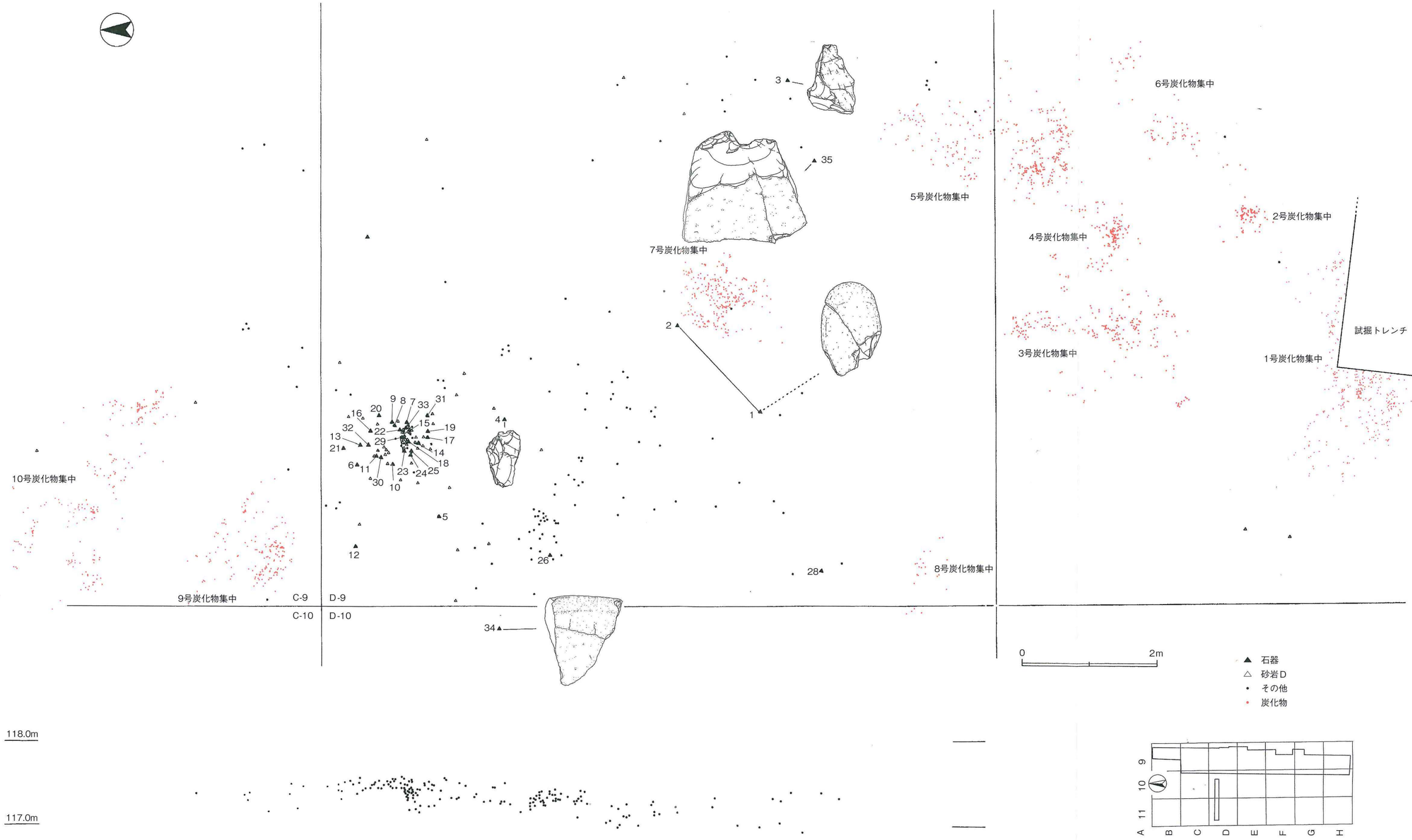
砂岩Ｄ及び頁岩は石器の石材として使用されている。砂岩Ａは，そのほとんどが熱を受けており，横峯の台地に点在する礫群との関連性がうかがえる。砂岩ＢはD-9 区で集中する状況が伺えるものの，節理が発達するため観察が困難であり遺物と確認するに至っていない。砂岩Ｃ及びＥは万遍なく分布し，量的にも少ない。また，出土状況図（第 16 ～ 18 図）は，遺物と自然礫，及び砕片の３つに分類して作成した。なお，砕片に分類したものは，剥片の可能性があるものの，確かな認定が困難なものである。

遺構としては，炭化物集中箇所が 10 箇所で確認された。

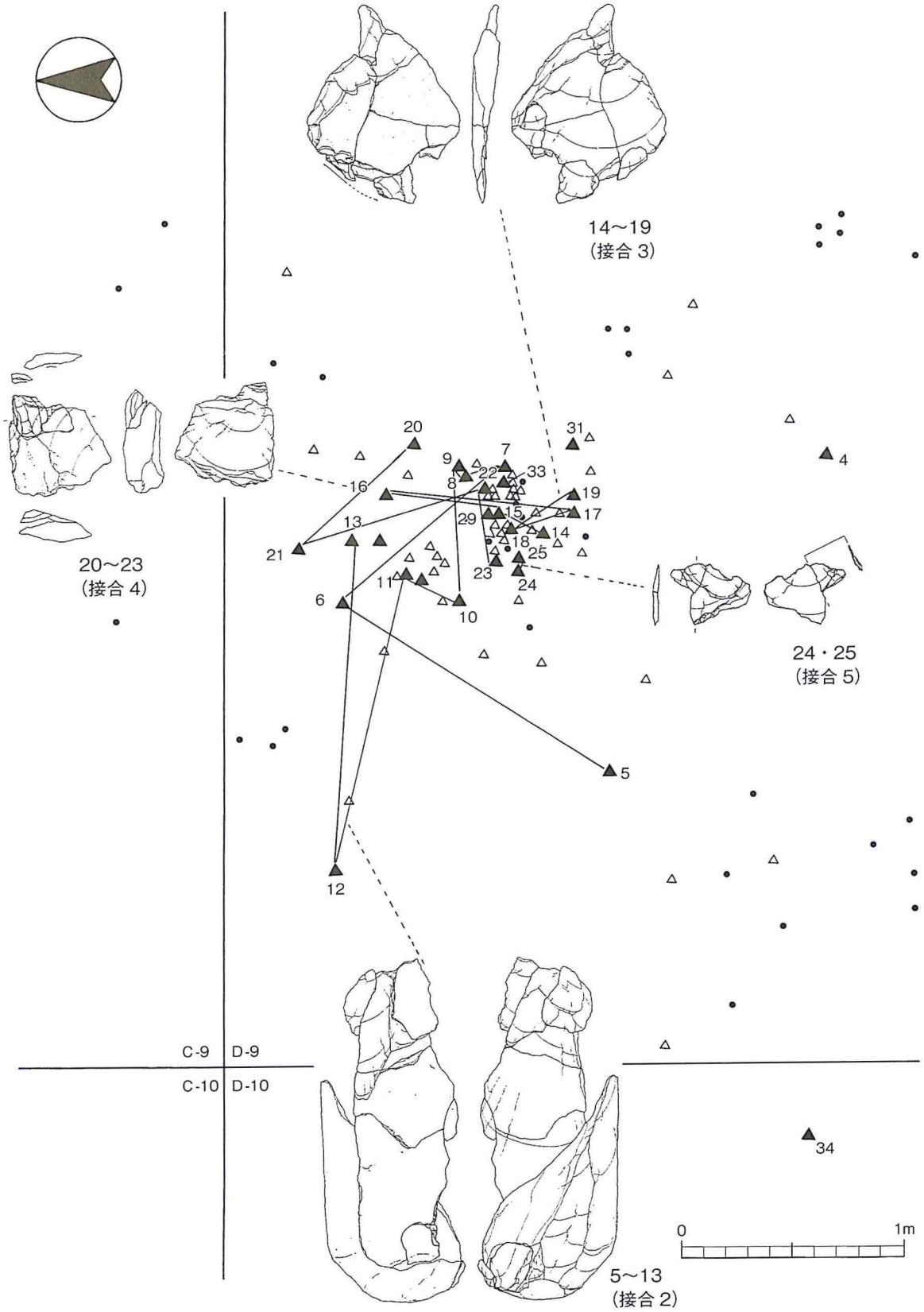
２．遺構（第17図）

炭化物集中箇所が 10 箇所で確認された。検出面は，種Ⅳ火山灰層直下で，遺物の出土レベルとほぼ等しい。検出面は概ね，当時の生活面を示すと思われる。各遺構には，炭化物の集中は見られるものの，土の明瞭な赤変や，土質の変化等は見てとれない。また遺物の出土地点及びその集中箇所と炭化物の集中箇所の分布は重ならず，第 19 図３の赤色化した削器の存在は，炭化物集中箇所や礫群と石器製作との関連性をうかがわせる。（石堂）

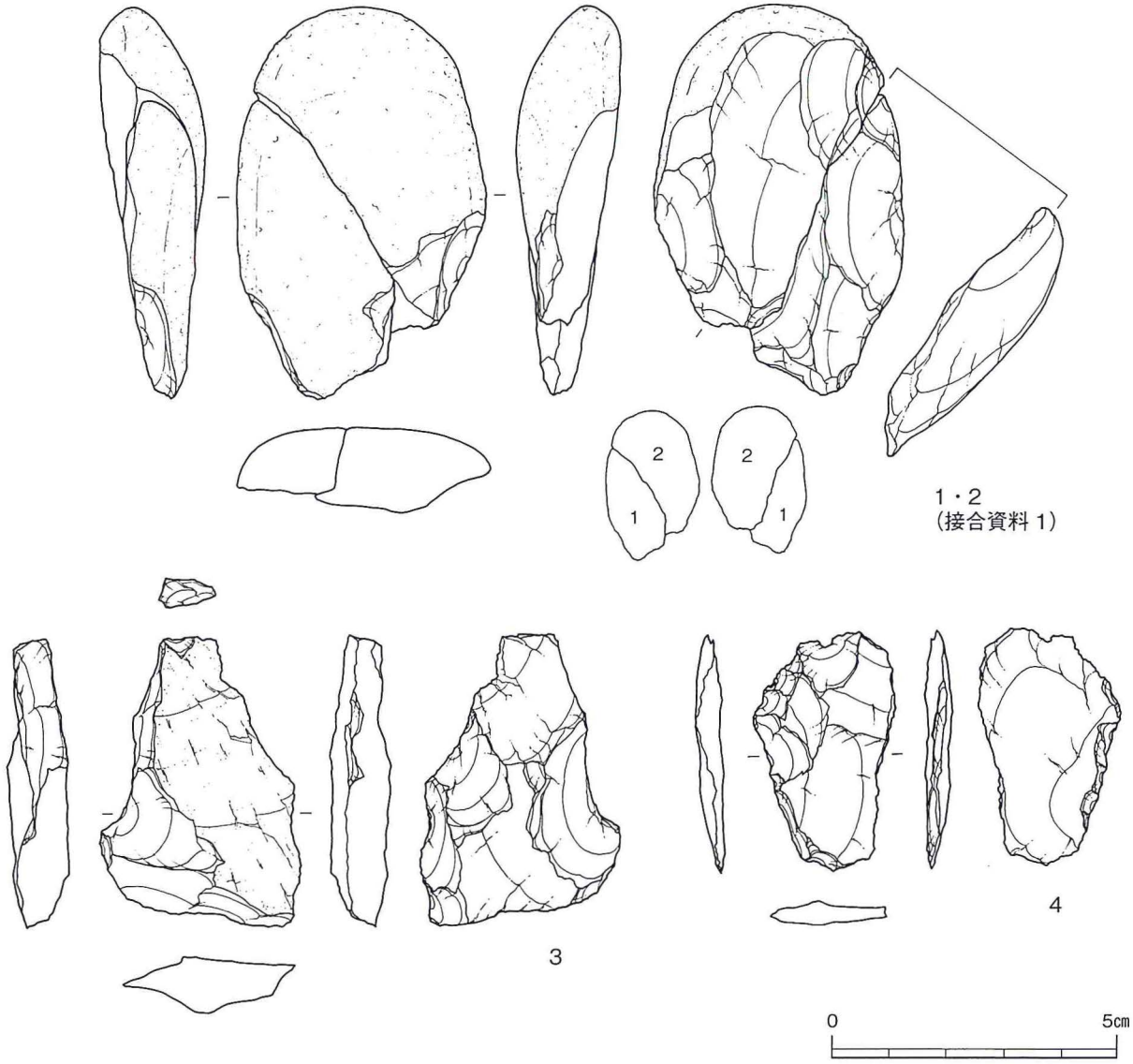
第 16 図　Ⅰ文化層遺物出土状況図(1)



第 17 図　Ⅰ文化層遺物出土状況図(2)



第 18 図　Ⅰ文化層遺物出土状況図(3)

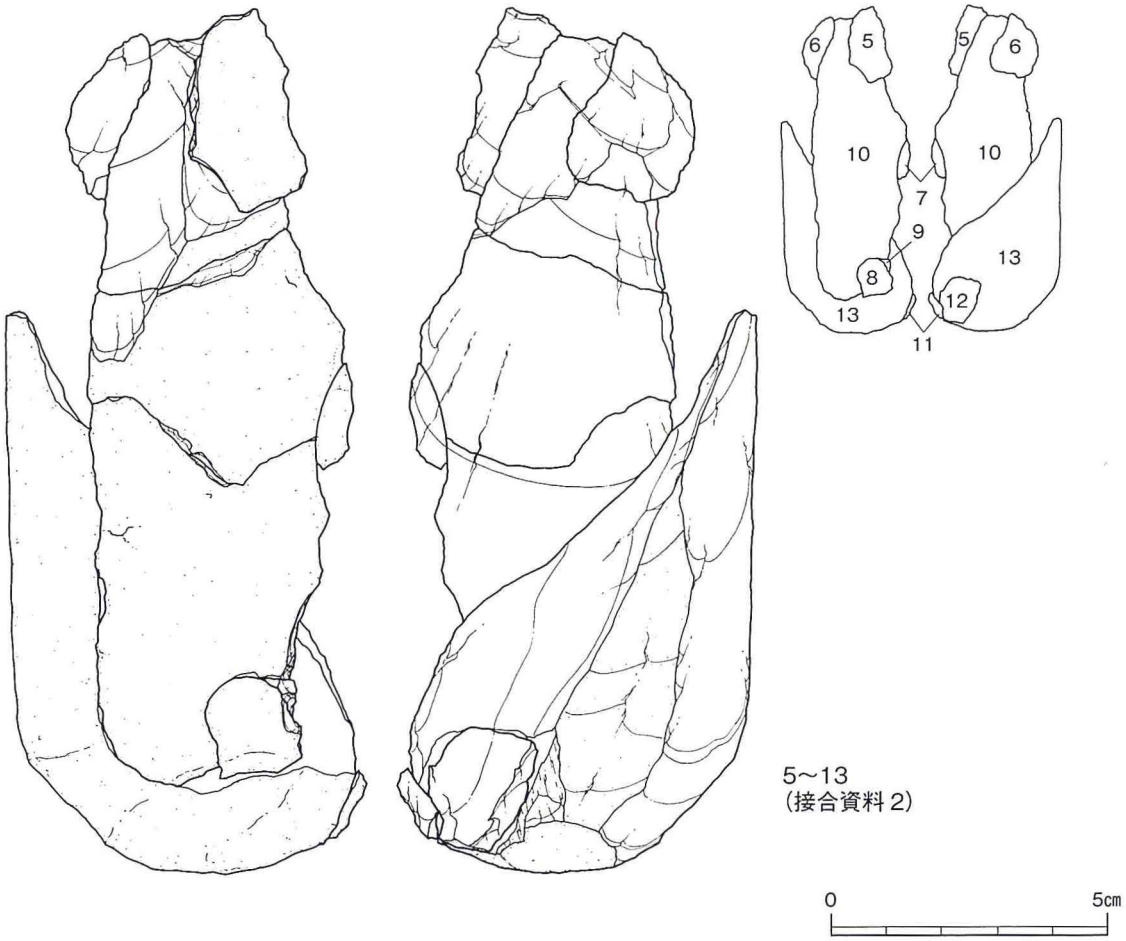


第 19 図　Ⅰ文化層出土石器(1)

3．遺物（第19～28図）

1・2（接合資料 1）は石斧未製品と考えられる資料である。頁岩の扁平な小型円礫を素材としている。類似石材は，種子島島内において旧石器時代以来，石斧に多く用いられる石材であり，本資料を石斧に関連する資料と認識した最大の根拠はこの石材にある。風化が著しく剥離面の観察は困難であるが，周縁部から大ぶりの調整剥離を加え，片面に原礫面を広く残しているので，器形を整える過程で欠損したと考えられる。

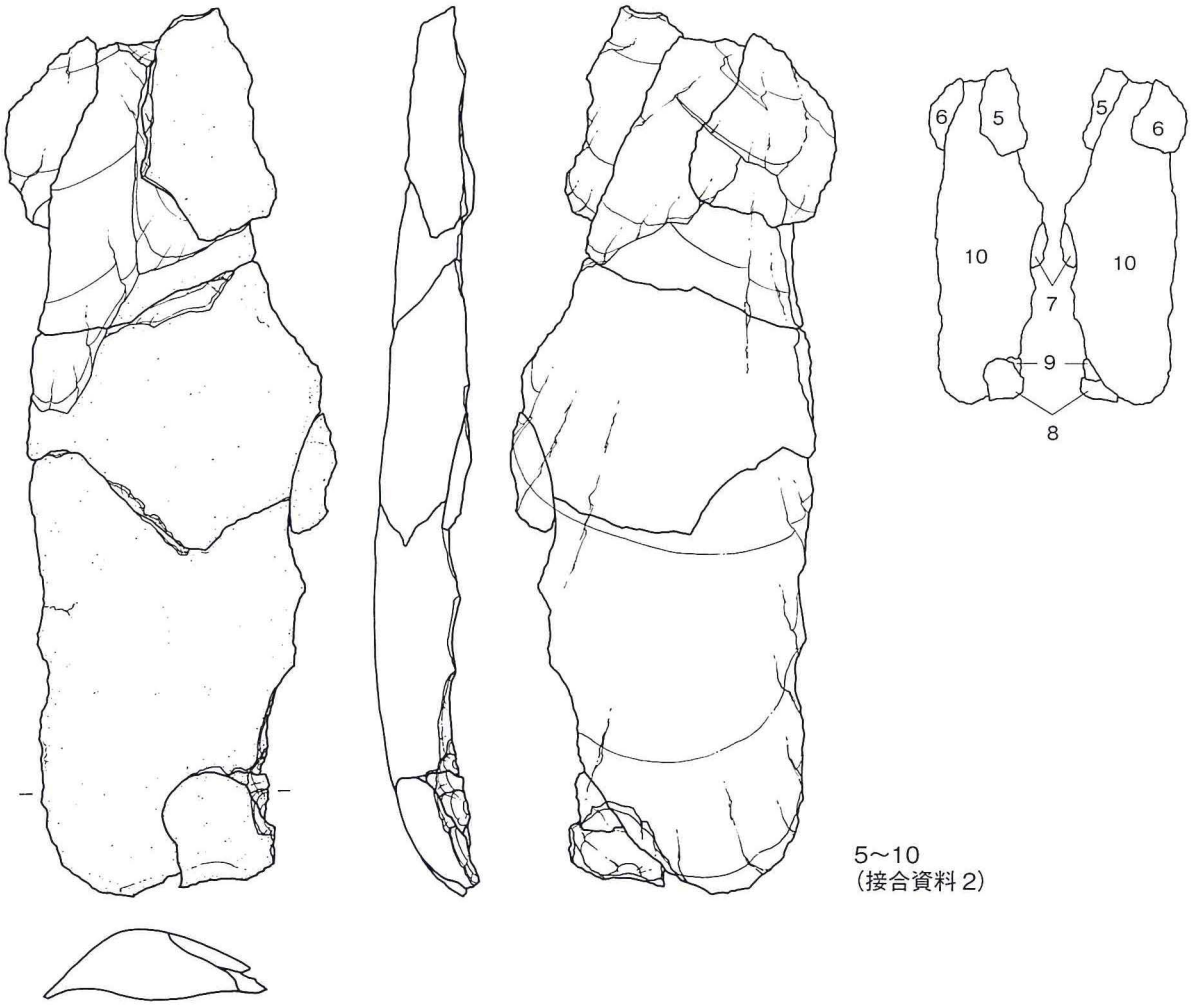
3は削器と考えられる資料である。石材は硬質の砂岩Ｄで赤色化している。背面は原礫面あるいは節理面と思われる平坦な面が広く残る。腹面には素材剥片のポジ面が残されており，他の剥片に比して大ぶりの剥片が素材として選択されている。側縁部から両面に剥離が施されており，特に腹面側では連続している。これらを剥片素材の石核からの剥片剥離と見ることも可能であるが，連続的で側縁部に並んでおり，最終的な形態として器形が作出されていると考えた。この連続した大ぶりの剥離によって作出された平面形状は，側縁間に挟まれる先行一次剥離面と主剥離面からなる鋭利な縁辺によって撥形を呈している。

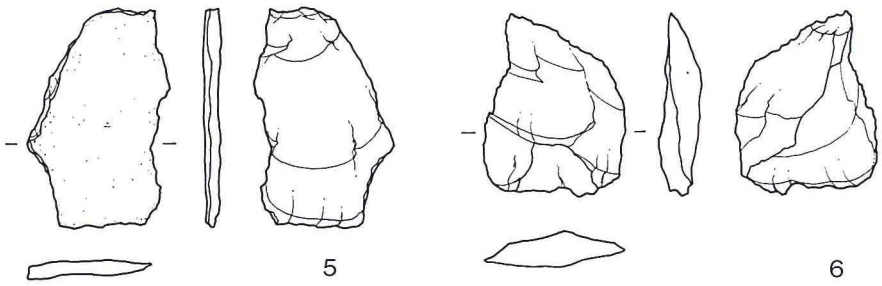


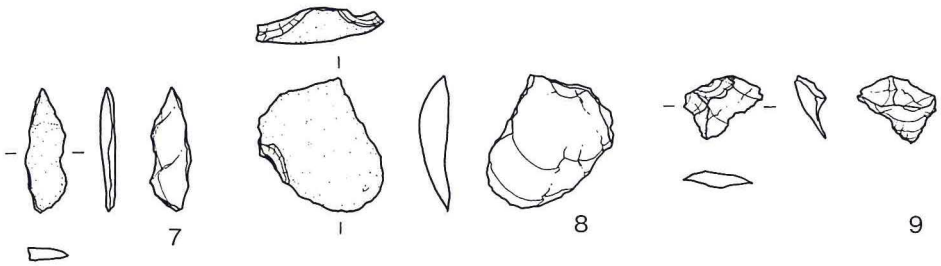
第 20 図　Ⅰ文化層出土石器(2)

4 は台形様石器と考えられる資料である。石材が砂岩 D で観察は困難であるが，素材剥片の末端が折れており，細かな平坦剥離によって現状の器形となっていると考えられる。剥離面の中には剥片剥離の先行剥離面と考えられる部分もあるが，打面側は背面においても腹面においても剥離によって直線的に整えられている。打面部は細かな剥離により残置していないが，薄手で幅広の剥片が素材となっていると考えられる。なお，この台形様石器をはじめ以下で提示する資料はほぼ同一の石材，すなわちほとんど赤色化していない砂岩 D である。

5 ～ 13（接合資料 2）は基部加工石器と剥片と石核の接合資料である。石材は砂岩 D で亜円礫が素材に選択されている。大きくは 5 ～ 10（第 21・22 図）と 11 ～ 13（第 22・23 図）に分かれる。前者では 5 と 6 ～ 10 の剥片がほぼ同一の打面から剥離されたと考えられる。その際に 6 の剥片は打面付近の同時割れによって 7 ～ 10 から剥がれており，同様に同時割れを起こしたと考えられる剥離面が観察される。その後，得られた大型の縦長剥片 7 ～ 10 において，先後関係は特定できないものの，7 のような特に厚みの薄い側縁部が折れており，さらには縦長剥片の一端部に調整加工

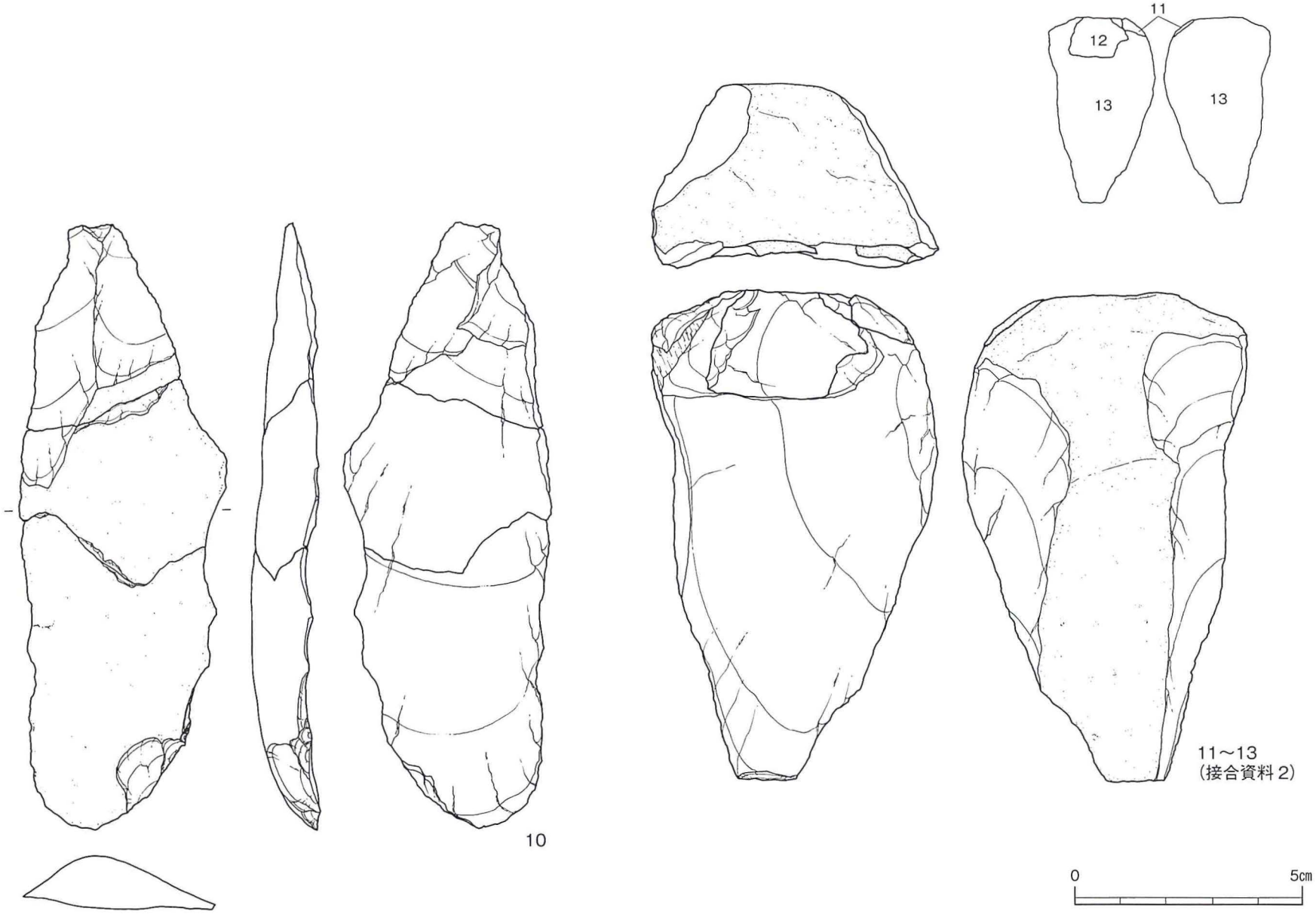




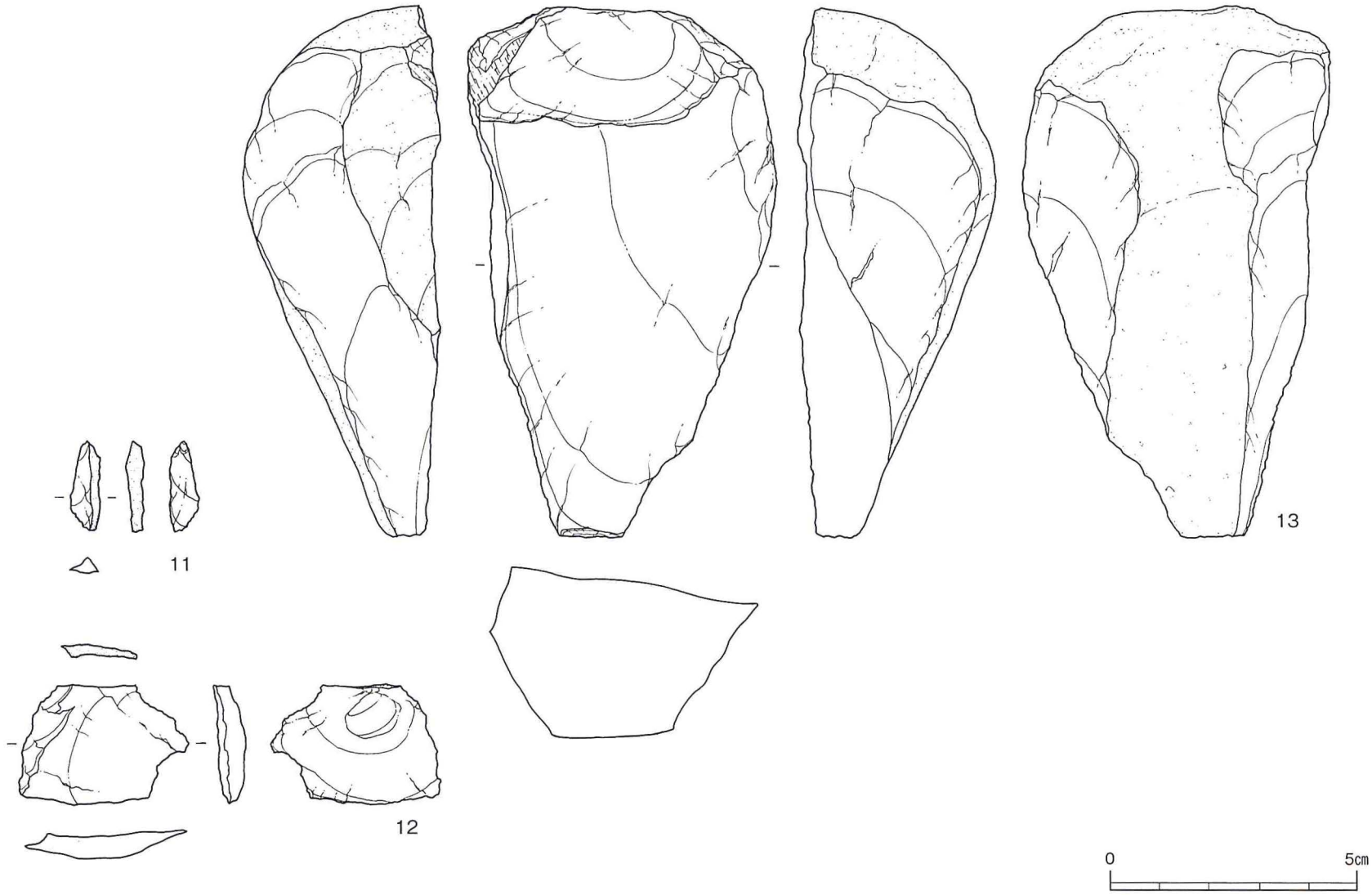


0 5cm

第 21 図　Ⅰ文化層出土石器(3)



第 22 図　Ⅰ文化層出土石器(4)



第23図　Ⅰ文化層出土石器(5)

と考えられる連続的な剥離を行っている。この調整剥片が8と9で，残された10は基部加工石器と考えた。一方，5～10の剥離が為された石核は13の背面に残された剥離面から同様の大型剥片がもう一枚程度は剥離されたと考えられるが，その後11～13の大型で厚みのある剥片が剥離されている。11はその剥離の際に同時割れを起こして剥落した資料と考えられる。その後12・13は剥片素材の石核となり，平坦な原礫面部分から12の幅広の剥片を剥離している。12は他の剥片に比して大きく，鋭利な縁辺も得られているため，石器素材になり得る剥片であると考えられる。その結果残された13は剥片素材の石核と評価される。これらの資料の他に同一の石材で本接合資料の空白を埋めることが可能な資料は見出せないので、空白部分に相当する石核はさらに，本年度の調査地点からは持ち出されたと考えられる。

14～19（接合資料3）は接合した状態で使用痕剥片と考えられる資料である。石材は砂岩Dで特に観察が困難である。この素材剥片自体が折れによって打面部を欠いていると考えられる。亜円礫から剥離されたと考えられる薄手で大型の剥片の縁辺部，すなわち15から16に微細な剥離痕が観察される。そのため，使用に伴う力が加わったことによって15と16は剥落したものと解釈される。17は先後関係が不明であるものの，素材剥片の厚みが薄い部分で折れている資料である。18と19も最終的に折れている。14は同時割れによって剥落したものと考えられる。

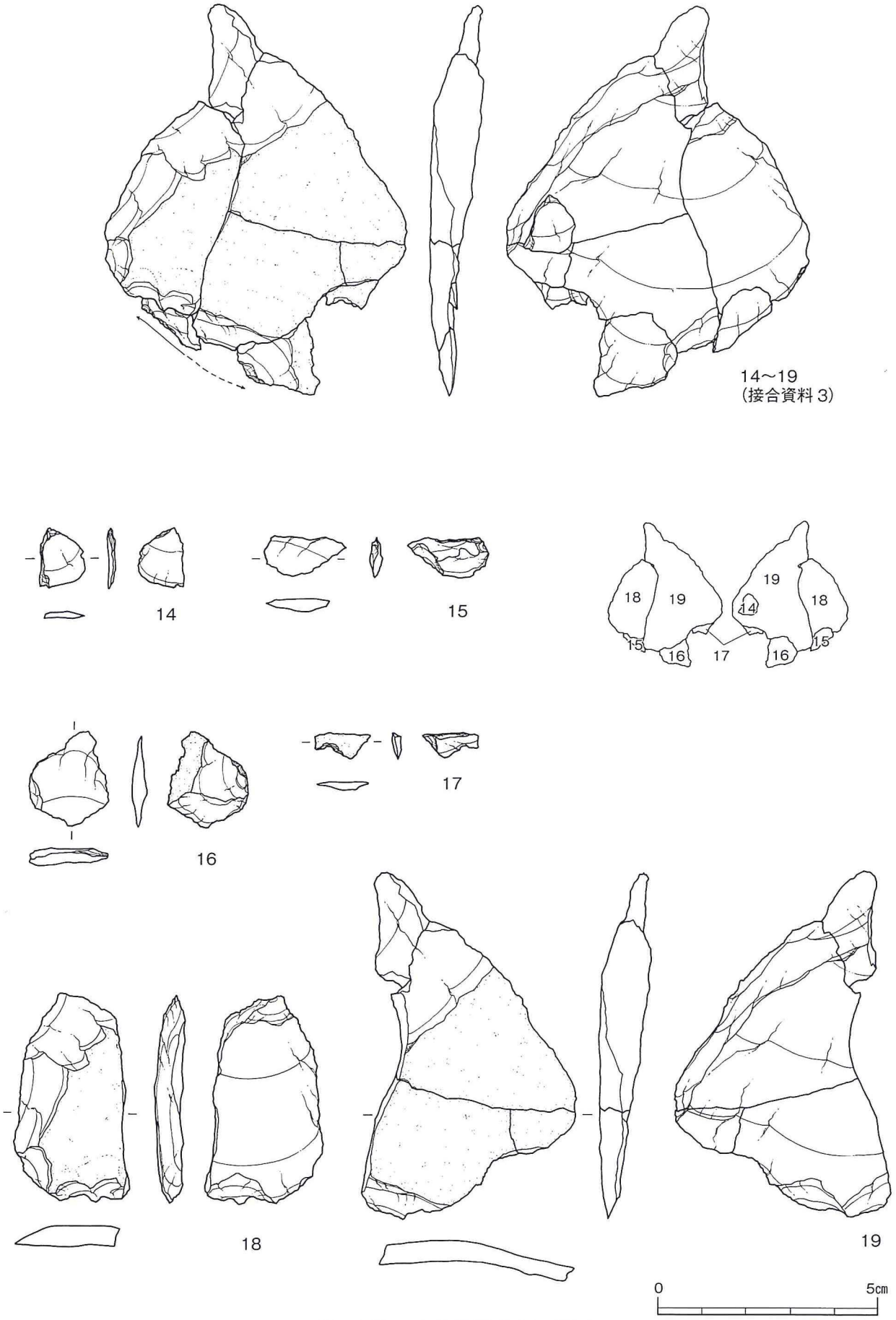
20～23（接合資料4）は同一の原礫面打面から連続的に剥片剥離を行ったと考えられる砂岩Dの接合資料である。まず20の剥片を剥離し，次にほぼ同じ位置から21を剥離している。20は非常に小型ではあるが縦に長い形状となっており，打面やバルブが残されている。末端部は作業面側に力が抜け，階段状を呈している。21も非常に小型ではあるが，打面や作業面が残置し，20に比して幅広ではあるが，より早く力が抜けて長さが短くなっている。この後，同様の小型剥片を数枚剥離した後に22の剥片が剥離されている。22も寸詰まりの形状となっており，打面は線状となっている。その後，大きさが全く異なる23の剥片を剥離している。23は甲高で幅広の形状を呈するが，下端部は折れ面状になっており，あるいは現状に比して縦長の剥片が折れた可能性が考えられるが，打面と腹面のなす角度が非常に大きく，途中で打撃の力が作業面側に抜けやすい状況であることも鑑みると，本剥片剥離時の同時割れと考えられる。器表がひび割れており，腹面側がやや赤色化している観もあるが，礫群などで見られる赤色化の度合いとは異なっている。20～22を作業面調整と評価することも可能だが，企画が類似しており，接合しない資料の中でも30～32のような同様のサイズの剥片が見いだせることから，ここではそれぞれの剥片を先行剥離と考えた。

24・25（接合資料5）は砂岩の剥片の接合資料である。折れ面で接合しており，もとは薄手で幅広の剥片であったと考えられる。

26は剥片である。原礫面を打面に用いており，打面調整と作業面調整と考えられる剥離面を観察することができる。下端部と右側縁は折れ面と考えられるため，本来は現状よりも大きな剥片であったと考えられる。石材は砂岩Dである。

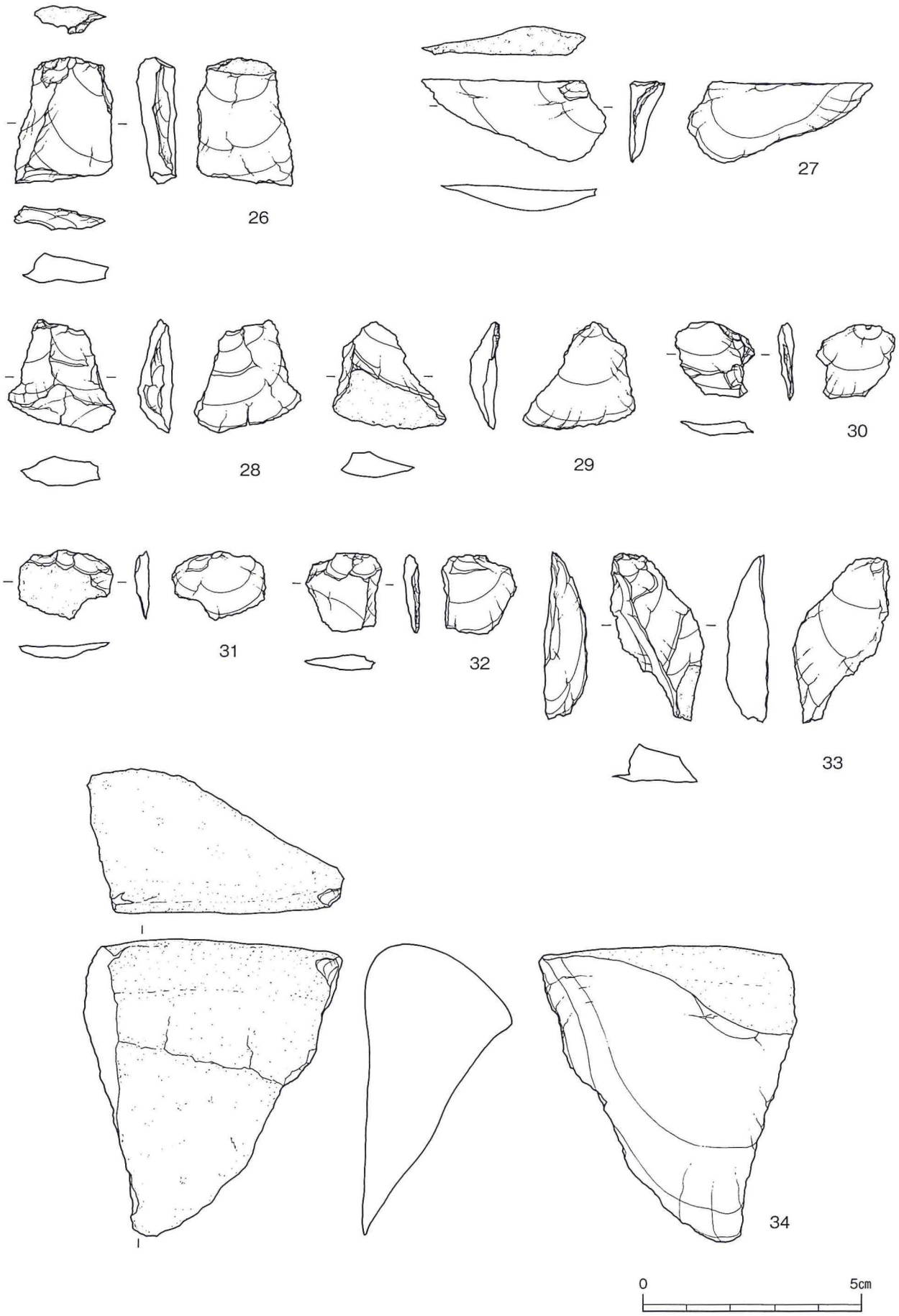
27は剥片である。平坦な原礫面打面から剥離されており，横長の形状を呈している。石材は砂岩Dである。

28は小型の剥片で，側縁の一部が折れている。打面は残置していない。器表にはひび割れが見られるが，赤色化はしていない。石材は砂岩Dである。

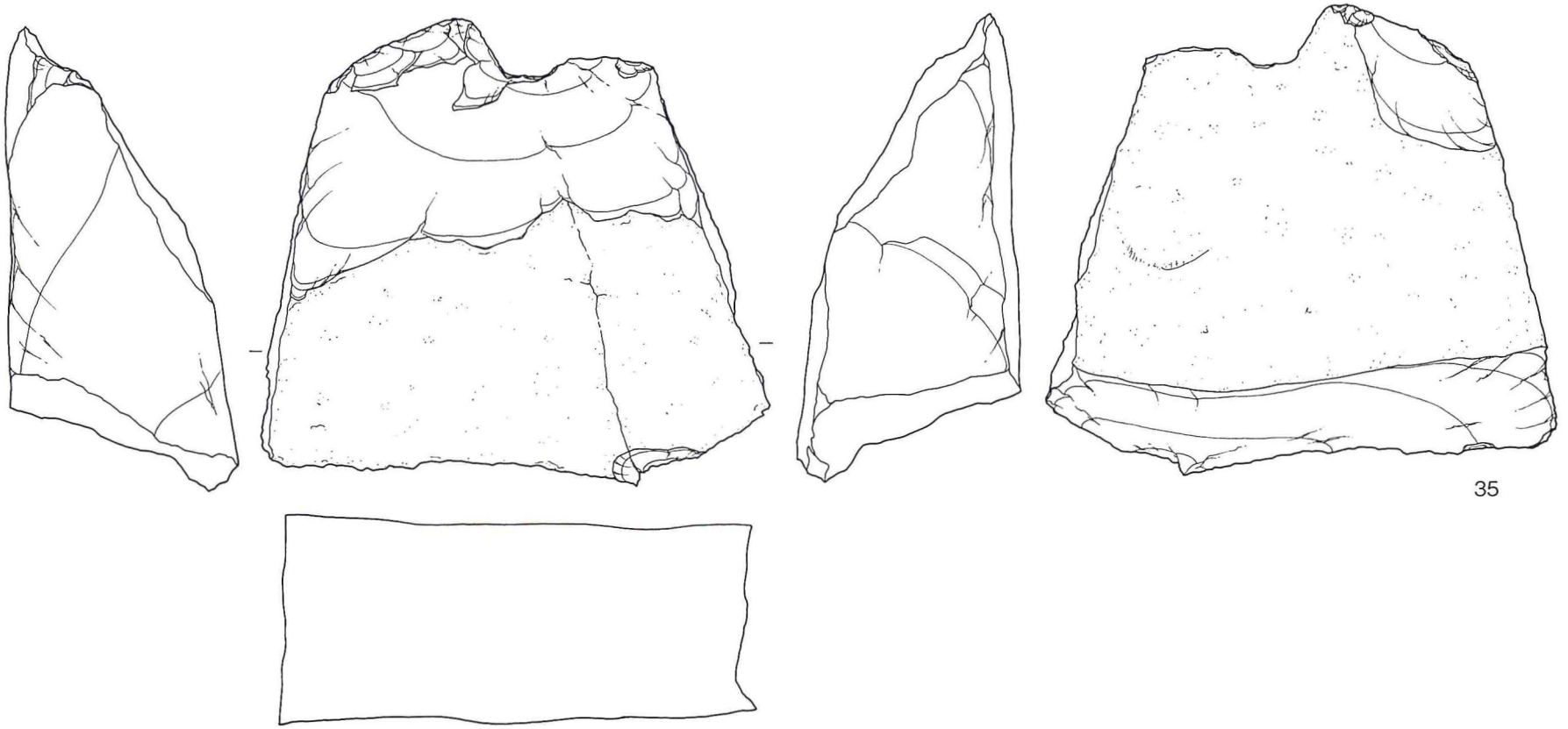


第 24 図　Ⅰ文化層出土石器(6)

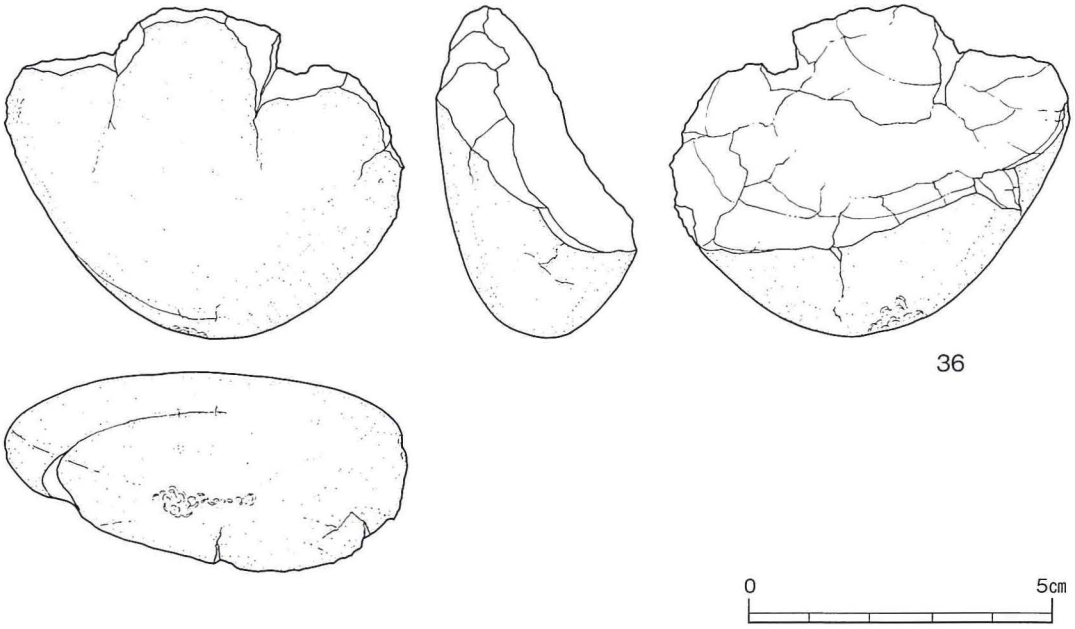
第 25 図　Ⅰ文化層出土石器(7)



第 26 図　Ⅰ文化層出土石器(8)



第 27 図　Ⅰ文化層出土石器(9)



第 28 図　Ⅰ文化層出土石器(10)

29 は剥片である。打面は残置していないが，それほど遠くない所に想定される。背面には広く原礫面が残置している。石材は砂岩 D である。

30 は剥片である。小型で薄手の剥片で，打面は残置していないが，バルブも比較的発達しており，先行剥離とほぼ同じ打点から剥離されたと考えられる。石材は砂岩 D である。

31 は剥片である。打面は残置していないが，先行剥離面は作業面調整と思われる。小型で薄手の剥片で，背面には原礫面が残されている。石材は砂岩 D である。

32 は小型の剥片である。打面は残置していない。右側縁は折れている。石材は砂岩 D である。

33 は剥片である。打面は残置していない。左側縁は折れ面と考えられ，形状は大きく変化していると考えられる。現状においても厚みがあるため，甲高でより大きな剥片であったことが予想される。背面下端部には原礫面が残されている。石材は砂岩 D である。

34 は厚みのある大型の剥片と考えられる。磨石や台石などにも使用可能と考えられる砂岩の大型の亜円礫が素材となっており，側面が折れ面となっている。その折れが生じた結果，原礫面部分を打面にして，本資料を剥離したものと考えられる。石材は砂岩 D である。

35 は礫器である。扁平な大型礫を素材としている。表裏面に原礫面を広く残し，周囲を大きく粗割りすることによって器形が作出されている。機能部と考えられる先端部では裏面とのなす角が小さく，粗割りが特に鋭利に準備されていると言える。その後，器形を整える剥離を表面から裏面に向かって行い，その剥離面を利用するように裏面側から表面に向かって突出部と抉りをつける調整加工が施されたものと考えられる。赤色化の度合いは低いが，器表にひび割れが認められる。石材は砂岩 D である。

36 は敲石あるいは磨石と考えられる資料である。本遺跡の資料の中では珍しく，左右対称な円礫が素材となっており，先端部には痘痕状の潰れが若干認められる。緩やかな凸面は磨石として機能したことも想定されるが，大部分を欠損しているため判断は難しい。欠損面からのひび割れが著しい。石材は砂岩 A である。（中村）

第２節　Ⅱ文化層の調査

１．概要

Ⅱ文化層は調査区域の北端では削平を受けていたものの，ほぼ全域で確認された。Ⅱ文化層は，上位のＡＴ火山灰層，下位の種Ⅳ火山灰層にパックされている。層中から出土した礫は，遺物・自然礫に関わらず基本的にそれらすべてにドットをおとし，図示している（第29図）。但し，調査段階で明瞭に遺物でないと判断された自然礫のうち，砂岩Ｅに分類した自然礫の一部は，平板取り上げを行わず，一括で取りあげている。調査中に出土した礫についてはその全てを持ち帰り整理を行った。遺物としては敲石１点，剥片４点の計５点が確認された。

遺構としては，２基の礫群を確認した。なお，これまでの調査で，本遺跡内からⅠ文化層で３基，Ⅱ文化層で４基，計７基の礫群が確認されている。そのため今回の調査で検出された礫群を８号礫群・９号礫群と呼んでいる。

２．遺構（第30図～32図）

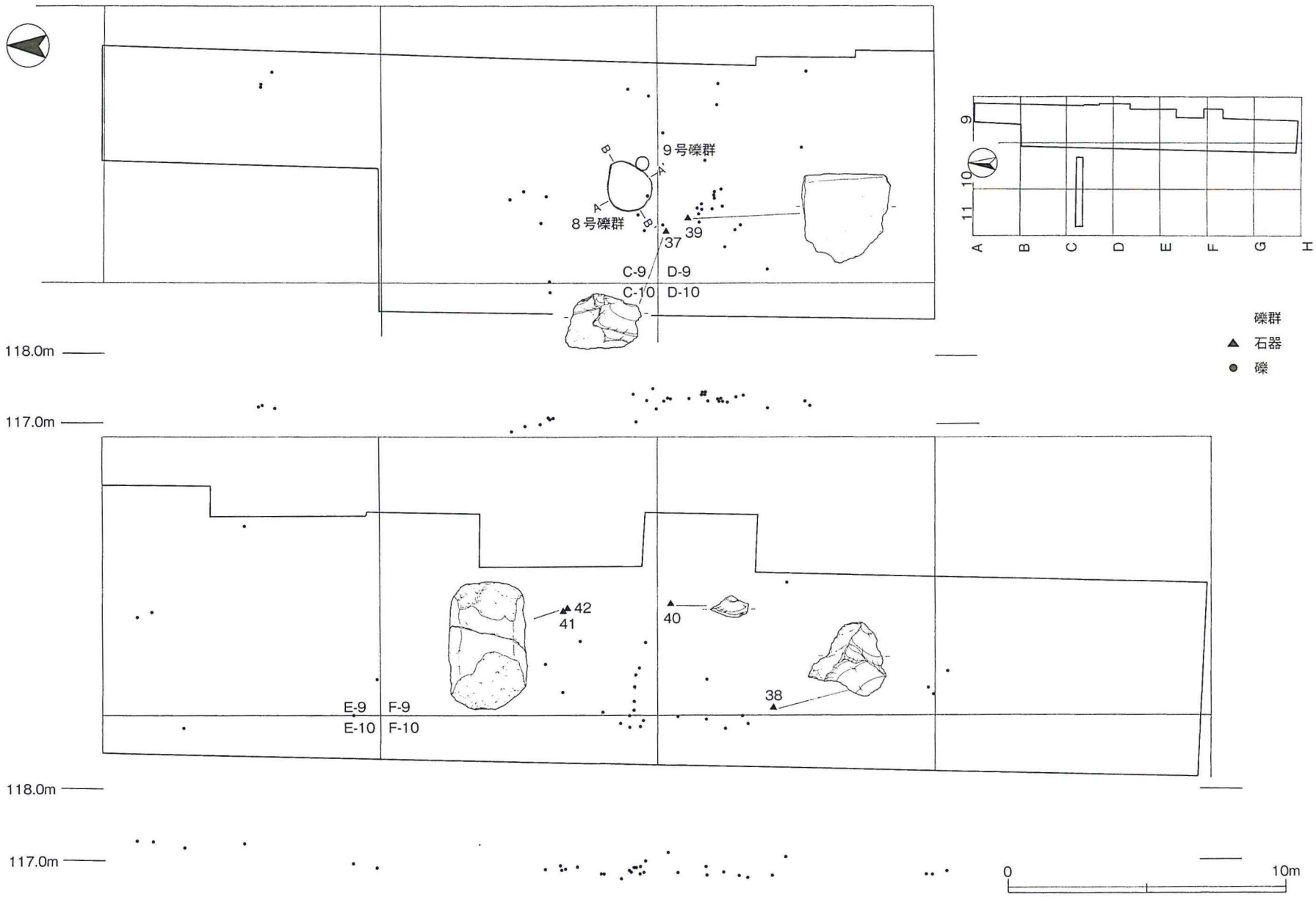
８号礫群（第30・32図）

D-9区で検出された。狭い範囲に近接して２箇所の礫集中部分が認められるが，礫の接合状況などから１基の礫群と判断される。礫は比較的狭い範囲に集中した部分と，その周辺の若干散在した部分からなる。礫の集中部では，それぞれ径約95 cm× 85 cm，深さ15 cm及び径約60 cm× 45 cm，深さ約12 cmの掘り込みが確認できた。掘り込み部分の埋土は，周辺のⅡ文化層の土よりやや赤みがかり，少し硬化がみられた。礫の大きさは拳大からそれよりやや上回る程度のものが多く，角礫が主である。石材は砂岩で，中でも砂岩Ａの占める割合が高く，重量比では，約75％を占める。また，個々の礫を観察すると，受熱による赤化やヒビ割れが認められるものやその結果破損した礫が多い。破損した礫の接合を試みた結果，集中部と散在部で接合関係が認められたほか，礫群周辺の赤化礫との接合関係や，９号礫群との接合関係も認められた。礫の総数は120点であり，接合後は72個体となった。掘り込み内，および礫群内には炭化物が認められるものの，１号礫群にみられるような，炭化物が集中する形ではなく，分布は散在的である。なお，礫群に使用された砂岩と類似する砂岩は，横峯遺跡の周辺の谷部で露出するK-Tz下位の礫層等で現在も認められ，基本的に亜角礫である。

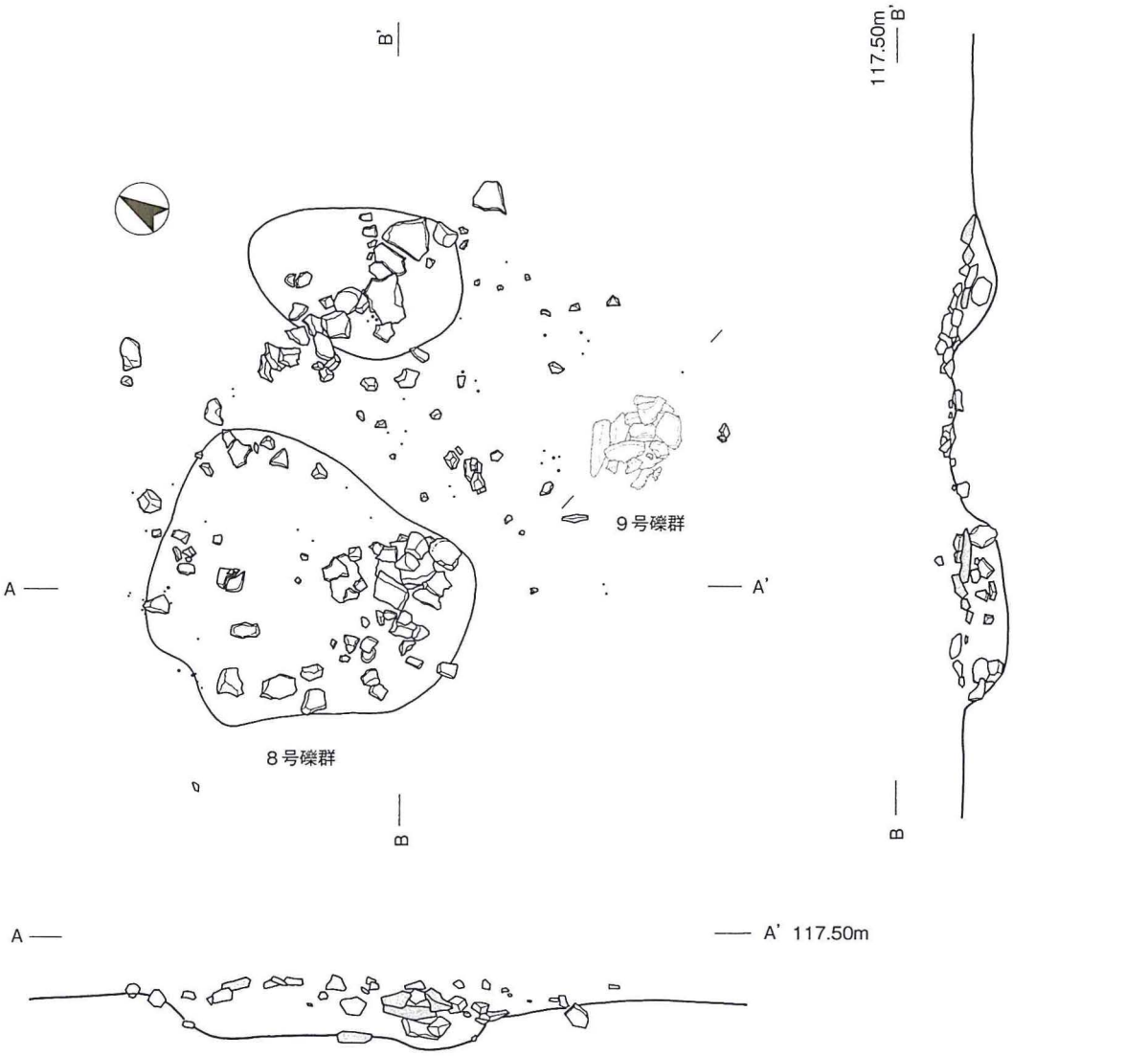
９号礫群（第31・32図）

９号礫群は，８号礫群の半裁を行った後，下層との関係を見るため精査をかけた段階で，礫が密集する状況で確認され，検出された。出土レベル等からⅠ文化層の遺構である可能性も視野にいれ慎重に掘り下げた。本遺構は，垂直方向に幅のある出土状況から，礫群を構築する際の掘り込みが想定されるため，掘り込み開始面及び掘り込みのプランの検出に努めたが，検出することができなかった。よって，８号礫群及びⅡ文化層出土礫との接合を試みて，接合関係から文化層の決定を図った。

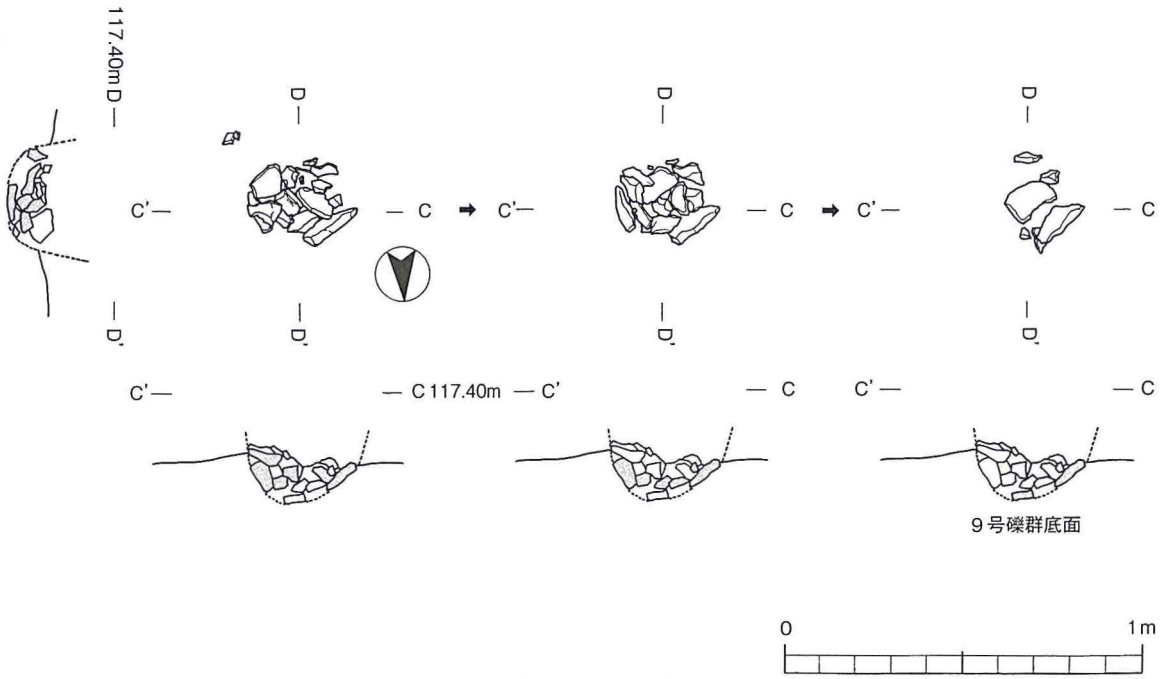
結果，８号礫群との接合関係が見られ，８号礫群とほぼ同時期の遺構であることが確認された。接合した礫は，図版６の接合資料17のカラー写真でみられるように９号礫群内礫と，８号礫群内の礫とでは赤化の程度や色調等に差異が認められる。また，９号礫群内の礫は，扁平なものを選択



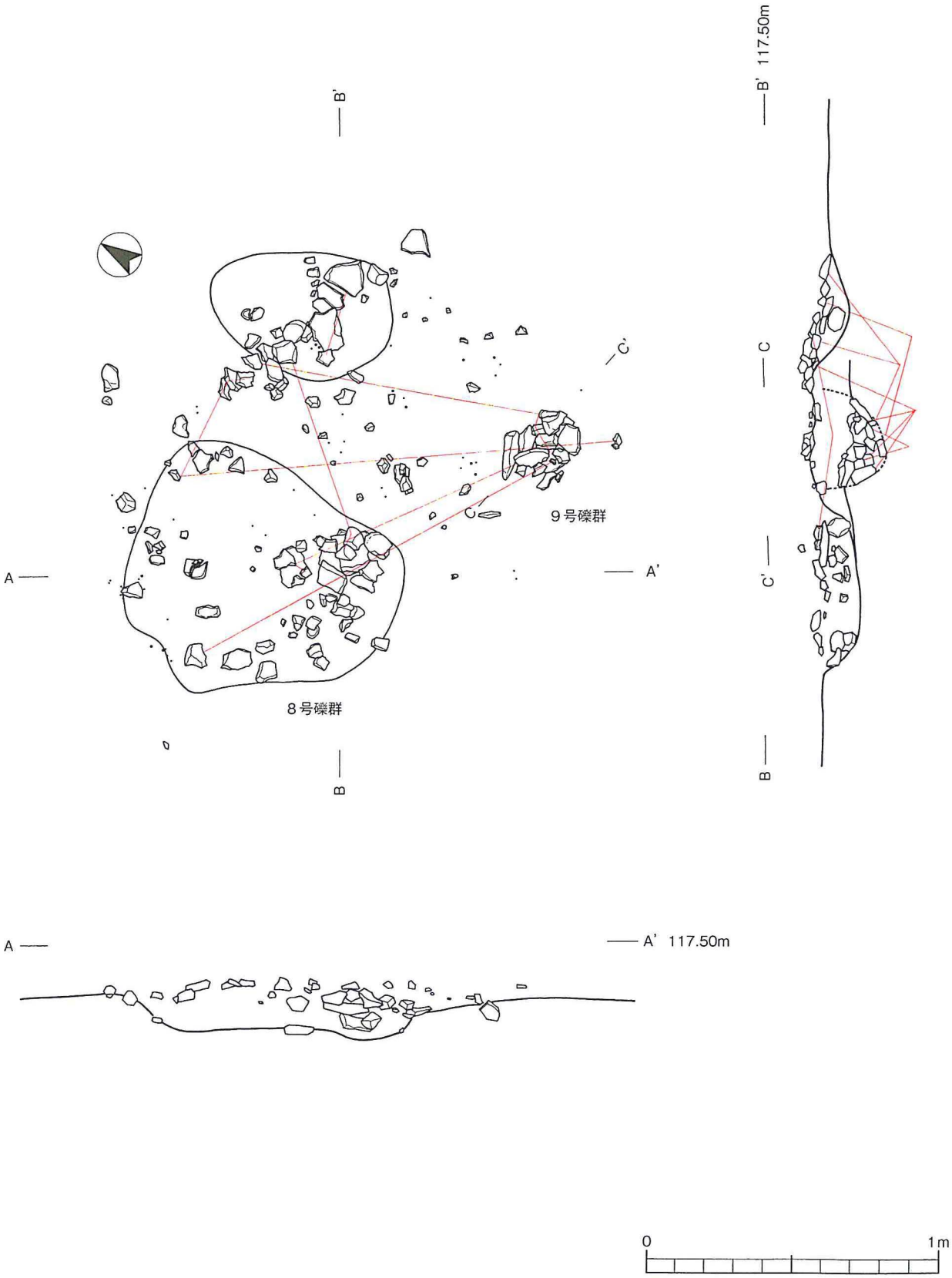
第29図　Ⅱ文化層遺物出土状況



第30図　8号礫群



第31図　9号礫群



第32図　8・9号礫群接合関係図

的に使用していて，特に周縁部は扁平礫で構成される。遺構の内側の礫は，取り上げが容易であったが，外周を構成する礫は，押しつけられたように外壁に密着していた。このことから，9号礫群の形成過程は，底面及び側面を先に固定し，その後内側に充填した可能性が想定される。個々の礫間を充填する埋土は，遺構外の土と土質等に差異を見出す事は困難だが，締まりはやや悪い。8号礫群においては，遺構内に比較的多くの炭化物が検出されたが，9号礫群にはほとんど炭化物は含まれない。例外的に，遺構下部で4㎜程度の炭化物が多少検出されたが，この炭化物は，Ⅰ文化層の炭化物集中箇所を本遺構が切っていることによる混じりの可能性が高い。個々の礫については，表面と裏面における赤化の程度に顕著な差異はなく，壁面についても受熱の痕跡は確認されなかった。また，接合関係についても，9号礫群内で受熱により破砕したような礫の接合関係はみられず，9号礫群内で火を使用した痕跡は確認されなかった。以上のことから，8号礫群と9号礫群は別の遺構として本報告書では取り扱った。（石堂）

3．遺物（第33図）

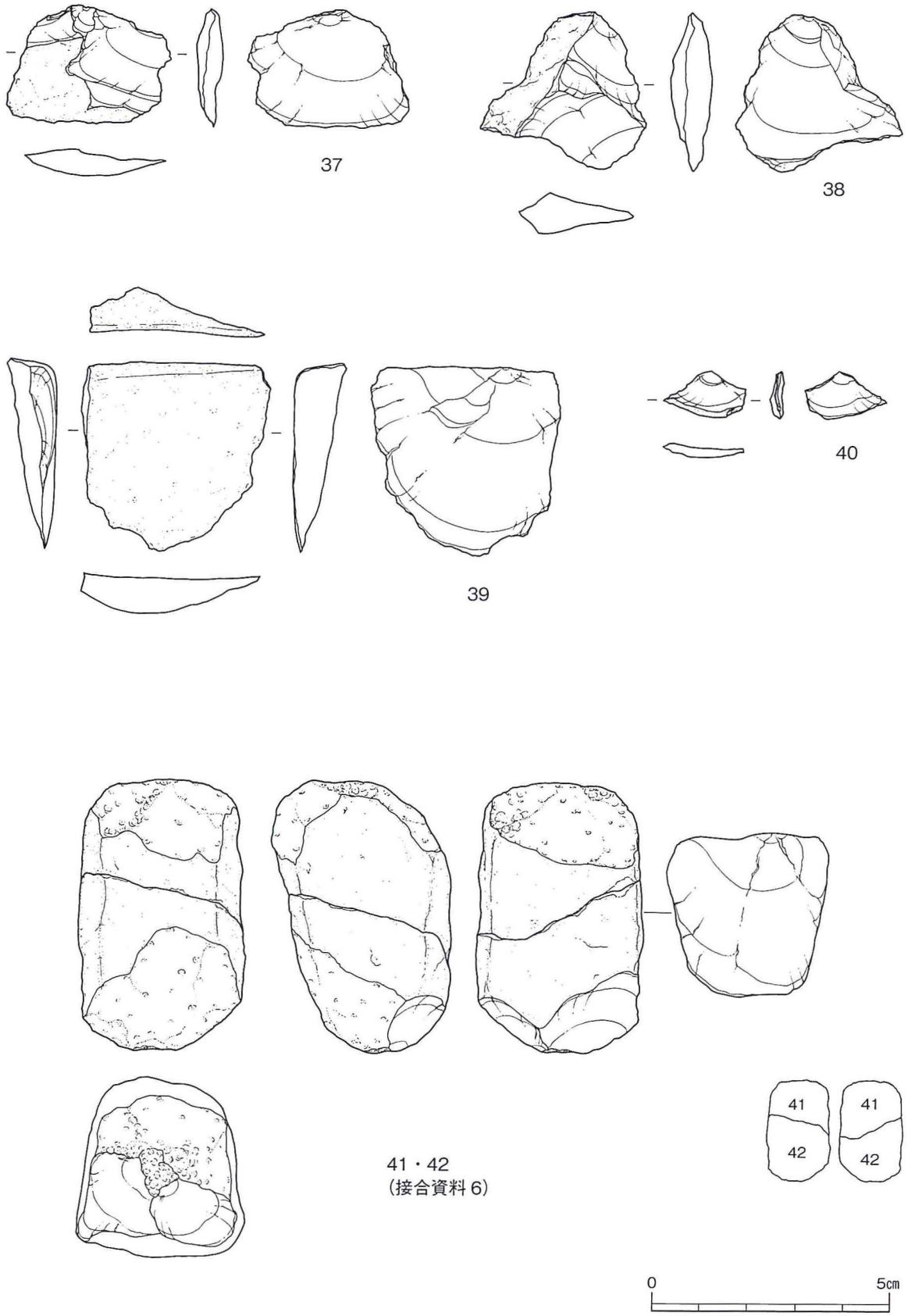
37は剥片である。幅広の不定形剥片で，打面は非常に小さく残置している。背面は原礫面と先行剥離面で構成されている。石材は砂岩Dである。

38は剥片である。打点は残置していないものの，バルブが発達しており，側縁部は一部同時割れを起こしていると考えられる。下端部は折れ面である。背面には原礫面あるいは節理面と考えられる部分も見られる。石材は砂岩Dである。

39は剥片である。打面と背面は一連の原礫面で，石核の素材の形状が亜角礫であったことをうかがわせる資料である。左側縁は折れ面で，幅広の剥片であったと考えられる。石材は砂岩Dである。

40は剥片である。非常に小型で，打面は残置しておらず，さらに打面の周辺は折れ面と考えられるが，打点を近辺に想定可能な資料である。背面が全体的にやや赤味をおびているので，先行剥離と考えられる面は本剥片の剥離とは時間的な開きがあることも考えられる。石材は砂岩Dである。

41・42（接合資料6）は敲石である。棒状の亜角礫を素材としており，両端は使用によると思われる潰れによって広く覆われている。特に下端部では使用による衝撃によって剥落したと思われる剥離面が観察され，さらにそれらの上には痘痕状の潰れが認められる。器体はほぼ中央で二分されるように折れているが，非常に近接して出土しており，欠損のため廃棄されたものと考えられる。石材は砂岩Dである。（中村）



第33図　Ⅱ文化層出土石器

第３表　遺物計測表

挿図番号	遺物番号	器種（類）	出土区	標高(m)	層位	文化層	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	石材	受熱	備考	接合
19	1	石斧	D9	116.982	13	I	5.40	2.80	1.24	18.3	頁岩	なし	未製品・接合資料1	1+2
19	2	石斧	D9	117.086	13	I	5.90	3.30	1.80	43.7	頁岩	なし	未製品・接合資料1	1+2
19	3	削器	D9	117.176	13	I	5.30	3.60	0.97	16.8	砂岩D	有り		
19	4	台形様石器	D9	117.264	13	I	4.20	2.50	0.53	4.4	砂岩D	なし		
20.21	5	剥片	D9	117.206	13	I	3.40	2.10	0.26	2.2	砂岩D	なし	接合資料2	5+6+7+8+9+10+11+12+13
20.21	6	剥片	D9	117.254	13	I	3.00	2.40	0.63	3.2	砂岩D	なし	接合資料2	5+6+7+8+9+10+11+12+13
20.21	7	剥片	D9	117.177	13	I	1.90	0.60	0.20	0.3	砂岩D	なし	接合資料2	5+6+7+8+9+10+11+12+13
20.21	8	剥片	D9	117.270	13	I	2.20	1.70	0.50	1.8	砂岩D	なし	接合資料2	5+6+7+8+9+10+11+12+13
20.21	9	剥片	D9	117.269	13	I	1.20	0.90	0.40	0.3	砂岩D	なし	接合資料2	5+6+7+8+9+10+11+12+13
20.21	10	基部加工石器	D9	117.265	13	I	13.30	4.80	1.12	55	砂岩D	なし	接合資料2	5+6+7+8+9+10+11+12+13
20.22	11	剥片	D9	117.244	13	I	1.80	0.50	0.35	0.4	砂岩D	なし	接合資料2	5+6+7+8+9+10+11+12+13
20.22	12	剥片	D9	117.190	13	I	3.60	2.60	0.54	3.9	砂岩D	なし	接合資料2	5+6+7+8+9+10+11+12+13
20.22	13	石核	D9	117.309	11	I	10.80	6.50	4.28	211	砂岩D	なし	接合資料2	5+6+7+8+9+10+11+12+13
24	14	剥片	D9	117.119	13	I	1.30	1.10	0.20	0.3	砂岩D	なし	接合資料3	14+15+16+17+18+19
24	15	使用痕剥片	D9	117.197	13	I	1.90	0.90	0.32	0.5	砂岩D	なし	接合資料3	14+15+16+17+18+19
24	16	使用痕剥片	D9	117.245	13	I	2.20	1.90	0.33	1.3	砂岩D	なし	接合資料3	14+15+16+17+18+19
24	17	剥片	D9	117.114	13	I	1.30	0.60	0.23	0.2	砂岩D	なし	接合資料３	14+15+16+17+18+19
24	18	使用痕剥片	D9	117.225	13	I	4.80	2.70	0.52	7.4	砂岩D	なし	接合資料3	14+15+16+17+18+19
24	19	使用痕剥片	D9	117.252	13	I	7.60	5.40	0.70	22.7	砂岩D	なし	接合資料3	14+15+16+17+18+19
25	20	剥片	D9	117.218	13	I	2.00	1.30	0.50	1.2	砂岩D	なし	接合資料4	20+21+22+23
25	21	剥片	D9	117.257	13	I	1.80	1.50	3.20	0.7	砂岩D	なし	接合資料4	20+21+22+23
25	22	剥片	D9	117.195	13	I	1.40	1.30	0.35	0.6	砂岩D	なし	接合資料4	20+21+22+23
25	23	剥片	D9	117.169	13	I	4.50	4.10	1.66	25.2	砂岩D	なし	接合資料4	20+21+22+23
25	24	剥片	D9	117.258	13	I	1.60	1.30	0.26	0.4	砂岩D	なし	接合資料5	24+25
25	25	剥片	D9	117.263	13	I	3.00	2.3	0.37	2.2	砂岩D	なし	接合資料5	24+25
26	26	剥片	D9	117.200	13	I	2.90	2.20	0.90	5.2	砂岩D	なし		
26	27	剥片	D9	117.168	13	I	4.40	1.90	0.62	3.6	砂岩D	なし		
26	28	剥片	D9	117.207	13	I	2.50	2.40	0.72	3.4	砂岩D	なし		
26	29	剥片	D9	117.228	13	I	2.90	2.20	0.67	2.4	砂岩D	なし		
26	30	剥片	D9	117.240	13	I	2.00	1.60	0.39	0.9	砂岩D	なし		
26	31	剥片	D9	117.226	13	I	2.10	1.50	0.32	0.9	砂岩D	なし		
26	32	剥片	D9	117.215	13	I	1.80	1.70	0.35	1.1	砂岩D	なし		
26	33	剥片	D9	117.207	13	I	14.10	1.80	0.94	4.4	砂岩D	なし		
26	34	剥片	D10	117.129	13	I	7.20	6.30	3.31	89.9	砂岩D	なし		
27	35	礫器	D9	117.174	13	I	11.20	10.80	4.88	602	砂岩D	なし		
28	36	敲石（磨石）	E9	116.885	13	I	6.70	5.50	3.20	78.6	砂岩A	なし		
33	37	剥片	D9	117.373	11	II	3.60	2.60	0.60	4.2	砂岩D	なし		
33	38	剥片	G9	116.867	11	II	3.40	3.30	0.84	6	砂岩D	なし		
33	39	剥片	D9	117.376	11	II	4.10	4.00	0.90	13.9	砂岩D	なし		
33	40	剥片	G9	117.165	11	II	1.70	1.00	0.17	0.3	砂岩D	なし		
33	41	敲石	F9	116.926	11	II	4.50	3.70	2.38	48.6	砂岩D	なし	接合資料6	41+42
33	42	敲石	F9	116.921	11	II	4.60	4.10	3.56	56.8	砂岩D	なし	接合資料6	41+42
34	43	剥片	F-7	117.443	13	I	3.50	3.60	1.30	9.7	砂岩D	なし	接合資料7.平成8年度出土	43+44
34	44	鋸歯縁石器	E-7	117.483	13	I	7.20	3.20	1.70	32.3	砂岩D	なし	接合資料7.平成8年度出土	43+44

第４表　遺物・礫接合表

接合番号	接合した資料	長さ（cm）	幅（cm）	厚さ（cm）	重さ（kg）	石材	受熱	備考
1	1+2	7	4.5	1.9	0.062	頁岩	なし	石斧未製品
2	5+6+7+8+9+10+11+12+13	15.3	6.3	5.7	0.28	砂岩D	なし	
3	14+15+16+17+18+19	8.9	7	1.2	0.033	砂岩D	なし	
4	20+21+22+23	4.7	4.55	1.8	0.028	砂岩D	なし	
5	24+25	3.7	2.7	4.5	2.2	砂岩D	なし	
6	41+42	5.7	3.55	4.8	0.105	砂岩D	なし	
7	43+44	7.2	4.7	2.5	0.042	砂岩D	なし	
8	100+103+105+107+123	6	4.6	3.7	0.072	砂岩A	有り	8号礫群内
9	102+152	13.5	10	2.3	0.21	砂岩A	有り	8号礫群内
10	109+114+132	10.1	4.8	2.1	0.112	砂岩A	有り	8号礫群内
11	106+126+146+161+227+235+249+250+251	24.1	16.8	3.9	0.118	砂岩A	有り	8号・9号礫群接合
12	110+117+128+130	10.5	5.6	3.8	0.136	砂岩A	有り	8号礫群内
13	112+252	11.4	10.2	2.3	0.187	砂岩A	有り	8号・9号礫群接合
14	118+148	10.7	8.5	3.6	0.198	砂岩A	有り	8号礫群内
15	119+129++153	10.35	7.4	3.2	0.28	砂岩A	有り	8号礫群内
16	121+157	9.8	8.6	3.1	0.31	砂岩A	有り	8号礫群内
17	120+133+134+135+136+138+237	21.25	15	3.7	1.11	砂岩A	有り	8号・9号礫群接合
18	124+125+224+229	11.5	6.5	5.3	0.315	砂岩A	有り	8号・9号礫群接合
19	127+131+142+226+232	15.6	11.55	3.8	0.59	砂岩A	有り	8号・9号礫群接合
20	137+149	11.1	10	2.7	0.268	砂岩A	有り	9号礫群内
21	139+141+147+164+225	21.8	13.05	3.1	1.11	砂岩A	有り	8号・9号礫群接合
22	116+140	7.1	5.2	3.7	0.143	砂岩A	有り	8号礫群内
23	150+234	15	8.3	3.5	0.455	砂岩A	有り	8号・9号礫群接合
24	154+253	17.1	8	5.6	0.675	砂岩A	有り	8号礫群内
25	156+222+228	9.3	8.5	5.6	0.435	砂岩A	有り	8号・9号礫群接合
26	158+159+160+254	16.1	9.65	6.2	1.02	砂岩A	有り	8号礫群内
27	169+170+174+177+181+186+242	14.7	7	4.4	0.32	砂岩B	有り	8号・9号礫群接合
28	172+176+180+184+185+255	10.7	7.3	4.7	0.339	砂岩B	有り	8号礫群内
29	173+182+183	6.9	5.2	3.7	0.185	砂岩B	有り	8号礫群内
30	187+256+257+258	10.55	6.6	4.8	0.312	砂岩B	有り	8号礫群内
31	188+189+190+191+192+246+247+259+260	13.95	8.6	4.3	0.426	砂岩C	有り	8号・9号礫群接合
32	194+196+205	6	4.5	2	0.049	砂岩E	有り	8号礫群内
33	221+223	8.6	5.45	1.9	0.094	砂岩A	有り	9号礫群内

第５表　砕片計測表

遺物番号	器種（類）	出土区	標高(m)	層位	文化層	長さ（cm）	幅（cm）	厚さ（cm）	重さ（g）	石材	受熱	備考
45	砕片	C9	117.246	13	I	1.40	1.20	0.30	0.6	砂岩D	なし	
46	砕片	C9	117.181	13	I	8.60	7.10	4.87	260	砂岩D	なし	
47	砕片	D9	117.252	13	I	2.40	1.30	0.40	1	砂岩D	なし	
48	砕片	D9	117.265	13	I	2.20	0.80	0.45	0.6	砂岩D	なし	
49	砕片	D9	117.258	13	I	4.50	4.90	1.72	23.5	砂岩D	なし	
50	砕片	D9	117.219	13	I	1.80	1.30	0.25	0.5	砂岩D	なし	
51	砕片	D9	117.159	13	I	1.40	1.30	0.27	0.5	砂岩D	なし	
52	砕片	D9	117.209	13	I	2.40	1.30	0.22	0.8	砂岩D	なし	
53	砕片	D9	117.234	13	I	1.30	1.10	0.28	0.5	砂岩D	なし	
54	砕片	D9	117.219	13	I	3.30	1.00	0.50	1.1	砂岩D	なし	
55	砕片	D9	117.170	13	I	2.20	1.70	0.69	1.9	砂岩D	なし	
56	砕片	D9	117.241	13	I	1.20	0.90	0.31	0.4	砂岩D	なし	
57	砕片	D9	117.210	13	I	1.10	0.90	0.21	0.3	砂岩D	なし	
58	砕片	D9	117.168	13	I	1.90	1.40	0.28	0.6	砂岩D	なし	
59	砕片	D9	117.156	13	I	1.20	1.10	0.45	0.4	砂岩D	なし	
60	砕片	D9	117.200	13	I	1.50	0.90	0.21	0.3	砂岩D	なし	
61	砕片	D9	117.171	13	I	1.00	0.60	0.19	0.1	砂岩D	なし	
62	砕片	D9	117.243	13	I	0.90	0.50	0.18	0.1	砂岩D	なし	
63	砕片	D9	117.194	13	I	0.70	0.50	0.17	0.09	砂岩D	なし	
64	砕片	D9	117.244	13	I	0.60	0.50	0.18	0.09	砂岩D	なし	
65	砕片	D9	117.244	13	I	0.70	0.60	0.18	0.05	砂岩D	なし	
66	砕片	D9	117.214	13	I	0.90	0.60	0.15	0.1	砂岩D	なし	
67	砕片	D9	117.192	13	I	1.10	0.70	0.20	0.1	砂岩D	なし	
68	砕片	D9	117.077	13	I	1.40	1.00	0.25	0.3	砂岩D	なし	
69	砕片	D9	117.191	13	I	0.60	0.50	0.13	0.05	砂岩D	なし	
70	砕片	D9	117.181	13	I	0.90	0.80	0.28	0.2	砂岩D	なし	
71	砕片	D9	117.208	13	I	1.20	1.00	0.21	0.2	砂岩D	なし	
72	砕片	D9	117.286	13	I	2.20	0.90	0.24	0.3	砂岩D	なし	
73	砕片	D9	117.149	13	I	1.00	0.70	0.18	0.2	砂岩D	なし	
74	砕片	D9	117.276	13	I	1.00	1.00	0.26	0.2	砂岩D	なし	
75	砕片	D9	117.200	13	I	1.40	0.90	0.22	0.2	砂岩D	なし	
76	砕片	D9	117.210	13	I	1.60	0.80	0.25	0.2	砂岩D	なし	
77	砕片	D9	117.120	13	I	1.10	0.80	0.25	0.2	砂岩D	なし	
78	砕片	D9	117.207	13	I	1.10	1.00	0.21	0.2	砂岩D	なし	
79	砕片	D9	117.254	13	I	1.00	0.80	0.25	0.1	砂岩D	なし	
80	砕片	D9	117.240	13	I	1.30	1.10	0.24	0.4	砂岩D	なし	
81	砕片	D9	117.162	13	I	1.40	0.90	0.26	0.3	砂岩D	なし	
82	砕片	D9	117.263	13	I	2.10	1.30	0.35	0.5	砂岩D	なし	
83	砕片	D9	117.231	13	I	1.40	1.40	0.32	0.6	砂岩D	なし	
84	砕片	D9	117.101	13	I	1.80	1.40	0.27	0.6	砂岩D	なし	
85	砕片	D9	117.049	13	I	1.20	1.10	0.59	0.7	砂岩D	なし	
86	砕片	D9	117.149	13	I	2.40	0.80	0.68	1.4	砂岩D	なし	
87	砕片	D9	117.234	13	I	1.90	0.90	0.68	1.1	砂岩D	なし	
88	砕片	D9	117.147	13	I	1.40	1.30	0.47	0.9	砂岩D	なし	
89	砕片	D9	117.208	13	I	3.40	2.00	0.83	3.7	砂岩D	なし	
90	砕片	D9	117.245	13	I	1.50	1.00	0.46	0.7	砂岩D	なし	
91	砕片	D9	117.160	13	I	1.90	1.00	0.39	0.6	砂岩D	なし	
92	砕片	D9	117.218	13	I	1.10	0.70	0.24	0.2	砂岩D	なし	
93	砕片	D9	117.224	13	I	5.70	3.00	1.94	11.4	砂岩D	なし	
94	砕片	D9	117.266	13	I	4.90	1.80	1.27	8.2	砂岩D	なし	
95	砕片	D9	117.251	13	I	1.30	0.80	0.14	0.2	砂岩D	なし	
96	砕片	D9	117.156	13	I	1.40	0.90	0.20	0.2	砂岩D	なし	
97	砕片	D9	117.263	13	I	1.60	0.80	0.31	0.4	砂岩D	なし	
98	砕片	E9	117.011	13	I	5.70	1.50	0.60	4.7	砂岩D	なし	
99	砕片	E9	117.032	13	I	3.30	2.50	0.47	2.7	砂岩D	なし	

第６表　礫群内礫計測表(1)

遺物番号	出土区	標高(m)	層位	文化層	長さ（cm）	幅（cm）	厚さ（cm）	重さ（g）	石材	受熱	備　考	接　合
100	C9	-	11	Ⅱ	2.10	1.50	1.10	3.4	砂岩Ａ	有り	８号礫群	100+103+105+107+123
101	C9	-	11	Ⅱ	2.60	2.10	1.48	8.6	砂岩Ａ	有り	８号礫群	
102	C9	-	11	Ⅱ	3.00	2.60	1.09	8.8	砂岩Ａ	有り	８号礫群	102+152
103	C9	-	11	Ⅱ	3.30	2.30	1.90	10.7	砂岩Ａ	有り	８号礫群	100+103+105+107+123
104	C9	-	11	Ⅱ	2.90	2.70	1.40	10.8	砂岩Ａ	有り	８号礫群	
105	C9	-	11	Ⅱ	2.70	2.40	1.65	11.6	砂岩Ａ	有り	８号礫群	100+103+105+107+123
106	C9	-	11	Ⅱ	3.60	2.10	1.87	11.6	砂岩Ａ	有り	８号礫群	106+126+146+161+227+235+249+250+251
107	C9	-	11	Ⅱ	3.00	2.80	1.43	11.8	砂岩Ａ	有り	８号礫群	100+103+105+107+123
108	C9	-	11	Ⅱ	2.90	2.30	1.45	11.8	砂岩Ａ	有り	８号礫群	
109	C9	-	11	Ⅱ	2.70	2.60	1.78	12.1	砂岩Ａ	有り	８号礫群	109+114+132
110	C9	-	11	Ⅱ	3.20	2.70	2.05	14.3	砂岩Ａ	有り	８号礫群	110+117+128+130
111	C9	-	11	Ⅱ	3.40	2.40	1.95	16.5	砂岩Ａ	有り	８号礫群	
112	C9	-	11	Ⅱ	3.80	3.30	1.28	17.6	砂岩Ａ	有り	８号礫群	112+252
113	C9	-	11	Ⅱ	3.70	2.90	2.10	20.2	砂岩Ａ	有り	８号礫群	
114	C9	-	11	Ⅱ	3.20	3.10	1.89	21.9	砂岩Ａ	有り	８号礫群	109+114+132
115	C9	-	11	Ⅱ	3.90	3.90	1.53	23.7	砂岩Ａ	有り	８号礫群	
116	C9	-	11	Ⅱ	3.10	3.00	2.25	25.5	砂岩Ａ	有り	８号礫群	116+140
117	C9	-	11	Ⅱ	5.80	3.10	2.61	27	砂岩Ａ	有り	８号礫群	110+117+128+130
118	C9	-	11	Ⅱ	4.30	3.80	1.89	29.7	砂岩Ａ	有り	８号礫群	118+148
119	C9	-	11	Ⅱ	3.20	3.00	3.00	32.1	砂岩Ａ	有り	８号礫群	119+129+153
120	C9	-	11	Ⅱ	4.30	3.20	2.48	32.7	砂岩Ａ	有り	８号礫群	120+133+134+135+136+138+237
121	C9	-	11	Ⅱ	4.30	4.20	2.98	34.2	砂岩Ａ	有り	８号礫群	121+157
122	C9	-	11	Ⅱ	4.60	3.40	1.63	34.7	砂岩Ａ	有り	８号礫群	
123	C9	-	11	Ⅱ	4.60	4.40	2.85	34.8	砂岩Ａ	有り	８号礫群	100+103+105+107+123
124	C9	-	11	Ⅱ	4.80	3.40	2.07	35.2	砂岩Ａ	有り	８号礫群	124+125+224+229
125	C9	-	11	Ⅱ	4.00	3.90	2.81	36.9	砂岩Ａ	有り	８号礫群	124+125+224+229
126	C9	-	11	Ⅱ	3.50	3.30	2.66	39.3	砂岩Ａ	有り	８号礫群	106+126+146+161+227+235+249+250+251
127	C9	-	11	Ⅱ	4.30	3.40	2.20	39.5	砂岩Ａ	有り	８号礫群	127+131+142+226+232
128	C9	-	11	Ⅱ	5.30	3.40	2.80	46.1	砂岩Ａ	有り	８号礫群	110+117+128+130
129	C9	-	11	Ⅱ	4.10	4.00	2.70	47.7	砂岩Ａ	有り	８号礫群	119+129+153
130	C9	-	11	Ⅱ	5.30	3.40	3.12	49.1	砂岩Ａ	有り	８号礫群	110+117+128+130
131	C9	-	11	Ⅱ	5.90	4.70	2.61	67	砂岩Ａ	有り	８号礫群	127+131+142+226+232
132	C9	-	11	Ⅱ	5.90	4.80	2.31	78.8	砂岩Ａ	有り	８号礫群	109+114+132
133	C9	-	11	Ⅱ	5.70	4.70	2.45	79.8	砂岩Ａ	有り	８号礫群	120+133+134+135+136+138+237
134	C9	-	11	Ⅱ	4.50	4.40	2.92	80.9	砂岩Ａ	有り	８号礫群	120+133+134+135+136+138+237
135	C9	-	11	Ⅱ	5.10	4.80	2.61	85.6	砂岩Ａ	有り	８号礫群	120+133+134+135+136+138+237
136	C9	-	11	Ⅱ	6.30	5.00	2.79	92.1	砂岩Ａ	有り	８号礫群	120+133+134+135+136+138+237
137	C9	-	11	Ⅱ	8.50	5.10	2.33	96.3	砂岩Ａ	有り	８号礫群	137+149
138	C9	-	11	Ⅱ	6.20	5.00	2.64	103.5	砂岩Ａ	有り	８号礫群	120+133+134+135+136+138+237
139	C9	-	11	Ⅱ	7.40	5.00	2.93	117.1	砂岩Ａ	有り	８号礫群	139+141+147+164+225
140	C9	-	11	Ⅱ	6.00	5.80	3.48	118.1	砂岩Ａ	有り	８号礫群	116+140
141	C9	-	11	Ⅱ	6.50	5.50	2.97	139.7	砂岩Ａ	有り	８号礫群	139+141+147+164+225
142	C9	-	11	Ⅱ	7.80	6.20	3.60	146.5	砂岩Ａ	有り	８号礫群	127+131+142+226+232
143	C9	-	11	Ⅱ	8.00	7.40	3.00	147.9	砂岩Ａ	有り	８号礫群	
144	C9	-	11	Ⅱ	8.00	7.60	2.20	151.2	砂岩Ａ	有り	８号礫群	
145	C9	-	11	Ⅱ	8.00	7.30	3.19	157	砂岩Ａ	有り	８号礫群	
146	C9	-	11	Ⅱ	8.20	6.00	3.31	164.4	砂岩Ａ	有り	８号礫群	106+126+146+161+227+235+249+250+251
147	C9	-	11	Ⅱ	6.70	6.20	2.98	164.6	砂岩Ａ	有り	８号礫群	139+141+147+164+225
148	C9	-	11	Ⅱ	10.40	6.30	2.71	169.5	砂岩Ａ	有り	８号礫群	118+148
149	C9	-	11	Ⅱ	10.30	7.00	2.16	170.9	砂岩Ａ	有り	８号礫群	137+149
150	C9	-	11	Ⅱ	8.70	5.70	3.35	178.6	砂岩Ａ	有り	８号礫群	150+234
151	C9	-	11	Ⅱ	10.90	6.80	2.50	182.6	砂岩Ａ	有り	８号礫群	
152	C9	-	11	Ⅱ	13.50	8.60	1.90	201.2	砂岩Ａ	有り	８号礫群	102+152
153	C9	-	11	Ⅱ	7.20	6.20	3.10	201.3	砂岩Ａ	有り	８号礫群	119+129+153
154	C9	-	11	Ⅱ	8.40	7.40	3.33	205	砂岩Ａ	有り	８号礫群	154+253
155	C9	-	11	Ⅱ	11.00	10.20	3.10	245.8	砂岩Ａ	有り	８号礫群	
156	C9	-	11	Ⅱ	8.30	6.10	5.79	254	砂岩Ａ	有り	８号礫群	156+222+228
157	C9	-	11	Ⅱ	10.80	8.20	3.08	276	砂岩Ａ	有り	８号礫群	121+157
158	C9	-	11	Ⅱ	9.50	6.00	5.36	292	砂岩Ａ	有り	８号礫群	158+159+160+254
159	C9	-	11	Ⅱ	7.40	7.20	5.31	293	砂岩Ａ	有り	８号礫群	158+159+160+254
160	C9	-	11	Ⅱ	7.60	6.40	6.02	354	砂岩Ａ	有り	８号礫群	158+159+160+254
161	C9	-	11	Ⅱ	10.40	10.00	3.14	378	砂岩Ａ	有り	８号礫群	106+126+146+161+227+235+249+250+251
162	C9	-	11	Ⅱ	14.00	11.40	3.30	453	砂岩Ａ	有り	８号礫群	
163	C9	-	11	Ⅱ	9.40	8.40	7.06	532	砂岩Ａ	有り	８号礫群	
164	C9	117.261	11	Ⅱ	12.50	12.30	3.23	565	砂岩Ａ	有り	８号礫群	139+141+147+164+225
165	C9	-	11	Ⅱ	3.10	2.00	1.63	8.4	砂岩Ｂ	有り	８号礫群	
166	C9	-	11	Ⅱ	2.80	2.30	1.54	9.8	砂岩Ｂ	有り	８号礫群	
167	C9	-	11	Ⅱ	3.30	2.10	1.76	10.2	砂岩Ｂ	有り	８号礫群	
168	C9	-	11	Ⅱ	3.60	2.50	1.89	15.2	砂岩Ｂ	有り	８号礫群	
169	C9	-	11	Ⅱ	3.70	2.70	2.58	16.2	砂岩Ｂ	有り	８号礫群	169+170+174+177+181+186+242
170	C9	-	11	Ⅱ	4.50	3.30	1.67	22	砂岩Ｂ	有り	８号礫群	169+170+174+177+181+186+242
171	C9	-	11	Ⅱ	4.50	3.50	1.61	22.4	砂岩Ｂ	有り	８号礫群	
172	C9	-	11	Ⅱ	4.60	2.90	1.82	23.8	砂岩Ｂ	有り	８号礫群	172+176+180+184+185+255
173	C9	-	11	Ⅱ	3.50	3.20	2.35	25.9	砂岩Ｂ	有り	８号礫群	173+182+183
174	C9	-	11	Ⅱ	3.50	3.30	2.21	31.7	砂岩Ｂ	有り	８号礫群	169+170+174+177+181+186+242
175	C9	-	11	Ⅱ	6.00	3.50	1.75	32	砂岩Ｂ	有り	８号礫群	
176	C9	-	11	Ⅱ	7.20	3.20	2.49	39.6	砂岩Ｂ	有り	８号礫群	172+176+180+184+185+255
177	C9	-	11	Ⅱ	4.60	3.90	2.18	40	砂岩Ｂ	有り	８号礫群	169+170+174+177+181+186+242
178	C9	-	11	Ⅱ	6.60	5.20	2.20	62	砂岩Ｂ	なし	８号礫群	
179	C9	-	11	Ⅱ	6.10	4.40	3.84	63.9	砂岩Ｂ	有り	８号礫群	
180	C9	-	11	Ⅱ	7.30	3.70	2.92	64	砂岩Ｂ	有り	８号礫群	172+176+180+184+185+255
181	C9	-	11	Ⅱ	6.70	4.50	2.97	70.1	砂岩Ｂ	有り	８号礫群	169+170+174+177+181+186+242
182	C9	-	11	Ⅱ	5.10	4.10	3.00	73.8	砂岩Ｂ	有り	８号礫群	173+182+183
183	C9	-	11	Ⅱ	5.60	4.10	3.17	86.1	砂岩Ｂ	有り	８号礫群	173+182+183

第７表　礫群内礫計測表(2)

遺物番号	出土区	標高(m)	層位	文化層	長さ（cm）	幅（cm）	厚さ（cm）	重さ（g）	石材	受熱	備　考	接　　合
184	C9	-	11	Ⅱ	5.40	4.80	4.70	94.1	砂岩Ｂ	有り	８号礫群	172+176+180+184+185+255
185	C9	-	11	Ⅱ	7.40	4.60	3.70	114.5	砂岩Ｂ	有り	８号礫群	172+176+180+184+185+255
186	C9	-	11	Ⅱ	7.00	6.20	2.88	137.2	砂岩Ｂ	有り	８号礫群	169+170+174+177+181+186+242
187	D9	117.432	11	Ⅱ	-	-	-	-	砂岩Ｂ	有り	８号礫群	187+256+257+258
188	C9	-	11	Ⅱ	3.30	2.50	3.02	21.7	砂岩Ｃ	有り	８号礫群	188+189+190+191+192+246+247+259+260
189	C9	117.390	11	Ⅱ	5.90	4.00	2.33	40.9	砂岩Ｃ	有り	８号礫群	188+189+190+191+192+246+247+259+260
190	C9	-	11	Ⅱ	4.70	3.70	2.54	44.4	砂岩Ｃ	有り	８号礫群	188+189+190+191+192+246+247+259+260
191	C9	117.381	11	Ⅱ	6.90	5.10	1.87	77.3	砂岩Ｃ	有り	８号礫群	188+189+190+191+192+246+247+259+260
192	C9	-	11	Ⅱ	6.40	5.50	3.30	108.2	砂岩Ｃ	有り	８号礫群	188+189+190+191+192+246+247+259+260
193	C9	-	11	Ⅱ	3.50	2.30	0.74	5.2	砂岩Ｅ	有り	８号礫群	
194	C9	-	11	Ⅱ	3.80	1.70	1.20	7.5	砂岩Ｅ	有り	８号礫群	194+196+205
195	C9	-	11	Ⅱ	3.50	2.60	0.77	8.1	砂岩Ｅ	有り	８号礫群	
196	C9	-	11	Ⅱ	5.20	3.20	0.80	10.4	砂岩Ｅ	有り	８号礫群	194+196+205
197	C9	-	11	Ⅱ	5.00	2.70	1.26	15.9	砂岩Ｅ	有り	８号礫群	
198	C9	-	11	Ⅱ	6.50	2.60	1.16	18.9	砂岩Ｅ	有り	８号礫群	
199	C9	-	11	Ⅱ	4.40	2.90	1.76	20.1	砂岩Ｅ	有り	８号礫群	
200	C9	-	11	Ⅱ	4.50	3.60	1.61	20.6	砂岩Ｅ	有り	８号礫群	
201	C9	-	11	Ⅱ	4.80	3.30	1.38	21.4	砂岩Ｅ	有り	８号礫群	
202	C9	-	11	Ⅱ	5.70	3.70	1.44	25.8	砂岩Ｅ	有り	８号礫群	
203	C9	-	11	Ⅱ	4.30	3.60	1.87	26.2	砂岩Ｅ	有り	８号礫群	
204	C9	-	11	Ⅱ	5.50	4.50	1.26	29.7	砂岩Ｅ	有り	８号礫群	
205	C9	-	11	Ⅱ	5.70	4.00	1.19	31.4	砂岩Ｅ	有り	８号礫群	194+196+205
206	C9	-	11	Ⅱ	5.40	4.20	2.05	33.7	砂岩Ｅ	有り	８号礫群	
207	C9	-	11	Ⅱ	7.10	4.70	1.21	34.9	砂岩Ｅ	有り	８号礫群	
208	C9	-	11	Ⅱ	6.00	3.90	1.76	35.2	砂岩Ｅ	有り	８号礫群	
209	C9	-	11	Ⅱ	5.50	3.70	1.97	36.4	砂岩Ｅ	有り	８号礫群	
210	C9	-	11	Ⅱ	6.30	4.60	2.08	47	砂岩Ｅ	有り	８号礫群	
211	C9	-	11	Ⅱ	5.30	4.90	2.23	47.8	砂岩Ｅ	有り	８号礫群	
212	C9	-	11	Ⅱ	7.50	4.60	1.55	52.1	砂岩Ｅ	有り	８号礫群	
213	C9	-	11	Ⅱ	7.20	5.20	1.73	65	砂岩Ｅ	有り	８号礫群	
214	C9	-	11	Ⅱ	6.40	6.10	1.41	66.1	砂岩Ｅ	有り	８号礫群	
215	C9	-	11	Ⅱ	7.00	6.40	2.06	67.8	砂岩Ｅ	有り	８号礫群	
216	C9	-	11	Ⅱ	7.30	5.20	1.76	70	砂岩Ｅ	有り	８号礫群	
217	C9	-	11	Ⅱ	8.00	5.10	2.43	82.5	砂岩Ｅ	有り	８号礫群	
218	C9	-	11	Ⅱ	9.10	5.70	1.76	96.8	砂岩Ｅ	有り	８号礫群	
219	C9	-	11	Ⅱ	10.10	7.20	2.08	102.1	砂岩Ｅ	有り	８号礫群	
220	C9	-	11	Ⅱ	8.60	6.30	2.37	116	砂岩Ｅ	有り	８号礫群	
221	C9	117.131	11	Ⅱ	3.20	2.70	1.39	14.2	砂岩Ａ	有り	９号礫群	221+223
222	C9	117.139	11	Ⅱ	5.20	3.90	2.31	46.3	砂岩Ａ	有り	９号礫群	156+222+228
223	C9	117.135	11	Ⅱ	8.00	5.40	1.87	81.2	砂岩Ａ	有り	９号礫群	221+223
224	C9	117.158	11	Ⅱ	8.10	4.80	3.94	90.5	砂岩Ａ	有り	９号礫群	124+125+224+229
225	C9	117.071	11	Ⅱ	5.40	4.50	2.78	98.1	砂岩Ａ	有り	９号礫群	139+141+147+164+225
226	C9	117.160	11	Ⅱ	8.60	6.50	2.28	118.7	砂岩Ａ	有り	９号礫群	127+131+142+226+232
227	C9	117.198	11	Ⅱ	6.20	5.40	3.47	133.5	砂岩Ａ	有り	９号礫群	106+126+146+161+227+235+249+250+251
228	C9	117.221	11	Ⅱ	6.20	6.20	3.68	133.6	砂岩Ａ	有り	９号礫群	156+222+228
229	C9	117.200	11	Ⅱ	7.40	5.00	4.85	153.2	砂岩Ａ	有り	９号礫群	124+125+224+229
230	C9	117.260	11	Ⅱ	9.30	6.70	3.15	181.5	砂岩Ａ	有り	９号礫群	
231	C9	117.173	11	Ⅱ	7.80	6.60	2.74	184.9	砂岩Ａ	有り	９号礫群	
232	C9	117.220	11	Ⅱ	7.30	8.90	3.71	221	砂岩Ａ	有り	９号礫群	127+131+142+226+232
233	C9	117.225	11	Ⅱ	9.50	7.40	3.43	261	砂岩Ａ	有り	９号礫群	
234	C9	117.203	11	Ⅱ	12.40	6.80	3.19	278	砂岩Ａ	有り	９号礫群	150+234
235	C9	117.213	11	Ⅱ	12.20	8.30	3.68	423	砂岩Ａ	有り	９号礫群	106+126+146+161+227+235+249+250+251
236	C9	117.210	11	Ⅱ	17.60	10.30	3.20	578	砂岩Ａ	有り	９号礫群	
237	C9	117.123	11	Ⅱ	16.00	11.20	3.31	615	砂岩Ａ	有り	９号礫群	120+133+134+135+136+138+237
238	C9	117.199	11	Ⅱ	0.90	0.70	0.09	0.1	砂岩Ｂ	有り	９号礫群	
239	C9	117.181	11	Ⅱ	1.60	1.30	0.50	1	砂岩Ｂ	有り	９号礫群	
240	C9	117.205	11	Ⅱ	2.00	1.60	0.96	2.5	砂岩Ｂ	有り	９号礫群	
241	C9	117.221	11	Ⅱ	2.60	1.40	0.82	2.9	砂岩Ｂ	有り	９号礫群	
242	C9	117.179	11	Ⅱ	2.80	1.40	0.68	3.6	砂岩Ｂ	有り	９号礫群	169+170+174+177+181+186+242
243	C9	117.175	11	Ⅱ	6.30	5.50	3.63	109.9	砂岩Ｂ	有り	９号礫群	
244	C9	117.213	11	Ⅱ	8.40	6.60	3.89	175	砂岩Ｂ	有り	９号礫群	
245	C9	117.202	11	Ⅱ	8.20	6.00	4.80	312	砂岩Ｂ	有り	９号礫群	
246	C9	117.190	11	Ⅱ	2.30	1.50	0.69	3.6	砂岩Ｃ	有り	９号礫群	188+189+190+191+192+246+247+259+260
247	C9	117.185	11	Ⅱ	3.20	2.80	1.81	15.1	砂岩Ｃ	有り	９号礫群	188+189+190+191+192+246+247+259+260
248	C9	117.510	11	Ⅱ	1.90	1.60	0.30	1.1	砂岩Ｅ	有り	９号礫群	
249	C9	117.147	11	Ⅱ	6.9	4.1	1.95	52.8	砂岩Ａ	有り		106+126+146+161+227+235+249+250+251
250	C9	117.172	11	Ⅱ	8.4	5.4	3.55	205	砂岩Ａ	有り	９号礫群	106+126+146+161+227+235+249+250+251
251	C9	117.184	11	Ⅱ	12.3	7.5	3.48	393	砂岩Ａ	有り	９号礫群	106+126+146+161+227+235+249+250+251
252	C9	117.260	11	Ⅱ	11.4	7.8	1.92	170.1	砂岩Ａ	有り	９号礫群	112+252
253	C9	117.275	11	Ⅱ	10.3	8.1	4.75	473	砂岩Ａ	有り	８号礫群	154+253
254	C9	117.197	11	Ⅱ	4.6	3.9	3.2	72.4	砂岩Ａ	なし		158+159+160+254
255	C9	117.071	11	Ⅱ	2.4	1.6	1.44	4.9	砂岩Ｂ	有り		172+176+180+184+185+255
256	D9	117.410	11	Ⅱ	8.2	5.9	3.88	193.3	砂岩Ｂ	有り		187+256+257+258
257	D9	117.394	11	Ⅱ	2.6	2.2	0.66	3.7	砂岩Ｂ	有り		187+256+257+258
258	C9	117.413	11	Ⅱ	6.7	4.8	4.3	115.3	砂岩Ｂ	有り		187+256+257+258
259	C9	117.185	11	Ⅱ	3.6	3	1.94	17.4	砂岩Ｃ	有り		188+189+190+191+192+246+247+259+260
260	C9	117.326	11	Ⅱ	4.6	6	3.91	101.7	砂岩Ｃ	有り		188+189+190+191+192+246+247+259+260

第Ⅴ章　まとめ

横峯Ｃ遺跡は，平成４年度に行われた緊急発掘調査で礫群が発見されたことによって，種子島に旧石器文化が存在することを初めて示した遺跡である。３万年を遡る礫群の発見は，当時，日本最古級の礫群の発見として新聞を賑わせ，また，南西諸島の旧石器時代の様相を探るうえでも貴重な発見であった。南種子町は，町民の高い関心のもと遺跡の重要性を評価し，平成７年度に，特に貴重と判断される範囲について町指定史跡「横峯遺跡」を指定した。その後，町が平成８～10年度に実施した重要遺跡確認調査の結果，旧石器時代のⅠ・Ⅱ文化層から縄文時代草創期・早期にわたって断続的に礫群あるいは集石という類似する機能を持つとみられる遺構が形成され続けたことがわかった。更に，後期旧石器時代末頃の細石刃が表採されており，細石器文化の遺構が存在する可能性も指摘された。また種子島の旧石器時代から縄文時代早期までを，火山灰を含め層位的に観察できる遺跡として極めて貴重である。こうした横峯Ｃ遺跡の重要性は鹿児島県にも高く評価され，平成15年度には，特に重要な範囲について県指定史跡「横峯遺跡」として指定され，保護が企てられた。

今回の緊急発掘調査は，県指定史跡「横峯遺跡」に隣接する農道部分の舗装工事に伴い実施した事前調査である。現在の農道造成時に概ねⅦ層上面までは削平を受けていて，縄文時代早期・草創期の文化層は失われていた。しかし，Ⅶ層より下位の旧石器時代に属する土層はすべて残存していた。ただし，今回の調査では，Ⅲ文化層からは遺構・遺物ともに検出されていない。

以下では，各文化層の調査成果とその評価及び今後の課題について述べたい。

1.　Ⅰ文化層

Ⅰ文化層は，上位の種Ⅳ火山灰層と下位の種Ⅲ火山灰層に挟まれた，後期旧石器時代初頭の文化層である。種Ⅳ火山灰層の存在によって，Ⅱ文化層とは層位的に区分できる。炭化物集中箇所が10箇所と頁岩製の石斧未成品と砂岩製の石器が検出された。

Ⅰ文化層の包含層であるⅩⅢ層は，場所によってはⅩⅢａ層とⅩⅢｂ層に分層が可能である。遺物及び遺構は，ⅩⅢ層の中でも種Ⅳ火山灰直下で確認される。また，分層が可能な場所においては，ⅩⅢａ層で遺物・遺構が確認されている一方，ⅩⅢｂ層からは遺構・遺物ともに確認されない。

遺構としては，これまでの調査で３基の礫群が確認されている。特に１・２号礫群は明瞭な掘り込みが確認され，掘り込み内からは多くの炭化物が検出されていた（第９図）。今回の調査ではⅠ文化層から礫群の検出はなかったものの，炭化物集中箇所が10箇所で確認された。検出された炭化材について一部，樹種同定を行った結果，３点の資料が，それぞれブナ科コナラ属アカガシ亜類，クスノキ科，マンサク科イスノキ属イスノキに同定された。このことから，Ⅰ文化層の時期は，常緑広葉樹を主とした植生が想定される。また，炭化物集中箇所に類似する遺構として，中種子町立切遺跡種Ⅳ火山灰下位のⅩⅢ層焼土遺構があげられる。立切遺跡ⅩⅢ層は，共に種Ⅳ火山灰層の下位にある点，C14年代測定法による年代値が近接する点，及び遺構と遺物が有機的に検出された点などの類似から，本遺跡のⅠ文化層と併行する時期の文化層と捉えられる。立切遺跡ⅩⅢ層の焼土遺構は，平成８・９年度の調査（田平2002a）で10箇所確認されていて，その全てにおいて炭化物の集中が

確認されている。そして，全ての焼土遺構で炭化物の分布の中心部に受熱による土色の変色箇所が明瞭に観察される。なお，土色の変色は，断面でレンズ状に観察されるものもある。対照的に横峯C遺跡の炭化物集中箇所では受熱による土質の変色等が観察されない。しかし，受熱による土質の変化は，受熱の条件や遺跡形成過程の差異によって一様ではないと予想されるので，立切遺跡においては，土質等の条件が焼土遺構を検出しやすい状況を遺存した可能性がある。従って，横峯C遺跡の炭化物集中箇所が，明瞭な受熱痕跡をとどめないからといって，積極的な評価を加えることができないわけではない。むしろ，炭化物集中箇所の分布が，石器･剥片の分布と重ならない点や，削器（第19図3）に赤化が認められることを考慮すると石器との何らかの関係性が示唆される。

本文化層で特に注目されるのは遺物である。石斧未製品，削器，台形様石器，基部加工石器，使用痕ある剥片，石核，礫器，敲石と考えられる資料が各1個体ある他，剥片24点を確認した。礫器や敲石の存在は平成8年度報告の第Ⅱ文化層の石器との類似を指摘できる。また，石斧未製品は頁岩製であるが，他は砂岩を素材としている点が注意される。

砂岩製石器に見られる剥離面の解釈にはしばしば困難が伴う。石器の素材にはさまざまなアクシデンタルな礫片を石器素材に利用している可能性も考えられるが，本報告書では，調整加工まで含めて意図的な剥片剥離と解釈する方が妥当と考えられる資料を積極的に評価し，報告した。文化層は異なるが，横峯C遺跡平成8年度報告の第Ⅱ文化層において砂岩の接合例（第11図⑤・⑥）がすでに指摘されており（坂口・堂込2000），砂岩であっても平坦な原礫面を打面とした剥片剥離が行われ得ることが示唆されている。少なくとも石器に砂岩を用いる可能性があることは十分認識できるところであり，さらには素材剥片を製作している可能性も指摘できる。

2.Ⅱ文化層

Ⅱ文化層は上位のAT火山灰層，下位の種Ⅳ火山灰層に挟まれた文化層で，それらの火山灰層によって他の文化層と区別できる。2基の礫群と敲石1点，剥片4点が検出された。

8号礫群は，礫群と礫群周辺の赤化礫が接合したことにより，当時の生活面が推定可能となり，同時に掘り込みの深さも約10㎝であることがわかった。8号礫群では砂岩Aが重量比で75％を占める。

8号礫群と9号礫群の礫は，検出時に出土レベルに差があったため，文化層が異なると判断していた。しかし，両者が互いに接合したため，共にⅡ文化層の礫群であることが分かった（第32図）。

接合によって復元された礫は，扁平な礫の一部が欠けたものばかりで，完全にもとの形状に復元できるものがない。接合後の礫の大きさは最大のもので24㎝，平均的には10㎝～15㎝に復元されるものが多い（第4表，図版6）。このことから礫を採集地から遺跡内に搬入する際，この大きさを目安に粗割した後に搬入した可能性が考えられる。さらに9号礫群の礫は，最大で18㎝，平均的には7～10㎝程度のものが多いことから，搬入した礫はさらに目的の大きさまで破砕し，9号礫群に使用した事が想定される。

一方，8号礫群には，熱によるはじけが原因と思われる比較的小型の資料と，あらかじめ適当な大きさに破砕したとみられる資料の両者が確認される。また，断面が受熱している礫と断面が受熱していない礫の両方が確認されることから，断面が受熱している礫は，複数回使用されたか，或い

はあらかじめ破砕が行われていたとみられる。

なお，横峯C遺跡の礫群に使用される砂岩Aおよび砂岩Dに類似する礫は基本的には亜角礫で，横峯遺跡周辺の谷部で露出するK-Tz下位にみられる礫層等で観察できる。一方，中種子町立切遺跡で礫群や礫塊石器の素材となった砂岩は，丸みを帯びており，立切遺跡周辺の小河川で採取可能である。このことから，両遺跡の礫及び礫塊石器の素材は，採取地点が異なるが，基本的に在地の礫を選択したと考えられる。

9号礫群は掘り込みを持つ礫群である。8号礫群と接合関係が見られ，8号礫群は礫群外の受熱礫と接合関係が見られたことから，当時の生活面が復元できた。発掘調査では，9号礫群の掘り込みの開始面を確認できなかったものの，礫が検出している現存の深さがすでに約15cmあり，当時の生活面を復旧できたことによって，掘り込みの深さを30cm弱と推定した。

9号礫群の土坑を充填していた埋土からは火を使用した痕跡が認められていない。それにも関わらず9号礫群の構成礫は受熱していることから，土坑外で熱を受けた礫が再利用されたとみられる。利用された礫のうち，本遺構の外周部に配置された礫は，扁平な礫が選択されていることも注目される。こうした遺構は，AT下位での類例がほとんどない。例えば，火の使用の痕跡のない鹿児島県枕崎市二本木遺跡（弥永・堂込1995）のＡＴ下位のX層から検出された土坑1を引用し，比較してみる。この土坑1は，幅75cm，深さ10cmを測り，扁平の礫が下面および上面に敷き詰められ，間を土が充填するタイプのもので，礫は堆積岩で一部は一枚が割れたように立っており，礫は受熱しておらず，マンガンが付着している部分もあったらしい。このような状況は，本遺跡の8・9号礫群とは様相が異なる。

一方，横峯C遺跡のこれまでの調査は，保存を前提とした調査であったため，基本的に検出された遺構はそのまま埋め戻されている。Ⅱ文化層で検出された礫群についても，礫の取り上げや，遺構の半さい等が行われていないものが多い。しかし，堂込氏によってⅠ・Ⅱ文化層出土礫群の平面プランの分類がなされており，「掘り込みを持ち集中するもの（1・2号礫群），環状となっており周辺にばらけた礫が散在するもの（3号礫群），散在するもの（4・5号礫群）」に分類されている（堂込2000）。今回検出された9号礫群は，掘り込みを有する点で1・2号礫群と共通するように見えるが，1・2号礫群の掘り込みが明瞭で，埋土から多数の炭化物を検出しているという点で異なっている。1・2号礫群に比して9号礫群はプランが明瞭でなく，掘り込み内に炭化物を含まず，埋土に火を使った痕跡がない。さらに礫群の規模を比べても，1・2号礫群は長径80cm以上あるのに対し，9号礫群は長径30cmで，大きく異なっている。また，9号礫群は8号礫群とセット関係が見られるという点が非常に特徴的である。「横峯遺跡」のより下層に9号礫群に類似する礫群が保存されている可能性もあるが，現状では，今回の9号礫群の検出は，類例を見ない重要な発見だったといえる。

本文化層は興味深い礫群が特筆されるが，遺物としては剥片4点，敲石1点を確認した。剥片については砂岩を素材とする観察困難な資料であるが，Ⅰ文化層と同様の観点から抽出可能であった。敲石も含めて，平成8～10年度調査の出土遺物（第11・12図②～⑫）に比して，資料数は少ないものの，類似した石器群を確認することができたといえる。

3. 遺跡の評価と今後の課題

以上，各文化層の調査成果を述べた。横峯C遺跡のⅠ文化層とⅡ文化層は，炭化物の放射性炭素年代測定値（種Ⅳテフラ下位では1トレンチ1号礫群内炭化物2点の較正年代が35656 ± 827と33760 ± 698であり，種Ⅳテフラ直上の1トレンチの炭化物と5トレンチ礫群内炭化物各1点の較正年代が34703 ± 572と33310 ± 751である）が非常に近接していることから見て，時間的に近い時期の所産と想定している。よって，以下ではⅠ文化層とⅡ文化層の両方を含めた本遺跡の評価と今後の課題を述べる。

礫群の構造の多様性は先回の報告書で既に指摘されていることであり，用途が単純に一様ではない（坂口・堂込2000）という可能性を今回の調査でも追認することができた。さらに，石器についても，これまでは読み取りが困難であった砂岩製の石器を抽出し，それらを付編2・3において説明することを試みた。付編のような想定から逆に砂岩製石器の存在という解釈が容認されるものであれば，本遺跡は，礫群も石器もその内容が多様であることを示すことができた遺跡と評価できる。

砂岩製石器の問題は今後の研究に委ねる部分も多いが，少なくとも横峯C遺跡では，在地の石材を利用した石材運用が行われていたことが確認できる。今回出土した石斧未製品（第19図1，Ⅰ文化層）や重要遺跡確認調査で出土した礫器（第11図③，Ⅱ文化層）は頁岩を素材としていた。石斧未製品は熱変成を受けている可能性があるが，少なくとも礫器に用いられた頁岩は，直線距離で2km離れた島間の海岸の露頭で類似する頁岩を採取できる。今回の調査では，頁岩は，石斧未製品1点の他は，自然礫で1点確認されただけであるが，今後の調査で，頁岩を豊富に採取できる現在の西海岸付近における同時期の遺跡が発見されれば，そこには，頁岩製石器の製作の場や頁岩製石器を使用した，横峯C遺跡とは少し様相の異なるシステムが見られる可能性も想定される。

また，周辺の遺跡との比較をすると，立切遺跡では，XⅢa層から敲打器が，そして不定形剥片はXⅢb層から出土しているという（田平・野平2003）。それに対し，横峯C遺跡のⅠ文化層は，今回の調査においては，XⅢa層を包含層とし，XⅢb層からは遺物の出土は確認されていない。先述したように立切遺跡におけるXⅢa層とXⅢb層と横峯C遺跡におけるXⅢa層，XⅢb層は対応する可能性が高く，種子島における当該期を考えるうえで，今後，両層を区分した発掘調査事例を積み重ねることに留意していく必要がある。また，炭化物集中箇所など，今後も類似する遺構が検出されることが予想されるが，その際には，肉眼・手触りによる土色・土質の変化によってのみ遺構の認定・評価を行うだけでなく，科学的な方法を取り入れることで再現性を担保した調査を積み重ね，評価がなされることが望まれる。

さらに視点を広げて本遺跡を評価してみたい。これまで，種子島を含む薩南諸島全体の後期旧石器時代に対するイメージとして，本州島あるいは九州島とは異なる性格を有すると考えられてきた。たしかに，多数の遺構，多量の礫塊石器，大型の石器，小型石器の不在，剥片剥離行動の貧弱さなどが差異として挙げられる。このように，本遺跡を含む九州南部の遺跡では，焼土・炭化物・礫群などの生活痕跡が特に注目されており，礫塊石器が卓越するという点で本州島内の遺跡とは若干様相を異にするという点があることは見逃してはならない（堂込1998・2000）。九州南部にまで続く薩南諸島の様相については，後牟田遺跡における検討例（中村・藤本・佐藤2002）があるように，

生態条件に特徴を持つ本地域の一地域性を示しているととらえておくことも現状では重要であろう。

研究初期の段階では定型的な「剥片石器の欠如」という理解は妥当なもので，それゆえ「不定形剥片石器群（加藤 1996）」という概念を付与したものと評価できる。近年に至って横峯C遺跡や立切遺跡の検出によって薩南諸島の旧石器時代研究は大きな転換を迎えることとなったが，依然としてナイフ形石器などの本州島や九州島で典型的な後期旧石器の産物と考えられている小型剥片石器に関する出土例がない現状にはかわりがない。そのため，漠然と旧石器時代全期を通じた文化圏を想定して，横峯C遺跡や立切遺跡が発見されて以降も「不定形剥片石器群」を基本的に踏襲したまま，「敲磨器文化圏（岡村 1998）」や「南方型旧石器文化（小田 2003・2000・1999・1997）」といった理解も行われている。しかし，その要素とされる，小田氏が言うところの「磨製石器・台形石器・楔形石器（小田 1997）」に形態上類似する石器は，後期旧石器時代の前半期という時間枠に限ってみても九州島以北さらには汎列島的に見られる石器で，「南方型旧石器文化」の特異な産物と読みかえることには当時から無理があったといえる。陸橋の問題や中国南部や東南アジアの石器の様相が不明瞭である現在，地理的に九州島にもっとも近く層位的にも非常に恵まれた種子島において，本州でナイフ形石器が盛行する時期の遺跡や遺物が確認できない状況をどのように解釈するかという試みは，本地域の旧石器時代遺跡の検出に引き続き注目することと同時に，必要不可欠なものである。しかし，本地域を考える枠組みが，「定型石器」の欠如を筆頭とする単なる石器組成の比率差として「敲打器文化圏」や「南方型旧石器文化」といった「文化圏」が設定可能なほど単純なものとして説明できる状況ではないだろう。それらの「文化圏」の境界線を越えた日本列島全体との関連性を指摘する見解も既に出されており（宮田 1998，小畑・宮田 1999，堂込 2000），さらに本遺跡の新報告資料からそのことを具体的に示すならば，石斧や台形様石器や鋸歯縁石器などがあり，日本列島の後期旧石器時代初頭というより大きな枠組みで理解可能である。しかし，本遺跡は，礫群や砂岩製の剥片石器に見られるように類例の少ない特殊性も持ち合わせており，このような複雑で多様な実態を解釈するためには，植物質資源利用など本州以北ではあまり注意されていない生業システムの評価（藤本 2000）が重要である。旧石器時代に植物利用を推定する根拠は，今のところ礫塊石器という石器の存在，すなわち石器形態自体の検討（黒坪 1983・1984 など）という考古学的方法を主としている。それ以上の議論は考古学的に難しいため，学際的・総合的な研究の必要性（橘 1999）はなお高いといえる。もちろん，多様な実態を知るために，今後とも発掘事例が増えることを期待したい地域であることは改めて書くまでもないところであろう。また，最近調査事例が増加したとはいえ，その中で本遺跡の報告が果たす役割は大きいと確信している。

今回の調査が地域住民をはじめ，鹿児島県農政部や町長のご理解とご協力に助けられ，学術的にも意味のある多くの成果が提示できた。このような本遺跡の遺構や石器群について，どのような説明や解釈が可能であるか，多角的な研究の素材となっていくことを願い，同時に，研究者諸氏による建設的な批評・批判を願いたい。最後に，発掘調査や整理作業に協力していただいた方々，ご助言をいただいた方々に心より謝意を表するとともに，さらなる埋蔵文化財行政への理解を請う次第である。

（石堂・中村）

《引用文献》

岡村道雄 1998『歴史発掘①　石器の盛衰』講談社

小田静夫 1997「南島旧石器時代の諸問題」『公開学習資料　南島の人々と文化の起源』：42-78

小田静夫 2003『日本の旧石器文化』同成社

加藤晋平 1996「南西諸島における土器以前の石器文化」『月刊地球』206

黒坪一樹 1983「日本列島先土器時代における敲石の研究（上）－植物食利用に関する一試論－」『古代文化』35：11-31

黒坪一樹 1984「日本列島先土器時代における敲石の研究（下）－植物食利用に関する一試論－」『古代文化』36：17-33

小田静夫 1999「琉球列島旧石器文化の枠組みについて」『人類史研究』11：29-46

小田静夫 2000『黒潮圏の考古学』第一書房

小畑弘己・宮田栄二 1999「地域研究 50 年の成果と展望」『旧石器考古学』58

坂口浩一・堂込秀人編 2000『横峯 C 遺跡』南種子町教育委員会

橘昌信・佐藤宏之・山田哲 2002『後牟田遺跡』後牟田遺跡調査団

田平祐一郎 2002a『立切遺跡－重要遺跡確認調査に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書－』中種子町教育委員会

田平祐一郎･野平裕樹 2003『立切遺跡－県営畑地帯農道網整備事業（坂井地区）に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書』中種子町教育委員会

堂込秀人 1998「種子島の旧石器文化」『日本考古学協会 1998 年度大会研究発表要旨』日本考古学協会

堂込秀人 2000「鹿児島県における後期旧石器文化の成立」『九州旧石器文化交流会予稿集』23-28

藤本　強 2000「植物利用の再評価－世界的枠組みの再構築を見据えて－」『古代文化』52：1-15

松藤和人 2004「日本列島における後期旧石器文化の始源」『日本列島における後期旧石器文化の始源に関する基礎的研究』文部科学省平成 12 ～ 15 年度科学研究費補助金基盤研究(C)(2)研究成果報告書 12610421

弥永久志・堂込秀人　1995『二本木遺跡』枕崎市教育委員会

宮田栄二 1998「南九州の旧石器文化」『日本考古学協会 1998 年度大会研究発表要旨』日本考古学協会

第Ⅵ章　付　　編

付編１　横峯Ｃ遺跡から出土した炭化材の樹種

パリノ・サーヴェイ株式会社

はじめに

横峯Ｃ遺跡の基本層序は、Ⅰ層～XV層に区分され、５枚の文化層（Ⅳ層、Ⅵ層、Ⅸ層、XI層、XⅢ層）が確認されている。５枚の文化層のうち、上位２層は縄文時代の遺物包含層であり、Ⅳ層が縄文時代早期、Ⅵ層が縄文時代草創期とされる。下位の３層は旧石器時代の遺物包含層であり、Ⅸ層がⅢ文化層、XI層がⅡ文化層、XⅢ層がⅠ文化層となる。このうち、Ⅰ文化層は、30000年前に降下したとされる種Ⅳ火山灰と38000年前に降下したとされる種Ⅲ火山灰に挟まれている。今回の調査区では、受熱礫や炭化物集中箇所等が検出されている。

今回の分析調査では、Ⅰ文化層から出土した炭化材の樹種同定を行い、古植生に関する資料を得る。

１．試料

試料は、Ⅰ文化層（XⅢ層）から出土した炭化材５点（試料番号１～５）である。試料番号４・５には複数の炭化材片が見られ、それぞれ状態の良い炭化材各４点を選択した。その他の試料は、各１点であったが、試料番号１・２は保存状態が悪い。

２．方法

木口（横断面）・柾目（放射断面）・板目（接線断面）の３断面の割断面を作製し、実体顕微鏡および走査型電子顕微鏡を用いて木材組織の特徴を観察し、種類を同定する。

３．結果

樹種同定結果を表１に示す。試料番号１と２は、保存状態が悪く、木材組織がほとんど観察できなかったため、不明とした。

番号	地区	層　　位	点数	樹　　種
1	C9	XⅢ層（Ⅰ文化層）	1	不明（1）
2	C9	XⅢ層（Ⅰ文化層）	1	不明（1）
3	E9	XⅢ層（Ⅰ文化層）	1	イスノキ（1）
4	E9	XⅢ層（炭化物集中箇所６）	4	コナラ属アカガシ亜属（4）
5	D9	XⅢ層（炭化物集中箇所５）	4	クスノキ科（4）

その他の試料は、広葉樹３種類（コナラ属アカガシ亜属・クスノキ科・イスノキ）に同定された。各種類の主な解剖学的特徴を以下に記す。

・コナラ属アカガシ亜属（*Quercus subgen. Cyclobalanopsis*）　ブナ科

放射孔材で、管壁厚は中庸～厚く、横断面では楕円形、単独で放射方向に配列する。道管は単穿孔を有し、壁孔は交互状に配列する。放射組織は同性、単列、１～15細胞高のものと複合放射組織とがある。

・クスノキ科（Lauraceae）

散孔材で管壁は中庸～やや厚く、横断面では楕円形、単独または２～３個が放射方向に複合して

散在する。道管の穿孔板は単穿孔だと思われるが、保存状態が悪い。放射組織は異性、1～3細胞幅、1～20細胞高。柔細胞には油細胞が認められる。

以上の特徴から、クスノキ科の中でもタブノキ属の可能性がある。しかし、試料の保存状態が悪いことや、クスノキ科がいずれもよく似た組織を有していること等から、種類の同定には至らなかった。

・イスノキ（*Distylium racemosum* Sieb. et Zucc.）　　マンサク科イスノキ属

散孔材で、道管は横断面で多角形、ほとんど単独で散在する。道管の分布密度は比較的高い。道管は階段穿孔を有する。放射組織は異性Ⅱ型、1～3細胞幅、1～20細胞高。柔組織は、独立帯状または短接線状で、放射方向にほぼ等間隔に配列する。

4．考察

今回調査対象した炭化材には、3種類が認められた。いずれも炭化していることから、燃料材等として利用され、炭化した可能性がある。複数の炭化材が入っていた試料は、それぞれ同一樹種で構成されている。このことから、特定の樹種が利用された可能性があるが、いずれも小片であることから同一固体に由来する可能性もある。

確認された種類のうち、アカガシ亜属とイスノキは、暖温帯常緑広葉樹林（照葉樹林）の構成種である。クスノキ科は、タブノキ属の可能性があるが、タブノキ属は照葉樹林の構成種であり、その他のクスノキ科にも照葉樹林構成種が多く含まれる。

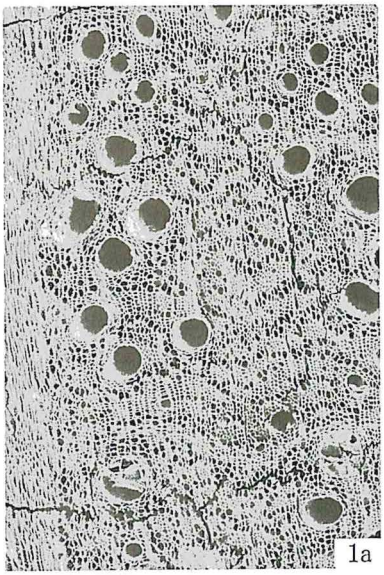
本地域の古植生については、杉山・早田（1997）や杉山（2001）により、姶良Tn火山灰の下層でシイノキ属やイスノキ属等の植物珪酸体が認められており、最終氷期を通して暖温帯常緑広葉樹林が分布していた可能性が指摘されている。また、本遺跡では、AT下10cmおよび種Ⅳ火山灰中の炭化材について樹種同定が行われている（未公表資料）。その結果では、イスノキの可能性があるものの、種類の同定には至っていない。今回の結果は、杉山・早田（1997）や杉山（2001）の成果と調和的であり、Ⅰ文化層堆積当時、本遺跡周辺には常緑広葉樹を主とした植生が見られたことが推定される。

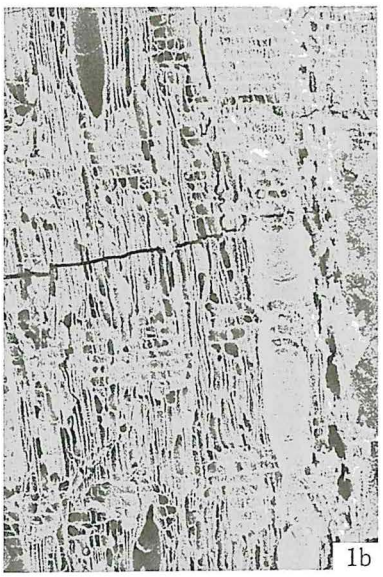
引用文献

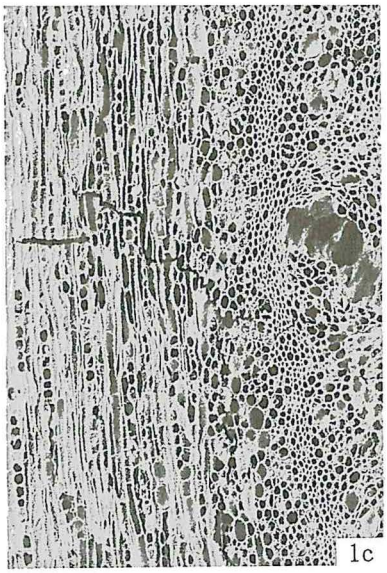
杉山真二・早田　勉（1997）南九州の植生と古環境　－植物珪酸体分析による検討－．月刊地球, 19(4), p.252-257, 海洋出版株式会社.

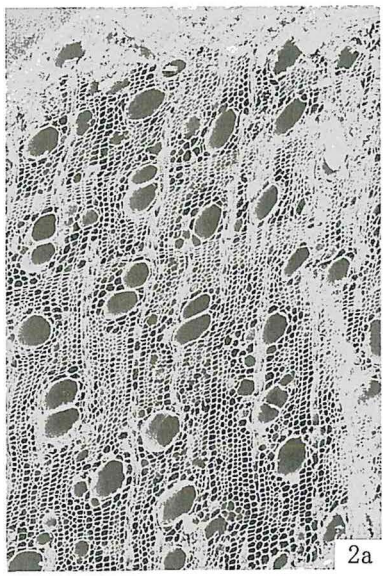
杉山真二（2001）テフラと植物珪酸体分析．月刊地球，23（9），p.645-650，海洋出版株式会社.

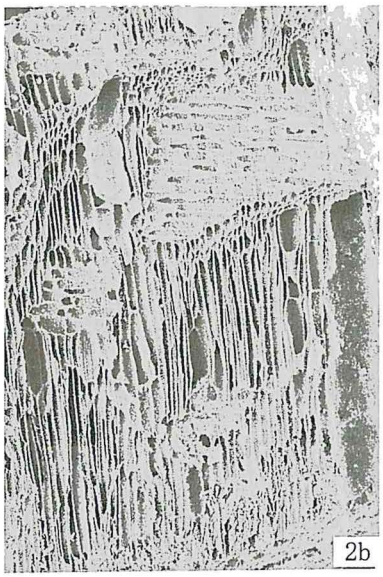
炭化材

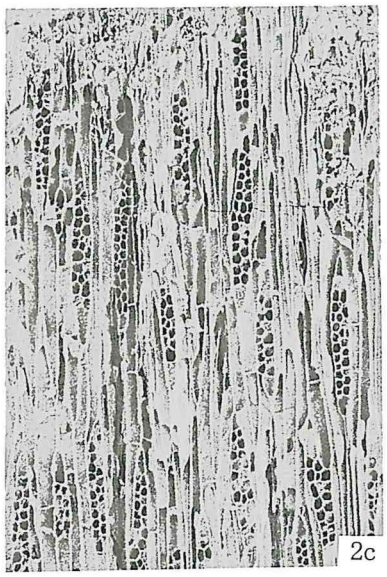


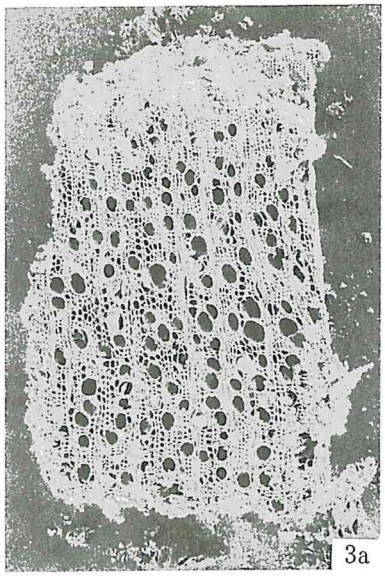












1. コナラ属アカガシ亜属（試料番号4）
2. クスノキ科（試料番号5）
3. イスノキ（試料番号3）
   a：木口，b：柾目，c：板目

200 μm:a
200 μm:b,c

付編２　横峯C遺跡第2次調査における砂岩製石器

中村真理

はじめに

本書で報告した横峯Ｃ遺跡Ⅰ文化層とⅡ文化層について検討する際に、隣接の横峯Ｃ遺跡平成８～10年度調査区のⅠ文化層・Ⅱ文化層出土資料（坂口・堂込2000）についても実見した。その結果、平成８年度に行われた横峯Ｃ遺跡２次調査出土の資料中から、砂岩製石器の接合資料と評価できる資料を抽出することができた。この資料は報告書には掲載されなかったものの、整理段階ですでに接合関係を確認していた資料である。未報告資料ながら、今後の解釈にとって非常に重要な資料であると判断されたため、ここで紹介する。

1. 出土位置（第7図）

E7区の南東隅、１号礫群の約2m西から出土した。１号礫群は種Ⅳ火山灰層下位のⅠ文化層から検出された遺構であり、その周囲は礫群の検出面で発掘を停止し、遺構を保存している。よって、１号礫群を避けて種Ⅳ火山灰層より下位を掘った部分は必然的に狭い面積となっているため、未発掘区に類似する資料が含まれている可能性も指摘できる。しかしながら、既発掘区の中における礫群以外の資料の分布状況は散漫でブロックをなしてはいないため、本資料の遺跡内での接合関係は完結しているものと捉えても解釈上大きな飛躍はないと考えている。

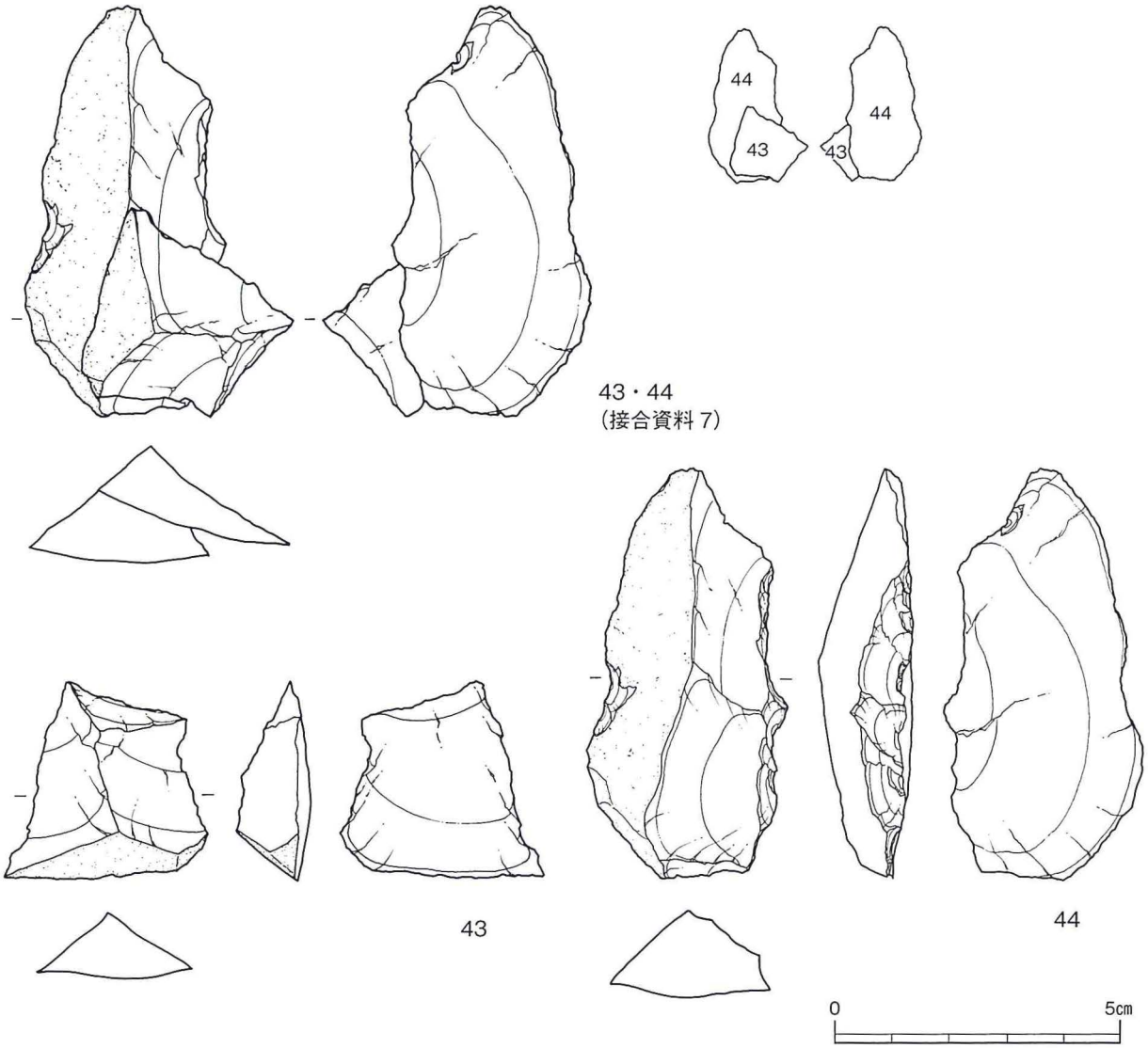
2. 出土石器の特徴（第34図）

43・44（接合資料７）は剥片と鋸歯縁石器の接合資料である。背面構成を見ると、おそらく同一の打面から連続的に幅広の剥片が剥離され、それぞれの剥片の末端部に原礫面が残されているものと考えられる。43は打点部分が剥片剥離時に同時割れを起こして剥落しているようである。その後剥離された大ぶりの剥片を素材として打点部側に鋸歯状の加工を施し、44の鋸歯縁石器が製作されている。鋸歯状の加工は、断面からも分かるように比較的急斜度となっている。さらにその加工は石器の長辺に平行して直線的に配されていることから、削器的な機能を有していた石器である可能性も高い。石材は原礫面が赤色で、内部が均質で濃い青灰色を呈した特徴的な砂岩であるが、同一母岩と考えられる石材は、発掘資料中から他に見出せなかった。

まとめ

出土した位置から考えると、付近に砂岩の礫群が見られることから、一見すると偶発的な礫片とも考え得る。しかしながら、種Ⅳ火山灰層下位のⅠ文化層から出土した砂岩資料の接合作業と剥離面の解釈を通して、砂岩製石器の可能性に関する具体的根拠を提示することができた。

《引用文献》
坂口浩一・堂込秀人編2000『横峯Ｃ遺跡』南種子町教育委員会



第 34 図　平成 8 年度出土 I 文化層石器

付編３　横峯C遺跡における砂岩製石器の抽出とその解釈

中村真理

はじめに

昨今の日本の旧石器時代研究では、約３万年前前後の石器群、すなわち日本列島の後期旧石器時代のはじまりが大変注目されている。2003年に設立された日本旧石器学会の第１回シンポジウムのテーマが「後期旧石器時代のはじまりを探る（日本旧石器学会設立準備委員会2003）」であったことは記憶に新しいところである。このような研究動向の中で、横峯Ｃ遺跡（坂口・堂込2000）は九州地域の事例として登場してくる重要な遺跡であり、取り上げられている刊行物の多さを見ても当遺跡への関心の高さがうかがえる（例えば松藤2004、萩原2004、橘2004・2002・2000、堂込2000、木崎2002、小田2000・1999など）。さらに今回の調査によって、礫群などこれまでの調査成果の延長上で考えられる資料が追加されたが、新たに砂岩製石器も抽出できた。そこで本編では、横峯Ｃ遺跡出土資料の中から砂岩製石器をめぐる問題をとりあげ、種子島内、さらには九州南部地域にも散見される砂岩製石器の解釈を試みるものである。

１．横峯C遺跡第Ｉ文化層の位置

ここではまず火山灰層序学的に横峯Ｃ遺跡Ｉ文化層の層位的位置を概観する。日本列島全般においては、後期旧石器時代、その中でも特に前半期以前の遺物の出土層位を見る際、広域テフラであるAT（新井・町田1976）が有効な指標に用いられる。さらに本遺跡では、ATに加えて種Ⅲ・種Ⅳ火山灰（成尾1993）が一次堆積物の状態で確認されており、それらのテフラを介在して層位的に遺構や遺物が検出された（倉本・堂込1993、坂口・堂込2000）。このような良好なテフラの堆積状況は種子島の各地点で確認されており（奥野・小林1994）、それに伴って遺構や遺物を層位的に検出可能な状況は種子島全域に広く及ぶものと推察される。実際、横峯Ｃ遺跡の発掘の後に調査された中種子町立切遺跡（田平2002a、田平・野平2003）等では、種Ⅲ・種Ⅳ・ATの一次堆積層によって、遺構や遺物の出土層位が明確である。

特に後期旧石器時代初頭の遺物や遺構の年代に深く関わってくる種Ⅳの年代については、本遺跡内での種Ⅳ火山灰層の上下で採取した炭化物のAMS測定年代結果（倉本・堂込1993、坂口・堂込2000）の間におさまるものと考えておきたい。すなわち、種Ⅳ火山灰層下位については１トレンチ１号礫群内炭化物２点の較正年代が35656 ± 827calBPと33760 ± 698calBPであり、種Ⅳ火山灰層直上の１トレンチの炭化物と５トレンチ礫群内炭化物各１点の較正年代が34703 ± 572calBPと33310 ± 751calBPであった。これらの年代値は、種Ⅳの年代を層位関係によって「35Ka（奥野・福島・小林2000）」と算出した年代とも調和的である。よってＩ文化層の年代は較正年代で約３万5000年前頃と考えられる。

２．種子島の諸遺跡の様相

ここでは横峯Ｃ遺跡Ｉ文化層と層位的に類似した条件下で検出された種子島の遺跡を確認する。これまでに確認された種Ⅳ火山灰層下位相当の遺跡は、横峯Ｃ遺跡Ｉ文化層（倉本・堂込1993、坂口・堂込2000）、立切遺跡Ⅲ層（堂込1998、田平2002a、田平・野平2003）、清水・今平遺跡Ⅻ層（田

平 2002b）がある。なお、清水・今平遺跡については、種Ⅳの堆積が良好でなかったことを根拠に、調査者は立切遺跡と全く同時期であるかどうかについて断言することを避けている。しかし、筆者は種Ⅳ火山灰下位という理解をして大過ないものと考えているため、類例に含める。また、種Ⅳ火山灰層直上とされる横峯Ｃ遺跡Ⅱ文化層（坂口・堂込 2000）は、報告者が既に指摘しているように、上であげたⅠ文化層とⅡ文化層の礫群内炭化物の年代値が非常に近似している。このことから、横峯Ｃ遺跡Ⅰ文化層とⅡ文化層には時間差が存在するものの、同一段階の石器群と見ることができるため、やはり類例に含める。

これらの遺跡の最大の特徴は、総じて焼土・炭化物・礫群などの生活痕跡と石斧や礫塊石器などの大型石器とがセット関係で出土したことである。特に礫塊石器が卓越するという点は、本州島内の遺跡とは若干様相を異にしているということがすでに指摘されてきている（堂込 1998、橘 1999 など）。特に立切遺跡や清水・今平遺跡では磨石や台石が非常に多い。その一方では、剥片石器の少なさが注意されていた。実際、日本列島の後期旧石器時代遺跡で広く確認されているような剥片剥離行動を示す接合資料がほとんど見られず、剥片素材の石器も数が限られている。しかし、例えば、立切遺跡では頁岩の接合資料が得られており（田平・野平 2002）、剥片石器の存在を当地域の解釈に取り入れることが期待できるようになってきた。

一方で、立切遺跡で検出されている石斧は、本州島の資料と類似しているものと、そうでないものの両者が見られる。後期旧石器時代初頭の石斧は現状で北海道を除く日本列島全域で確認されている石器のひとつであるが、扁平礫あるいは大型の剥片を素材とし、周縁からの調整加工によって楕円形や両側縁が平行する形状を作り出し、刃部のみに研磨痕が観察されるものが多い。しかし、例えば、立切遺跡の石斧１点（田平・野平 2002）は、ほぼ全面を磨いた個体で、えぐり状の基部を作り出しており、その調整加工や研磨の度合は極めて入念である。本州島では、基部を持つ石斧と全面を研磨する石斧は見られるが、その両方の要素を備えている石斧はほとんどない。一方で、立切遺跡のもう１点の石斧（堂込 1998）は、平面形状が楕円形で、刃部に明瞭な研磨痕が観察され、まさに本州島で見られる後期旧石器時代初頭の石斧と同様の典型的な形状をしている。このように、石斧に限ってみても、本州島と比較すると、異質性と等質性とをともに指摘できる。

しかし、種子島では、ナイフ形石器などの本州島や九州島で典型的に見られる後期旧石器時代の狩猟具と考えられている小型剥片石器に関する情報がやはり決定的に少ないようである。そこで本報告書では、剥片石器の有無に関して検討し、砂岩製石器の抽出に至った。

３．横峯C遺跡における砂岩製石器の解釈

横峯Ｃ遺跡でも、これまでの調査において敲石、磨石、台石などの礫塊石器が多いということが報告されてきた（坂口・堂込 2000）。それらの礫塊石器の石材には砂岩が用いられている。本年度報告分も、出土資料のほぼ全てが砂岩であり、受熱のためか赤色に変色しているものもある。しかし、砂岩にも肉眼で判別できる程度の差異があり、分類を行うことができる（第Ⅴ章第１節）。そして、特に砂岩Ｄの砕片は非常に狭い範囲に密集して出土していることが分かる（第 17 図：なお、凡例で石器として示してあるものも１・２の石斧未成品以外全て砂岩Ｄである）。分布図のみを見ればブロック状の石器集中域のように出土している。

砂岩は種子島で最も多く見られる石材の一つである。基盤となる礫層に多く含まれており（旭1987・種子島地質同好会1999）、河床や海岸で容易に観察できる。しかし遺跡に持ち込まれている場合は、礫や礫塊石器として利用されるのが一般的で、剥片石器の素材としてはこれまで注目されてこなかった。つまり、砂岩は後期旧石器時代の剥片石器に用いられる他の石材に比して強度や鋭利性など剥片石器に求められたであろう物理的要件を相対的に十分に満たさない可能性が予測される。しかしこの前提によって、研究者自身の解釈が制限されている可能性も考えられる。日本列島に産する砂岩は強度や弾性率だけを比較しても様々であり（例えば星野他2001、山口・西松1991など）、岩石力学的に剥片石器に不適切であるという前提にそれほど固執する必要がないかもしれない。考古学的に重要なことは、遺跡形成過程で砂岩がどのように選択されているのかを解釈することである。現状での考古学的な認識では、砂岩が剥片石器石材として不向きという前提があったとしても、遺跡から砂岩を素材とした剥片石器が出土する事例があるならば、それを検討することが重要であろう。よって、ここでは砂岩が石材として利用されたという立場から砂岩製石器の解釈を試行する。ただし、この試行が可能となるのは、確実に遺跡であることが認められている場合でなければならない。つまり、横峯C遺跡の場合では、時間巾がある程度決められている層位的な発掘事例であって、礫群などの遺構を形成する行動の痕跡を残す遺跡全体が確認できていることが前提にあることが重要であろう。本遺跡のような前提がない場合、このような解釈は難しいものと自覚している。しかし、だからこそ横峯C遺跡で砂岩の問題を検討する必要があるといえる。

まず、石材自身を観察する。石器に用いられている砂岩を砂岩Dとしているが、原礫面が明褐色で内部が青灰色を呈する石英脈が入らないもので、赤色化していないという特徴がある。その点からも、部分的な赤色化が観察される礫群構成礫とは異なっている。

次に、剥離面の観察を行う。旧石器考古学の主たる研究対象である剥片石器を観察する際、黒曜石など良質の石材である場合は、バルブやリングの有無を容易に見出し、打撃の方向などの諸情報を得る工程において、人為的な剥離の痕跡という判断に疑問は生じないことが多い。そのことと比較すると、本遺跡出土の砂岩Dは、石材を構成している粒子によって表面に細かな凹凸があるため、リングやフィッシャーなとの観察が難しい。しかし、打面や打点と考えられる部分があり、バルブと評価される部位を特定できるものもあり、その想定をもとに接合を行うことができた。そこで打面や打点の認識が妥当であったことが確認されたので、接合しない資料についても打面や打点を想定できるものについてはすべて剥片として図化した（第26・33図）。打面や打点が観察できない資料については現状でそれ以上の検討や解釈をすることができなかったが、類似石材による製作実験を行ったときには、砂岩を剥離する際に打点が剥落したり潰れたりする現象も起こりうることを確認できた。その結果、横峯C遺跡Ⅰ文化層のブロック状の集中域を形成している資料は、砂岩製石器とそれらの製作に関わる剥片剥離の所産と考えた。そして少なくとも剥片石器が不在なのではなく、観察が難しい状況と言うことができるようになった。

次に論を進め、石器形態の問題、すなわち本報告でおこなった器種分類について述べたい。

まず、鋸歯縁削器は九州島の後期旧石器時代初頭前後の遺跡、たとえば石の本遺跡（池田編1999）や後牟田遺跡（橘・佐藤・山田編2002）等でも多く出土した石器である。厚みのある中型の剥片を素材としることが多く、その特徴的な鋸歯状の部位が繊維質を断ち切る機能を有している

と考えられる。さらに技術的・機能的に細分類をし得る可能性もあるが、ここでは立ち入らずに進める。横峯C遺跡2次調査出土の資料（第34図44）は、接合状況から、鋸歯縁削器の範疇で考えるべき資料といえる。剥片を素材としているが、厚みのある器体に連続した剥離を施し、結果として鋸歯縁の縁辺を得ている。また、本年度報告の資料では、第19図3が側縁部の加工が大ぶりで連続的であるため、鋸歯縁削器の可能性も考えたが、九州島の鋸歯縁削器に比して厚みが少ないため、鋸歯縁削器とは一線を画して削器と報告した。この石器の形状をより機能的に解釈すると、側縁間に挟まれる先行一次剥離面と主剥離面からなる鋭利な縁辺によって撥形の形態となっているので、後期旧石器時代初頭にみられるへら形石器（佐藤1992）と同等の機能を想定することもできる。

基部加工石器は、鋸歯縁削器と同様に石の本遺跡（池田編1999）や後牟田遺跡（橘・佐藤・山田編2002）等で特徴的に検出されてきた石器である。これらの資料に比して、第22図10を基部加工石器と呼称するならば、「基部」という重要な観点を逸脱していることが問題となろう。しかし、素材剥片の先端部に限らず、結果的に尖った端部に対する「基部」に調整加工を施していると解釈したのであり、基部加工石器と同等の製作志向をもつものと考えた。基部加工石器は素材の用い方と加工部位を重視した名称である。この客観的に見える分類名称が最も有効に見えるものの、素材形状と加工部位による名称は、製作技術面に関心が払われる一方で、機能論に適用範囲をせばめる可能性もある。しかし、より良い代案が現在ないことと、基部加工石器のイメージがある程度できていることから、現段階では作業的に基部加工石器と呼称しておく。なお、本資料の素材となった大ぶりの縦長状の剥片については、意図的な剥片剥離の結果得られたものではない可能性もあるが、それが、石器に加工される素材に選択されていることが重要と考え、縦長状剥片の存在も想定したい。

第19図4は他のトゥールに比して小型の資料であるため、特に製作技術を読み取ることが難しいが、現状の形態の評価と、小形剥片石器中の具体的な狩猟具の名称として台形様石器と呼称し、大きな枠組みの概念でとり扱った。後牟田遺跡で設定された小型側縁基部加工石器・小型刃部加工石器（橘・佐藤・山田編2002）という名称は、台形様石器が含まれるシステムとは時間的・空間的に異なるシステムを想定したものに付与するべきものと考えられるため、本資料もそのような呼称で扱うべきかもしれない。しかし、本資料は小型であるため、より打点・打面・剥離面の観察が困難であり、加工部位を特定すること、さらにはそれが意図的な剥離面であったかを判断しがたい。その意味では素刃石器（安斎2000）という用語がふさわしい可能性も考えられ、さらには端部整形石器（田村2001）という名称が援用可能であるかもしれないが、ここでは作業的に台形様石器と呼ぶことにしたい。

以上のように、横峯C遺跡I文化層のブロック状の集中域を形成していた砂岩の資料は、後期旧石器時代初頭頃に位置づけられる他遺跡で抽出されてきた石器と類似する機能的意味を与えることが可能である。

4. 九州南部の砂岩製石器

横峯C遺跡I文化層での検討によって砂岩製石器が抽出可能であることを示した。さらに、後期旧石器時代初頭の砂岩製石器を近隣地域に探すと、宮崎県の資料に類例が見られた。それらを参

照しながら、地域適応という観点で砂岩製の石器についてさらに検討する。

宮崎県の最近の調査では、砂岩製の石器が少量ながら検出されている。まず年代的な枠組みを検討する。九州南部の後期旧石器時代初頭頃のテフラの年代観と、遺跡の層序関係を、東九州道の基本層序にあてはめると、下記のようになると考えられる。なお、(　) 内は新編火山灰アトラス（町田・新井 2003）によっている。

Ⅸ層・・・音明寺第 2 遺跡 I 文化層（宮崎県埋蔵文化財センター 2003)、東畦原第 3 遺跡 I 文化層（福松・横田・金丸 2004）の資料がある。

Ⅹ層・・・Kr-Aw（Kr-Aw の年代は高野原遺跡第 5 地点（日高・竹井・柳田 2004）で層位的に、A-Fm（31ka)、A-Ot（32.5ka）より下層に Kr-Aw が確認されているので、約 32500 年前以前と考えられる)。

Ⅺ層・・・音明寺第 2 遺跡 I 文化層下（宮崎県埋蔵文化財センター 2003）の資料がある。

Ⅻ層・・・Kr-Iw（40-45ka)。

ⅩⅢ層・・・音明寺第 2 遺跡 I 文化層下（宮崎県埋蔵文化財センター 2003）の資料がある。

また、高野原遺跡第 5 地点 I 文化層（A-Ot ～ Kr-Aw）は上記の東九州道基本層序のⅨ層相当と考えられ、さらに、横峯 C 遺跡 I 文化層や立切遺跡、清水今平遺跡もほぼ同時期と考えられる。なお、後牟田遺跡（橘・佐藤・山田編 2002）については、Ⅲ文化層を当該期に含めて考えることが妥当と思われ、また、Kr-Iw 前後とされるⅢ b・Ⅳ文化層は、東九州道基本層序Ⅺ層とⅩⅢ層の音明寺第 2 遺跡 I 文化層下に相当する可能性が高いと考えられる。

ここで確認したいことは、それぞれの石器群の詳細な先後関係ではなく、移行期あるいは後期旧石器時代の初頭と想定される時期の資料についてである。上に挙げた遺跡の石器は、当然ながら加工や使用に適したと考えられる流紋岩やホルンフェルスなどの緻密な石材を多く用いているが、一部で粗粒の砂岩も石器素材として使われている。砂岩の資料は、特にその製作工程において目的的な素材剥片生産が行われたとは言い難いものが多い。しかし、結果としての石器器種は、音明寺第 2 遺跡でヘラ形石器、切断剥片（宮崎県埋蔵文化財センター 2003)、後牟田遺跡で鋸歯縁削器、削器、使用痕剥片、(橘・佐藤・山田編 2002)、横峯 C 遺跡で削器、基部加工石器、台形様石器、使用痕剥片（本報告書）など、後期旧石器時代初頭の石器として一般的に見られるものである。また、音明寺第 2 遺跡 I 文化層の資料（報告書番号 267・269；宮崎県埋蔵文化財センター 2003）も礫器の中では中型で、鋸歯縁石器の範疇で考えることもできる。つまり、砂岩という石材は、敲石や磨石、あるいは大形の礫器としてだけでなく、中・小型の石器にも利用されているといえる。そして、計画的な石材消費というプロセスへの関心よりも、機能的な面への関心が強いと見ることができる。

石材としての砂岩の一般的特性を考えると、入手が容易な在地石材であること、加工が容易な軟質石材であることが考えられる。しかし、表面が粗い材質のものが多く、先にも述べたように耐久性に乏しいことが予想されるため、道具としての使用可能期間が短くなってしまうというリスクの派生も想定される石材である。このリスクに対する対処方法としては、壊れやすい石器には使用しないという方法、すなわち厚みや大きさのある石器として利用する方法が想定できる。この点に関しては、実際に日本列島の多くの遺跡では砂岩が礫器などの大きく厚みのある石器に用いられることからも追認されるであろう。また一方では、リスクの高い石材に依存し続けることなく、耐久性

の良い石材の開発を進展させていくという対処を想定することができる。加工しやすく壊れやすい素材よりも、加工しやすく壊れにくい石材を求めるという説明である。この点に関しては、実際に日本列島の多くの遺跡では、狩猟具と考えられる石器の石材には黒曜石や安山岩などが多用されており、砂岩の狩猟具がほとんど確認されていないことから追認できる。このように、耐久性に関してリスクがあると判断される場合は、やはり砂岩は剥片石器石材として不適当と評価できる。

しかし、砂岩という石材が石器素材としてリスクとならない場合も考えられる。まず考えられることは、石材環境の問題である。入手可能な石材の中で砂岩が最も石器製作に適しているという条件下では、当然砂岩は石材として採用されるであろう。横峯C遺跡についてはこのような在地石材を利用した石材運用の一部であるという説明でほぼ解釈可能であろう（第Ⅴ章）。さらに宮崎県下で出土した資料も含めた説明を試みるならば、剥片石器の使用可能期間が短いなど、砂岩のリスク性を許す行動の中では、それほど問題にならずに利用できることになる。つまり、長距離移動や使用頻度の高さをさほど要求しない生存戦略の中では、砂岩の耐久度が低かったとしても十分に利用価値のあるものと思われる。このような戦略を想定すると、砂岩製石器は、日本列島の後期旧石器時代の剥片石器とほぼ同様に狩猟具や加工具として利用されながら、その利用頻度などに差異があり、相対的に狩猟への比重が低い可能性を示唆する石器と考えることができる。すなわち、既に想定されている植物質資源を利用するシステム（藤本 2000）と調和的な石器であると考える。後期旧石器時代全般に使用される石材と比較して説明を試みると、やはり砂岩は石器素材として最適とは言えない、むしろ不適当な面が強調される場合が多い。しかし、遺跡を残した人間の行動範囲の中で、砂岩製石器がどのような位置を占めていたのかを検討することが重要であるという立場に立てば、地域生態とのかかわりの中から砂岩製石器を上のように解釈できるであろう。

以上、日本列島の後期旧石器時代全般の中でも、剥片石器に利用される例が少ない砂岩が、後期旧石器時代初頭の九州南部では石器石材として使用される例があることについて検討した。九州南部は磨石や台石・石皿を多く出土する遺跡の多い地域であり、それらの礫塊石器の存在からも生態学的に植物質食料にある程度依拠できる生存戦略を想定することが可能である。本地域では、本州島や九州北部で後期旧石器時代の剥片石器に要請されている石器石材の要件と、生存戦略全体における石器への関わりが異なっており、ある程度の砂岩製剥片石器が展開する余地があったという解釈を提示する。

なお、より地域適応が進むと考えられるその後の時代の砂岩製石器の問題について考えてみると、種子島内においては、西之表市鬼ヶ野遺跡・奥ノ仁田遺跡（縄文時代草創期）、中種子三角山Ⅱ・Ⅲ・Ⅳ遺跡（縄文時代早期）、同市浅川牧遺跡（縄文時代後期）、南種子町藤平小田遺跡（縄文時代前・中・後期）で砂岩製の石器が多く検出されている。勿論これらの遺跡でも砂岩は磨石・石皿などの礫塊石器として、さらには集石の礫として多量に遺跡内に持ち込まれたものであるが、浅川牧遺跡や藤平小田遺跡では大型の石器や礫器としても多く確認されている（中原 1996、坂口・堂込・黒川 2002）。鬼ヶ野遺跡ではさらに石鏃や掻器や石核でも確認されている（沖田・堂込 2004）。奥ノ仁田遺跡では硬質砂岩に加えて軟質砂岩が剥片に使用されており（児玉 1995）、三角山Ⅱ・Ⅲ・Ⅳ遺跡では礫器や剥片や石核として組成が確認されている（藤崎・大久保・上床 2004）。一部では良質な石材を利用して石器製作を行いながら、在地石材としての砂岩に適応する状況は長く続いてい

ることがうかがえる。後期旧石器時代の後半期に相当する資料が少ない現状ではあるが、種子島では、砂岩製石器を含んだ石材適応が連綿と続いていたものと考えられる。

おわりに

横峯C遺跡の発掘は、旧石器時代研究に対して常に新しい視点を与えてくれている。先回の調査（坂口・堂込2000）では種Ⅳ火山灰層下位の遺構が確認され、世界的枠組みで見ても重要な遺跡であると注目されている（藤本2000）。今回の調査において検出された8・9号礫群は、現段階では類例がほとんどない興味深い遺構であった（第Ⅴ章）。さらに本編で詳述したような砂岩製の剥片石器という解釈を展開する契機をも与えてくれた。今後、日本の後期旧石器時代の始まりを考える上では、薩南諸島まで含めた南九州は地理的に重要な地域である。その中で横峯C遺跡から砂岩製石器が抽出されることは、日本列島全体の問題を考える際にも看過できないものと考えている。

《引用文献》

旭慶男 1987「第一編第二章第二節　地質」『南種子町郷土誌』21-44

新井房夫・町田洋 1976「広域に分布する火山灰－姶良 Tn 火山灰の発見とその意義－」『科学』46：339-347

安斎正人 1997「台形様・ナイフ形石器石器群(1)」『先史考古学論集』6：79-115

安斎正人 2002a「中期／後期旧石器時代移行期について」『後牟田遺跡』396-408

安斎正人 2002b「後期旧石器時代開始期前後の石器群」『考古学ジャーナル』495：4-5

安斎正人 2004『理論考古学入門』柏書房

安里嗣淳 1992「琉球諸島の先史遺跡と小笠原」『小笠原諸島他遺跡分布調査報告書』59-64、東京都教育委員会

池田朋生編 1999『石の本遺跡群Ⅱ』熊本県文化財報告第178集、熊本県教育委員会

池水寛治 1967「鹿児島県出水市上場遺跡」『考古学集刊』3-4：1-12

沖田純一郎・堂込秀人 2004『鬼ヶ野遺跡』西之表市埋蔵文化財発掘調査報告書(14)

奥野充・小林哲夫 1994「種子島に分布する後期更新世テフラ」『第四紀研究』33：113-117

奥野充・福島大輔・小林哲夫 2000「南九州のテフロクロノロジー－最近10万年間のテフラ－」『人類史研究』12：9-23

小田静夫 1999「琉球列島旧石器文化の枠組みについて」『人類史研究』11：29-46

小田静夫 2000『黒潮圏の考古学』第一書房

小畑弘己・宮田栄二 1999「地域研究50年の成果と展望」『旧石器考古学』58

加藤晋平 1996「南西諸島における土器以前の石器文化」『月刊地球』206

河野長平 1987「第四編　第一章　農業」『南種子町郷土誌』南種子町郷土誌編纂委員会

木崎康弘 2002「九州石槍文化の南九州とその特徴」『後牟田遺跡』330-357

ギャンブル.C（田村隆訳）2004『入門現代考古学』同成社

倉元良文・堂込秀人編 1993『横峯遺跡』南種子町教育委員会

国分直一 1972『南島先史時代の研究』慶友社

児玉健一郎 1995『奥ノ仁田遺跡・奥嵐遺跡』西之表市教育委員会

坂口浩一・堂込秀人編 2000『横峯C遺跡』南種子町教育委員会

坂口浩一・堂込秀人・黒川忠広編 2002『藤平小田遺跡』南種子町教育委員会

佐藤宏之 1992『日本旧石器時代の構造と進化』柏書房

佐藤宏之 2000「日本列島後期旧石器文化のフレームと北海道及び九州島」『九州旧石器』4：71-82

茂山護・大野寅夫 1977「児湯郡下の旧石器」『宮崎考古』3

橘昌信 1997「九州における後期旧石器時代の起源と前半期の石器群」『別府大学博物館研究報告』19：27-38
橘昌信 1999「南九州の旧石器文化－鹿児島県における AT 下位石器群の最近の調査」『鹿児島考古』33：59-73
橘昌信 2000「九州における中期旧石器時代と後期旧石器時代成立期前後の石器群」『別府大学博物館研究報告』20：1-33
橘　昌信 2002「後牟田遺跡 AT 下位石器と九州における後期旧石器時代前半期の変遷」『後牟田遺跡』409-429
橘　昌信 2004「ナイフ形石器文化の登場」『第 9 回国際学術会議 SUYANGGAE and Her neighbours』193-202
橘昌信・佐藤宏之・山田哲編 2002『後牟田遺跡』後牟田遺跡調査団
種子島地質同好会編 1999『種子島の地質』
田中光・藤木聡・飯田博之 2004『野首第 1 遺跡』宮崎県埋蔵文化財センター
田平祐一郎 2002a『立切遺跡－重要遺跡確認調査に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書－』中種子町教育委員会
田平祐一郎 2002b『今平・清水遺跡－ J フォン電波鉄塔工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書－』中種子町教育委員会
田平祐一郎・野平裕樹 2003『立切遺跡－県営畑地帯農道網整備事業（坂井地区）に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書』中種子町教育委員会
堂込秀人 1998「種子島の旧石器文化」『日本考古学協会 1998 年度大会研究発表要旨』日本考古学協会
堂込秀人 2000「鹿児島県における後期旧石器文化の成立」『九州旧石器文化交流会予稿集』23-28
中原一成（石器部分執筆）1994/1996『浅川牧遺跡』鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告⑽
中村真理・藤本正和・佐藤万里江 2002「後牟田遺跡第Ⅲ文化層の礫塊石器類と遺跡空間の構成」『後牟田遺跡』369-381
成尾英仁 1993「南種子町横峯 C 遺跡の火山噴出物」『横峯遺跡』7-14、南種子町教育委員会
萩原博文 2004「日本列島最古の旧石器文化」『平戸市史研究』9：3-40
早坂祥三 1974「種子島の地形・地質」『種子島自然環境保全基本調査』
日高広人・竹井眞知子・柳田裕三 2004『高野原第 5 地点』宮崎県埋蔵文化財センター
福松東一・横田通久・金丸琴路 2004『東畝原第 3 遺跡』宮崎県埋蔵文化財センター
藤木　聡 2003「宮崎県えびの盆地の旧石器」『九州旧石器』7：79-90
藤田　淳 1989「西日本の姶良降灰以前の石器群」『考古学ジャーナル』309：19-24
藤本　強 2000「植物利用の再評価－世界的枠組みの再構築を見据えて－」『古代文化』52：1-15
星野一男・加藤碩一・深部物性データ編集委員会編 2001『本邦産岩石の深部物性データ集』産業技術総合研究所地質調査総合センター
町田洋・新井房夫 2003『新編火山灰アトラス－日本列島とその周辺』東京大学出版会
松藤和人 2004「日本列島における後期旧石器文化の始源」『日本列島における後期旧石器文化の始源に関する基礎的研究』文部科学省平成 12 ～ 15 年度科学研究費補助金基盤研究 (C)(2)研究成果報告書 12610421
宮崎県埋蔵文化財センター 2003『音明寺第 2 遺跡』
宮田栄二 1998「南九州の旧石器文化」『日本考古学協会 1998 年度大会研究発表要旨』日本考古学協会
盛園尚孝 1987「第一編　第七章　土地利用」『南種子町郷土誌』南種子町郷土誌編纂委員会
山口梅太郎・西松裕一 1991『岩石力学入門（第 3 版）』東京大学出版会

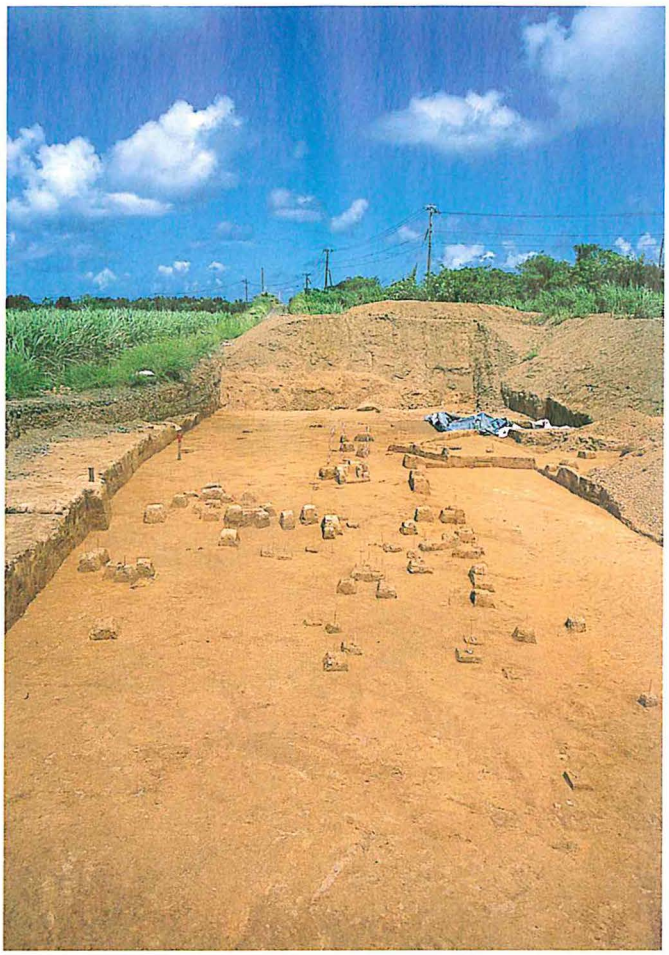
図　　版

横峯 C 遺跡遠景

土層堆積状況

図版 2

横峯 C 遺跡調査区全景



Ⅰ文化層遺物出土状況

8・9 号礫群

8 号礫群

9 号礫群

図版 4

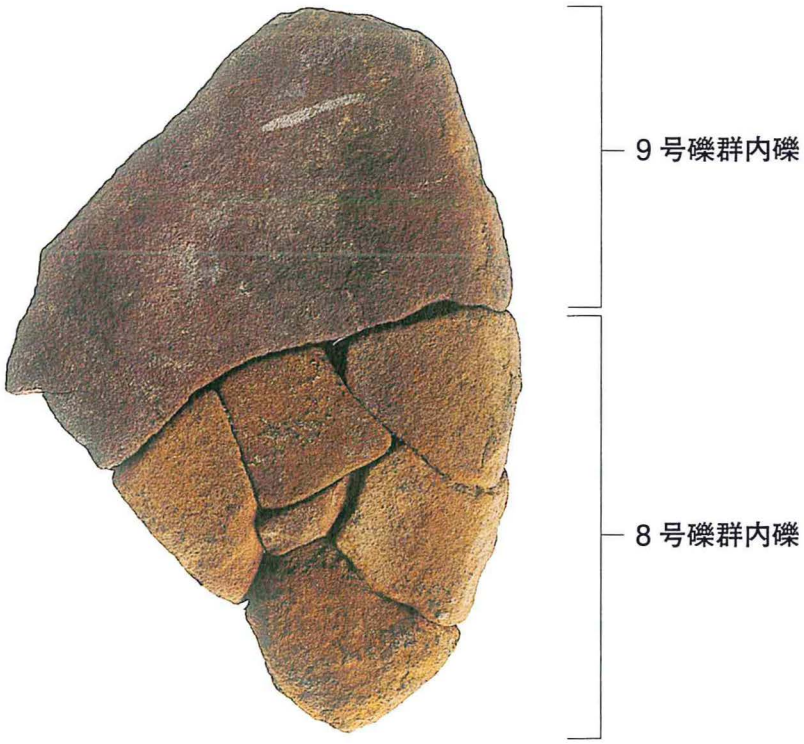
9号礫群(1)

9号礫群(2)

9号礫群(3)

9 号礫群取り上げ状況

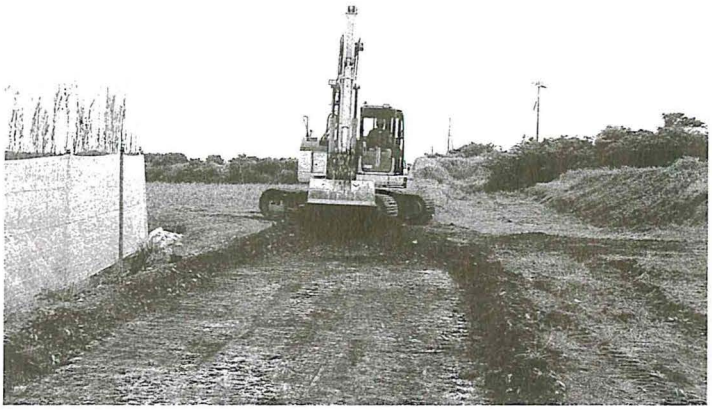
Ⅰ文化層出土遺物



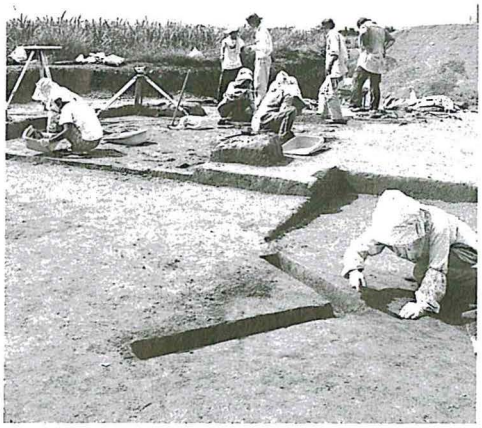
8・9 号礫群　接合資料　17 礫

図版 6

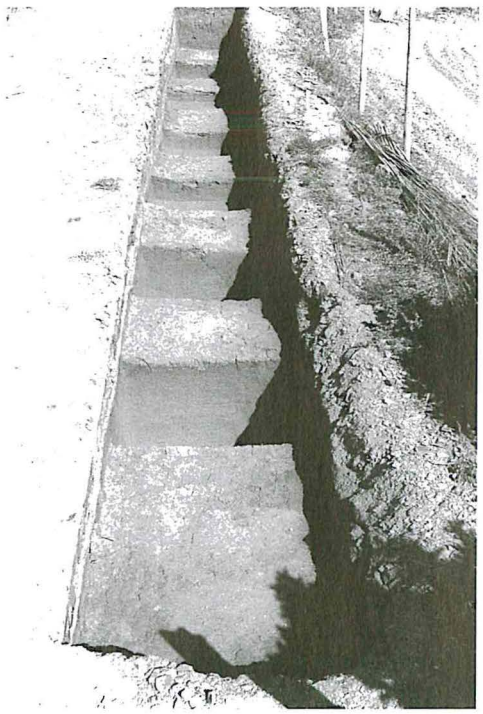
調査前風景



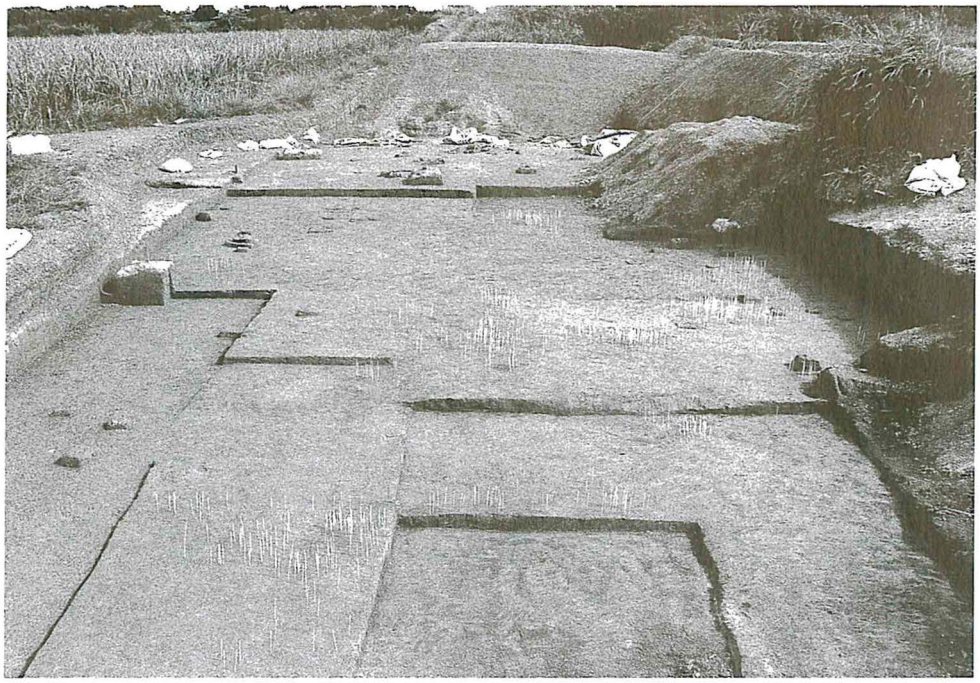
重機使用状況



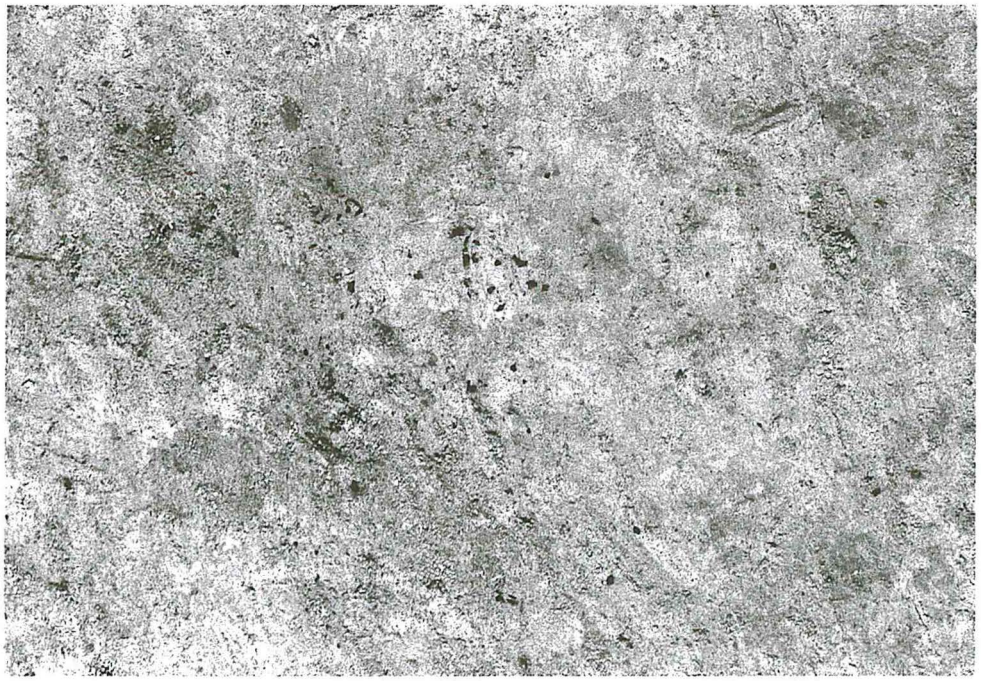
発掘調査風景



拡張トレンチ完掘



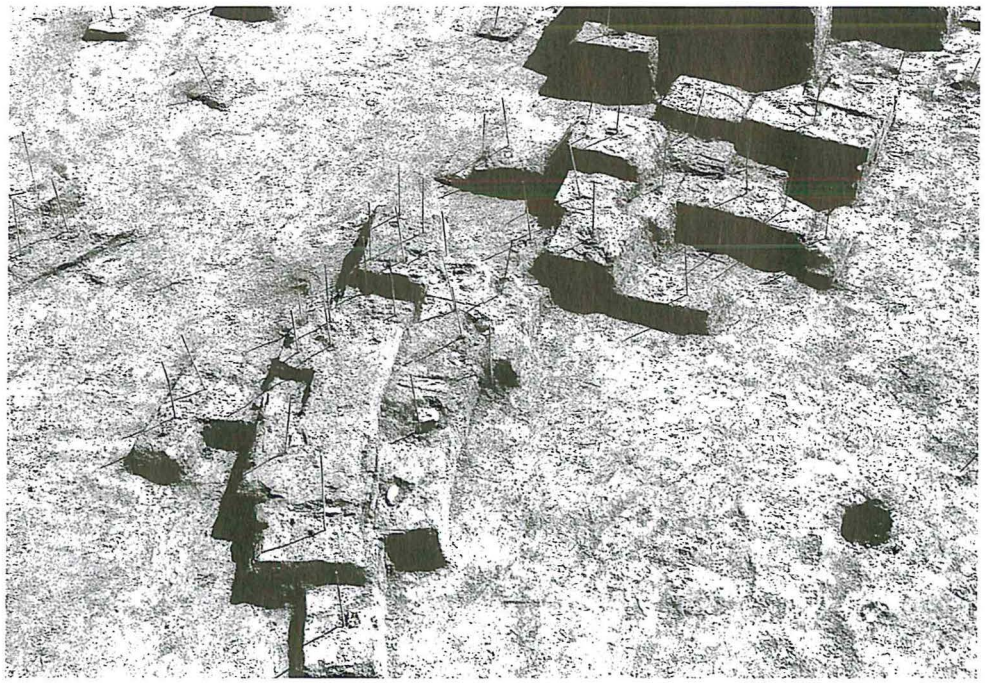
１～９号炭化物集中箇所



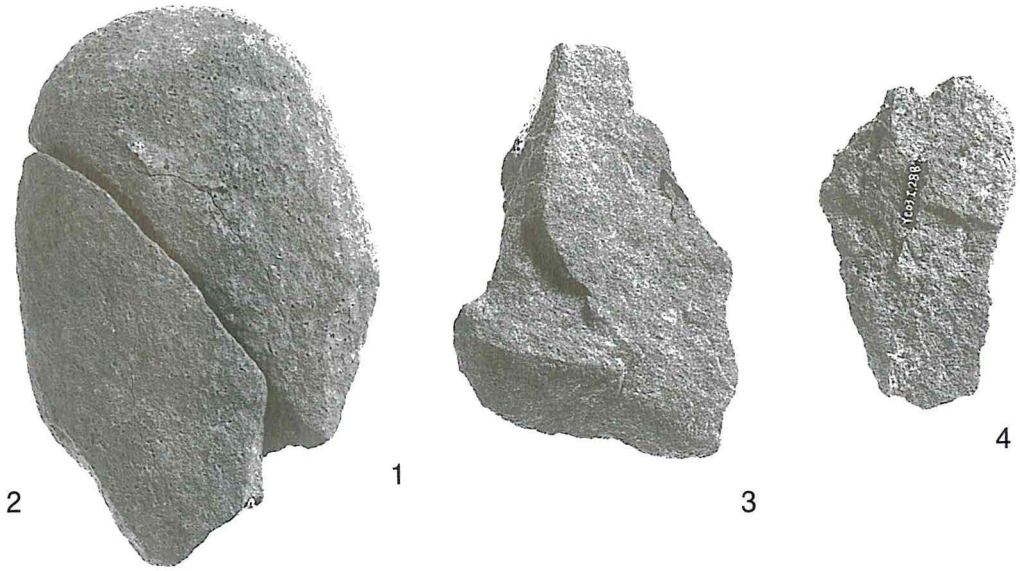
６号炭化物集中箇所

図版 8

10 号炭化物集中箇所及び D-9 区 I 文化層遺物出土状況

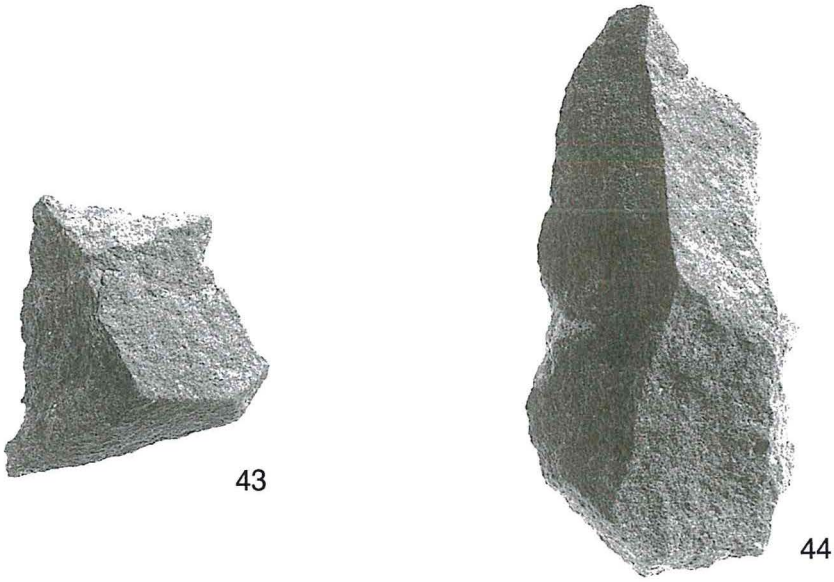


I 文化層遺物出土状況



接合資料 1

Ⅰ文化層出土遺物（表）



接合資料 2

Ⅰ文化層出土遺物（表）

遺物写真(1)

1

接合資料 1

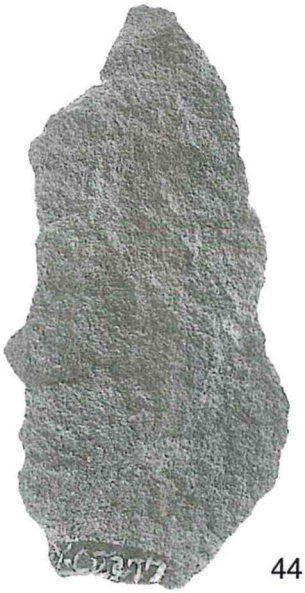
2

3

4

Ⅰ文化層出土遺物（裏）

43



44

接合資料 7

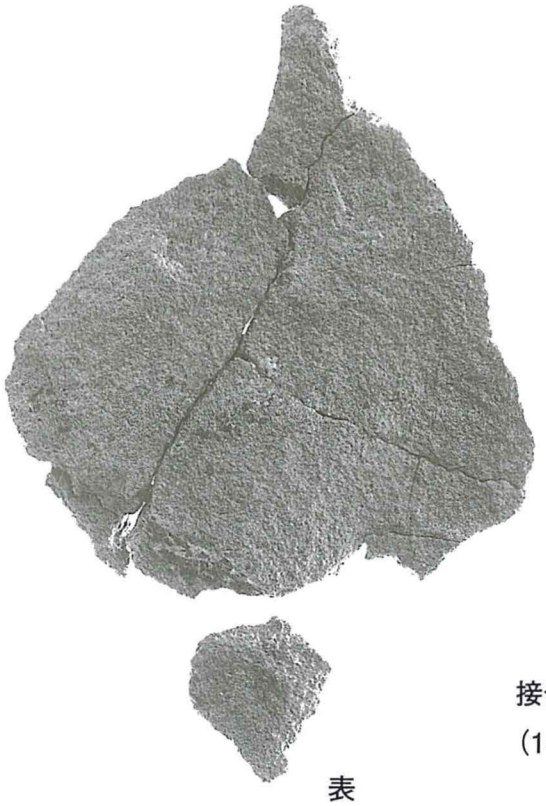
平成 8 年度　Ⅰ文化層出土遺物（裏）

遺物写真(2)

接合資料２　表
（5 ～ 13）

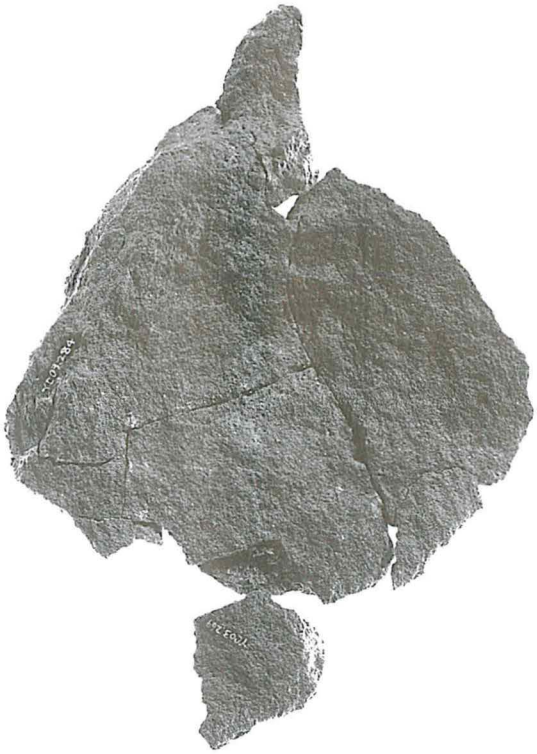
裏
（5 ～ 10）

遺物写真(3)

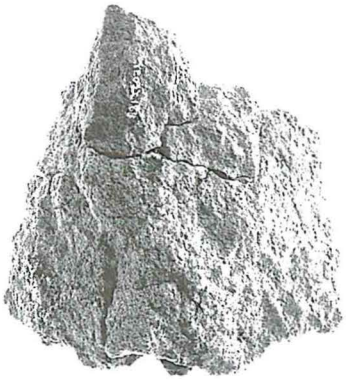


表

接合資料 3
(14 ～ 19)

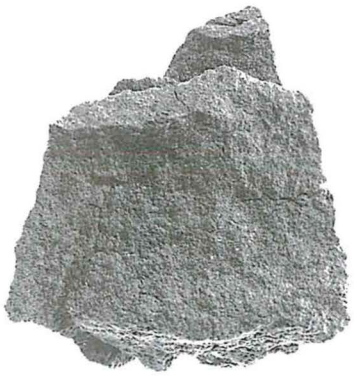


裏



表

接合資料 4
(20 ～ 23)



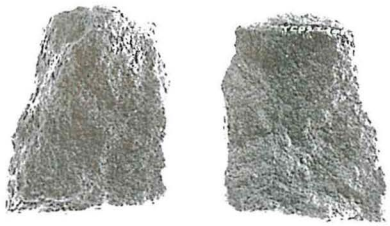
裏

表

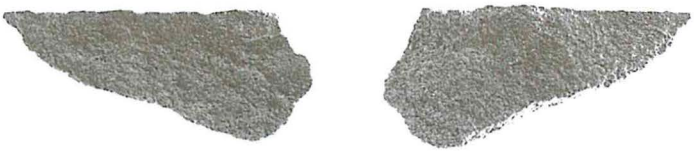
接合資料 5
(24 ～ 25)

裏

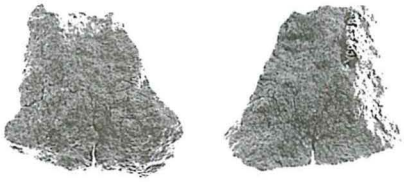
遺物写真(4)



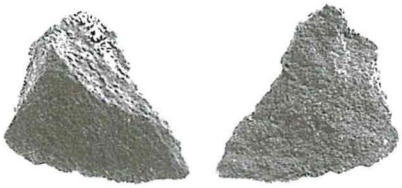
26



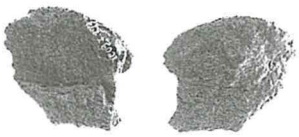
27



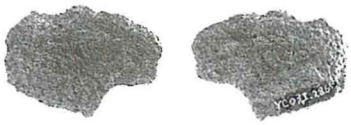
28



29

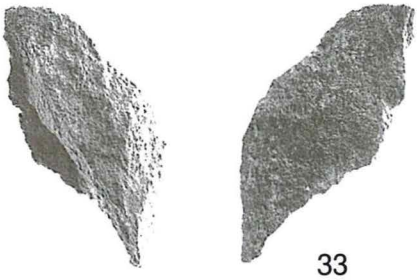


30



31

32

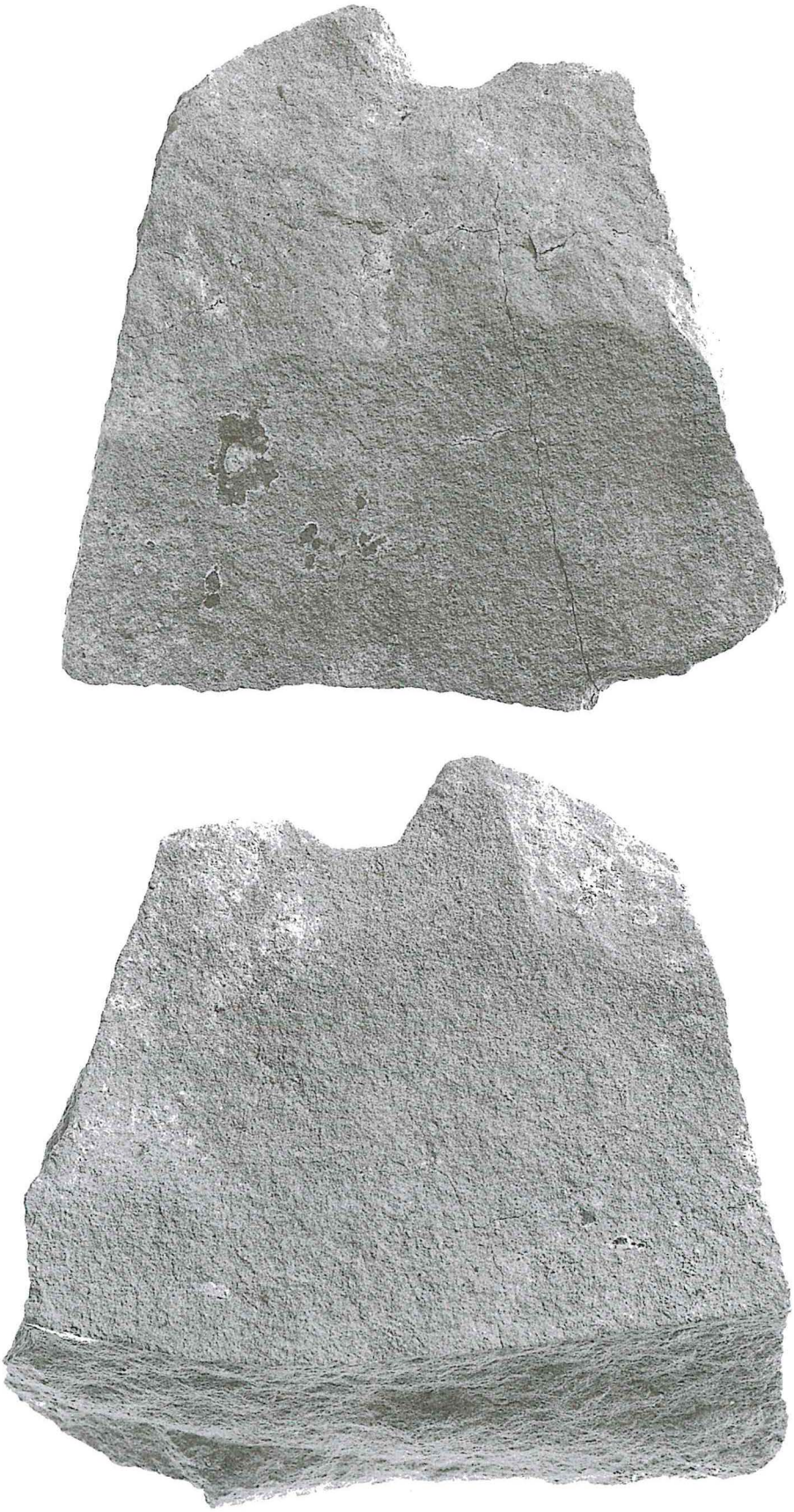


33

34

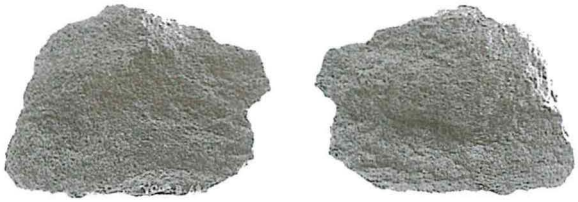
36

遺物写真(5)

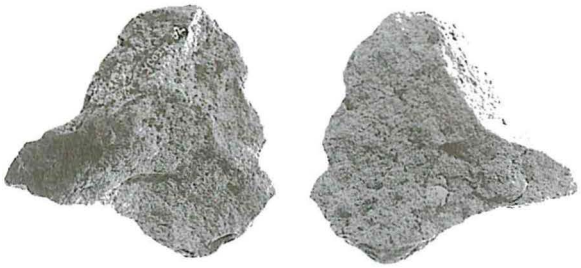


35

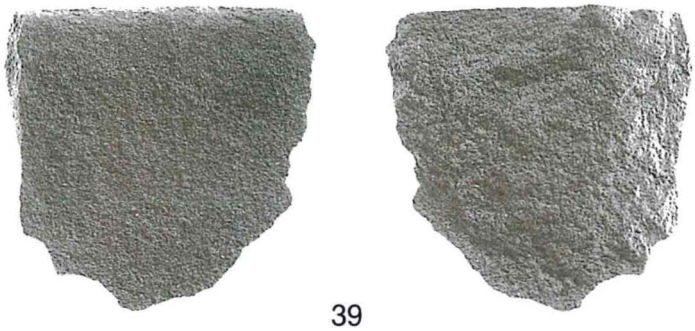
遺物写真(6)



37

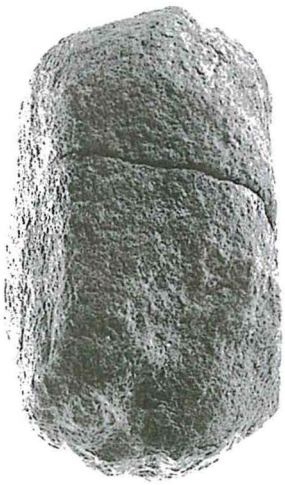


38



39

40



接合資料 6

(41・42)

遺物写真(7)

発掘作業参加者

あとがき

今回の横峯Ｃ遺跡の発掘調査においては，基本的に各文化層中から出土する全ての礫を平板で取り上げました。それは，とにかく出土するもの全てを整理室に持って帰り洗浄をして，それらすべてをありのまま多くの研究者に見ていただいくことが一番だと思ったからです。

報告書作成にあたっても，出土した遺物は砂岩の観察が困難なものでしたが，出来るだけ問題提起をすることで，多くの研究者の目に触れ，議論されることを願って整理をすすめました。

しかし，横峯Ｃ遺跡の持つ情報のうちどれだけを報告できたか，と自問すると，自分の力不足を痛感しているところです。皆様の忌憚のない御叱声・御批判をお願いしたいと思います。

最後に，横峯Ｃ遺跡の調査から報告書作成までお世話になりました多くの方々に心より感謝申し上げます。本当にありがとうございました。

（石堂・中村）

南種子町埋蔵文化財発掘調査報告書（12）

横 峯 C 遺 跡

発行日　2005年3月

発行者　南種子町教育委員会
〒891-3792
鹿児島県熊毛郡南種子町中之上2793-1
TEL　0997-26-1111

印刷所　株式会社　トライ社
〒892-0834　鹿児島市南林寺町12-6
TEL 099-226-0815